

# ふくしま道徳教育資料集

第Ⅱ集

敬愛・つながる思い



# まえがき

昨年度、ふくしま道徳教育資料集第Ⅰ集「生きぬく・いのち」を作成しました。震災等の経験を通して、子どもたちは改めて命の尊さ、家族・郷土の大切さを実感することとなり、震災後の状況を踏まえた福島ならではの道徳教育の重要性を感じたからです。

お陰様で、県内はもとより、全国的にも話題となり、新聞やテレビで数多く報道されました。あるテレビでは、この資料を活用した小学校の道徳の授業の様子を伝えました。また、ある中学校では、資料を活用し、先生方に対する授業研究会を行いました。

ある小学校での道徳の一コマです。アクアマリンふくしまの飼育員の津崎さんをゲストティーチャーとして学校にお呼びし、当時の状況を子どもたちが聞く場面でした。「たくさんの方々から手紙が来たんです。『早くアクアマリンを開けてください。あの楽しいアクアマリンが再開するのを待っています。』そのときに思ったんです。『そうか。こんなときだからこそ、アクアマリンが必要なんだ。』」津崎さんの話を聞き、中には目に涙を溜めて話を聞く子どもおり、感動的な授業となりました。子どもたちからは、「津崎さんたちが一生懸命に努力をしたから再開できたのだと思います。」「あらためて命の大切さ、笑顔の大切さがわかりました。」などの感想を聞くことができました。津崎さんの言葉は、確実に子どもたちの心に響きました。

また、ある中学校での「塩むすび」を資料とした道徳の授業の一コマです。「塩むすび」を読み、その後、意見を出し合う内容でしたが、活発な意見交換がなされました。この授業では、資料を読み取り、主人公の思いを受けとめることができたことと併せて、資料から離れ、現在の自分の状況と重ねて感謝の心を広げることができました。生徒たちからは、「今まで、当たり前だと思っていたけど、家族は私のために毎日がんばってくれている。」「人のために役立つことはうれしい。」など、自分の父や母、家族、地域の人々に対する感謝の言葉や、自己有用感に関する言葉が聞かれました。

福島県教育委員会では、この第Ⅰ集に加え、今回、家族愛や友情等を中心にした第Ⅱ集「敬愛・つながる思い」を作成いたしました。「敬愛」については、後述の『特別寄稿』に、「敬愛」とは、相手と分かち合い、支え合い、そして高め合うという「合い」の力で、互いの心を豊かに育んでいくこと」としており、震災から三年が過ぎた今、復興に向けて、福島県民がまさに問われるものであると感じております。今の福島の課題には、「風評被害の払拭」と、「風化の防止」があります。まだ避難生活を余儀なくされている方々をはじめ、多くの人々が不安な生活を送っている状況は変わりませんが、震災当時から比べると、人と人とのつながりの希薄化が進んでいるような気がしてなりません。全世界から賞賛された福島の人々の「思いやり」や「和の心」の素晴らしさを、改めて考える時期に来ているのではないかと思います。そして、素晴らしいこの福島の心を風化させてはならないと強く思います。

さて、昨年度の資料「生きぬく・いのち」、本資料「敬愛・つながる思い」、来年度作成予定の資料「郷土愛・ふくしまの未来へ」（仮称）の三部作は、道徳教育の資料として活用することはもとより、震災の記録としても残しておきたいという思いで作成しております。今後、薄れていく震災の記憶を取り戻し、福島県民にとって本当に大切な心とは何なのかを考える機会として、この資料集を是非手にとっていただくことを願っております。

学校の教職員の皆様にお願いたします。今の子どもたちに、「福島生まれ」「福島育ち」として、誇りをもって人生を歩んでいただくためにも、福島ならではの道徳教育を全学校で展開し、社会を生き抜く強さや人に対する思いやり、郷土を愛する心を持ち、福島の未来を築く力になれる人の育成を推進することが大切であると考えます。是非、本資料を含め、前作も併せて活用していただきますよう、重ねてお願いいたします。

最後に、第Ⅱ集の発刊に当たり、貴重な特別寄稿を賜りました東京学芸大学教授永田繁雄様、お忙しい中、資料作成の会議のたびに丁寧なご指導をいただき、全体の監修をしていただいた上越教育大学副学長・同大学院教授林泰成様、同大学教授早川裕隆様、同大学准教授白木みどり様、表紙を描いていただきました朝倉悠三画伯、本資料の執筆に当たっていただきました多くの作成委員の先生方、作成に当たって、取材にご協力いただきました関係の方々には敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げます。

福島県教育庁義務教育課長

飯村新市



# 特別寄稿 「様々つながりの中で豊かに育む敬愛の心」

東京学芸大学教授 永田 繁雄

## 1 つながりの中に息づいている「お互いさま」

「お互いさまですか」……自分自身も大変な時なのに、相手の元に駆け付けて惜しみなく手を差し伸べ、そのように語りかける。この「お互いさま」とは、互いの苦しみや辛さを分け合い、心と心をつなぐ小さなボランティア精神だと言えます。するとまた、「おせわさま」「お疲れさま」「おかげさま」などと言葉が飛び交う。

このように接頭と接尾に「お」と「さま」をはさんで相手に敬愛の思いを伝える言葉は、私たちの生活の中で昔から大事にされ、息づいてきました。

しかし、ややもすると、私たちはこれらの言葉を、ひと頃、どこかに置き忘れてかかっていたような気がします。今こそそれを呼び戻し、私たちの生活の土壌に根付くキーワードとして、将来にしっかりと残していかななくてはなりません。

## 2 敬愛の心は往還と広がりの中で確かなものになる

「敬愛」には、文字どおり「尊敬」と「親しみ」の心があります。「敬」とは、相手を尊び大切に思い、自分の行いを慎み、礼を尽くすことです。また、「愛」とは、相手を慈しみ、可愛がり、深い親しみの情で相手に寄り添うことです。このように、「敬愛」とは、相手と分かち合い、認め合い、支え合い、そして高め合うという「合い」の力で、互いの心を豊かに育んでいくことなのです。

それは、様々な形で生活や活動の中に表れ、育まれていきます。

(1) 思いやりと感謝の心の往還の中で敬愛の心が深まる  
まず、相手への礼儀や思いやりが感謝の心を生み、感謝の心がまた思いやりを強めるという往還の関係の中でそれが深まっています。

○礼儀や思いやりなど……目の前の相手を大事にするからこそ、その心が行いや振る舞いに表れます。それが礼儀です。また、相手を一人の人間として大切にし、慈しむ礼節などの中から、思いやりの心の伴った親切な行為が広がります。思いやりとは、自分が相手に能動的に接するときの心の在り方で、相手の立場を尊重し、いたわり、励ます生き方として表れます。その心の底には人間に対する深い理解と共感に基づく人間尊重の精神が横たわっています。

○感謝の心など……そして、それを受けた側は、相手への感謝の思いが深くあります。感謝の心とは、主として他の人から受けた思いやりに対する心の向

き方です。それは、他者の思いやりを素直に受け止めるときに抱く情念であり、現在の自分が多くの人の支えの中にあることを感じることで一層強められていきます。

(2) 同心円的な広がりの中で敬愛の心が強められていく

また、それは、心のつながりの同心円的な広がりの中で強められていきます。

○身近な家族の中で……自分の成長を願い、無私の愛情をもって育ててくれた父母や祖父母などへの敬愛の念をもつことが家族愛の一つの核です。家族には様々な形がありますが、成員相互の信頼と愛情によって互いが深い絆で結ばれます。

○友だちや先輩と共に……学校は地域の核であり、何かことがあれば頼れる居場所になります。そこには長く培われた校風もあります。共に学ぶ友だち相互の信頼、教職員や先輩への親愛と感謝の気持ちなどの中で敬愛の心は育ちます。

○地域や郷土の一人として……私たちは地域や郷土に住むことの喜びとともに、そこに根付く伝統と文化に親しみを深めています。また、それらを守り育ててきた先人や高齢者たちの努力に思いを寄せ、感謝とともにそれを今後へと引き継ぎ発展させていこうとする気持ちを強めています。

○さらに多くの人の広がりの中で……その思いは、我が国や諸外国の広がりの中にも見られます。多様な伝統と文化が同居する中で、多文化への相互理解を寄せ、多くの知らない人々との支え合いから人間愛の精神が育まれます。

これらは、ちょうど、家庭というホームベースと、学校・様々な施設などの居場所という幾つものベースがあつて、その全体が地域や郷土というホームグラウンドの中で互いの心をつなげていると描くことができます。

## 3 敬愛の心をこれから生きる一人一人の心の宝物として

環境保護活動によってノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんは、私たちの「もったいない (MOTTAINAI)」という言葉の中に敬愛の心を見出していました。彼女は最初、三つのR (リデュース・リユース・リサイクル) について語っていましたが、のちに、そこに四つ目のR (リスペクト) を付け加えたのです。私たちが「もったいない」と感じる自然な心の中には「私にはもったいないです」などと相手を正面から受け止めて大事にしようとする心があるのです。

心のつながりの中で育つ敬愛の心は、私たちの命が育つゆりかごであり、前向きに生きる心の支えとなり、活力となります。この一冊に織り込まれた多彩な資料群で共に学び合い、深め合うことによって、その心が子ども一人一人の中に将来にわたって長く宿る宝物になっていくに違いありません。



## —— 本書の構成について ——

本書は、道徳教育資料集として作成され、四部構成で編集されております。

第Ⅰ章は、小・中・高等学校の読み物資料です。いずれも、震災後の心温まるエピソードをもとに開発したものです。全体を通して読むことも考慮し、似た内容が続かないように、バランスよく並べてあります。

東日本震災後の福島県で、家族や友人、地域の人々と助け合いながら前向きに生きている姿、また、福島県民を支援してくださった方々への感謝の気持ちを深く受け止めて生活している姿を、「敬愛」をテーマに作成しました。

対象学年については、弾力的に活用していただきたいと考え、小学校は、小学一・二年生（低学年）、小学三・四年生（中学年）、小学五・六年生（高学年）、中学一・二年生、中学二・三年生としました。

なお、本文中の漢字の表記については、それぞれの下の学年を基準とし、未習の漢字には、初出にルビをふっています。

第Ⅱ章は、読み物資料の活用例です。資料分析や授業構想を練る際に活用ください。資料は、全編福島県独自に作成したものです。東日本震災に関連した資料については、今なお、被災した児童生徒、被災した児童生徒を受け入れている学校等、震災の影響が広範囲に及んでいることを考慮して「五 指導上の留意点及び配慮事項（高等学校については、四）」を設けました。

第Ⅲ章は、資料を開発し活用するための実践事例集です。資料を授業に活用するまでの手順や留意点を中心に、実際に取り組んだ実践を振り返りながら報告しております。各学校で、資料を開発する際の参考になることと思えます。

巻末には、平成二十五年度「ふくしま子ども宣言」作文コンクール及び「モラル・エッセイ」コンテストの優秀作品を収録しました。授業の導入や終末に紹介する以外にも、読み聞かせ等、幅広く活用ください。

本書が教室で多く活用され、福島県の児童生徒の豊かな心を育むとともに、励まし、勇気づけることを願っております。

# 目次

## 第Ⅰ章 読み物資料

### 1 小学校編

(1)	おむかえ	10
(2)	ぼくたちの学校	14
(3)	がんばらやんばい	18
(4)	舞台の上で	22
(5)	私の誕生日	26

### 2 中学校編

(1)	五〇〇人の大家族	32
(2)	手渡されたパン	36
(3)	この町のために	40
(4)	仮校舎	44
(5)	たった一秒の「ありがとう」	48
(6)	紫紺の襷	52
(7)	家路	56

### 3 高等学校編

(1)	もう一人の八重	64
(2)	日本のマザーテレサ「井深八重」	70
(3)	私の明日	74
(4)	道標	78
(5)	三十年後の桜	84

## 第Ⅱ章 読み物資料の活用例

### 1 小学校編

(1)	おむかえ	84
(2)	ぼくたちの学校	85
(3)	がんばらやんばい	86
(4)	舞台の上で	87
(5)	私の誕生日	88

## 2 中学校編

- (1) 五〇〇人の大家族……………89
- (2) 手渡わたされたパン……………90
- (3) この町のために……………91
- (4) 仮校舎……………92
- (5) たった一秒の「ありがとう」……………93
- (6) 紫紺しこんの襷たすき……………94
- (7) 家いえ路じ……………95

## 3 高等学校編

- (1) もう一人の八重……………96  
〈日本のマザーテレサ「井深八重」〉
- (2) 私あしたの明日……………97
- (3) 道みち標しるべ……………98
- (4) 三十年後の桜……………99

## 第三章 実践事例集

### 1 小学校編

歌が心を一つにする……………102

『I love you &

I need you ふくしま』

〈メッセージソングを活用する道徳教育〉

### 2 中学校編

聞いて紡ぐ 震災時の思い……………108

〈「聞き書き」を通して

家族について考えさせる道徳教育〉

### 3 高等学校編

部活動を通して、豊かな心を育てる……………114

〈ミーティングを通じた道徳教育〉

「ふくしま子ども宣言」作文コンクール作品集……………122

「モラル・エッセイ」コンテスト作品集……………125

「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表……………132

作成委員・参考文献等……………134

# 資料一覧

校種	対象	資料名	内容項目	資料ページ	活用例ページ
小学校	1・2年	おむかえ	4-(3) 家族愛	10	84
	5・6年	ぼくたちの学校	4-(6) 愛校心	14	85
	3・4年	がんばらやんばい	2-(4) 尊敬・感謝	18	86
	3・4年	<sup>ぶたい</sup> 舞台の上で	2-(3) 信頼・友情	22	87
	5・6年	<sup>たんじょう</sup> 私の誕生日	4-(5) 家族愛	26	88
中学校	1・2年	五〇〇人の大家族	2-(2) 温かい人間愛 思いやり	32	89
	1・2年	<sup>わた</sup> 手渡されたパン	2-(6) 感謝	36	90
	1・2年	この町のために	1-(5) 自己の向上	40	91
	2・3年	仮校舎	2-(6) 感謝	44	92
	2・3年	たった一秒の「ありがとう」	2-(6) 感謝	48	93
	2・3年	<sup>しこん たすき</sup> 紫紺の襷	1-(2) 希望・勇気 強い意志	52	94
	2・3年	<sup>いえ</sup> 家 <sup>じ</sup> 路	2-(6) 感謝	56	95
高等学校		もう一人の八重 ～日本のマザーテレサ「井深八重」～	2-(2) 人間愛	64	96
		<sup>あした</sup> 私の明日	4-(6) 家族愛	70	97
		<sup>みち</sup> 道 <sup>しるべ</sup> 標	1-(5) 個性の伸長	74	98
		三十年後の桜	1-(2) 希望・勇気	78	99

第

I

章

読み物資料

1

小学校編



## おむかえ

へいせい二十三年三月十一日、わたしの すんで いる ふくしまけんで 大きな  
 じしんが おきました。わたしたちは、先生と いっしょに こうしゃの そとに  
 ひなんしました。そして、じしんが おわったあと、みんなで たいいくかんに  
 入りました。いえの 人が おむかえに くるのを まつ ためです。  
 じしんの せいで でんわは できなく なって いました。車が はしれなく  
 なった どころも あった そうです。

わたしは、なかよしの みゆきちゃんと いっしょに、おむかえを まっていました。

(おかあさん、早く こないかなあ。)

(もう そろそろ くるかな。)

ともだちは おむかえが きて、つぎつぎと かえって いきました。

みゆきちゃんのおかあさんも おむかえに きました。

「ひなちゃん、じゃあね。」



「うん、みゆきちゃん、さようなら。」

わたしは、ひろい たいいくかんで、すくなく なった  
ともだちと、おむかえを まって いました。そとが  
だんだん くらく なって きました。

(もうすぐ よるに なっちゃう。おかあさん、なにを  
して いるんだろう。)

(このまま おむかえが こなかったら どうしよう。)

さむくて、さむくて、からだか すこし ふるえました。

「ひな。」

とつぜん 名まえが よばれ ました。ふりかえると、たいいくかんの 入り口ぐちに

おねえちゃんが 立たって いました。おねえちゃんの  
いきは、まっ白しろ でした。わたしは

「おそいよ。なに してたの。」

と いいました。そのとき、おねえちゃんが すこし  
さびしそうな かおを しました。

わたしは、おねえちゃんの 手てを ぎゅっと にぎ  
りながら、くらい みちを あるいて いえに かえり



ました。おねえちゃんの 手は とても つめたかったです。

よるに なって、かぞくの みんなが そろいました。

じしんの せいで 水みずが 出でなく なって いたので、すいはんきに のこって いた  
ごはんを おにぎりを つくる ことになり ました。

おかあさんと おねえちゃんが おにぎりを

にぎりながら、はなしを して いました。

「ひなの おむかえに 行って くれて ありがとう。」

「うん。でも、とっても おそく なっちゃったの。

でん車しゃが とまってて、えきから 三さんじかん あるいて

いえに かえったの。そうしたら、ひなが いえに

いなかっただから、しんぱいで 小学しょうがっこう校まで いっしょう

けんめい はしって いったんだけど……。」

「ごめんね。たいへん だったのね。」

「うん。でも、ひなが ぶじで よかった。」

わたしは、その はなしを きいて、どきっと しました。

その あと、ちよつと つめたい おにぎりを みんなで たべながら、おにいちゃんも、  
いえの まわりや 小学校までの みちを あるいて わたしを さがして くれた ことを



しりました。わたしは むねが きゅうつと なりました。

あれから 一年。<sup>いちねん</sup> おねえちゃんは 大学生に<sup>だいがくせい</sup>  
なりました。一人<sup>ひとり</sup>で とうきょうに すんで  
います。じしんが あったり、大きな  
たいふうが きたり すると、おねえちゃん  
のことが とても しんぱいになります。

「もしもし、おねえちゃん、だいじょうぶ。  
こんどは いつ かえって くるの。わたしが  
えきまで おむかえに いって あげるからね。」

（「教材作成委員会」作成）





## ぼくたちの学校

「史哉、元気か。」

受話器から佑大君の声が聞こえた。

「ゆう君、元気だよ。明日だね、始業式。」

「うん、楽しみだね。ひさしぶりだもんね。」

三週間ぶりの友達の声だった。

三週間前の地震は、家へ帰る途中に起きた。ぼくは、心配してさがしに来てくれた先生といっしょに、高台へ必死にげて無事だった。小さい学年の子が泣いていても、ぼくはおそろしくて、どうすることもできなかった。いつもは楽しくみんなで遊んでいた学校の前の海がふくらんでせまってきたこと、晴れていた空が急に暗くなり、雪がふってきてとても寒かったことは、今でもわすれられない。ぼくの学校は、大津波で校舎の一階と体育館の全てが押し流された。学校近くの家々も津波ではかいされた。

その後、津波で家がこわれた友達が次々と町をはなれていった。原子力発電所の事故のため、ひなんしていった友達もいた。多くの仲間がいなくなったが、別れの言葉をかかわすこともできなかった。ずっと学校にも行けず、先生にも会えず、だれとも話すことも遊ぶこともできない日々。真っ暗なまどの外をながめながら思った。

(みんなは、どうしているんだろう。)

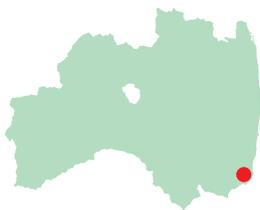
そんなときに、始業式のれんらくが来たのだ。ぼくたちのように震災しんさいのえいきょうで学校が使えなくなつた子どもたちは、市の文化センターで合同入学式や始業式を行うことになった。

学校が始まる日、会場に行くと、友達や先生方がぼくをむかえてくれた。「大丈夫だった?」「元気だった?」「心配してたよ。」こんな声があちらこちらで飛びかっていた。

始業式が始まつた。校長先生が、だんじょうからぼくたち一人一人を見つめながら、ゆつくりと話された。

「わたしたちの学校は、津波の被害ひがいのために使えませんが、となりの小学校の教室を借りることができました。しばらくはバスで登下校することになります。校舎が違って、みなさんが集まるところが永崎①ながさき小学校です。先生たちがいます。たくさんの仲間がいます。みんなで力を合わせてがんばりましょう。」

ぼくは、校長先生の言葉を聞いて、自分にでき



① いわき市立永崎小学校



ることは何だろうと考えた。

今までとちがう校舎、バスでの登下校、ろうかにある図書館、パネルで仕切られた教室。今までとはちがうことばかりで、とまどうことが多かった。だから、登下校のバスの中は、ぼくにとって、一日のきん張感から解放され、ほっとできる場所だった。ぼくは六年生として、バスが海岸の横を通るときは、小さい学年の子どもたちに、明るい声で「だいじょうぶだよ。」と声をかけた。海岸ぞいを通るとき、バスの中は、息さえも止めているかのように静かだったからだ。だれもが大好きだった海を見ようとはしないのだ。

そんなことが続いたある日、帰りのバスの中で、一年生の子が泣き出したことがあった。わけを聞いても泣くばかり……。周りの二年生や三年生はこまってしまっていた。ぼくは、「元気を出そうよ。」「もうすぐ家に着くよ。」と声をかけたが、一年生は泣くばかりだ。みんなの視線がぼくに集まる。ぼくも泣きたくなった。するとそのとき、ゆう君がとつぜん校歌を歌い出した。

「波さわやかにきらめいてー 燃える希望の日がのぼるー おどるむねの調べのせてー とどろく海こえ歌よ飛べ。」

歌声は少しずつ重なり、やがて静かだったバスの中が大きな歌声で包まれた。隣にすわっていたゆう君が、

「史哉。ぼくたちのいるところが学校なら、このバスの中も学校だね。」

と言った。ぼくも、えがおでうなずきながら、大きな声で歌った。少しずつ、力がわいてきた。ど

るだらけの校舎をそうじしてくれた先生方や地域ちいきの人たち、たくさんのおうえんの声を届けてくれた全国の人たち、ぼくたちの学校の再開のために力をつくしてくれているたくさんの人たちにとどくようにと。気がつけば、いつのまにか泣きやんだ一年生も照れくさそうに歌っていた。

「ぼくたちの卒業式までに学校が直るといいな。」

「そうだね。そのときも、大きな声で校歌を歌おうね。」

季節は、夏になっていた。今日きょうも下校のバスの中で、みんなが校歌を歌っている。永崎の海はいつものようにおだやかにかがやいていた。

（「教材作成委員会」作成）



# がんばらやんばい

地しんが起きてから、ぼくの町では水道が使えなくなった。そのため給水所になった中央公園に、毎日自動車で、水をもらいに行く生活が始まった。給水車から自動車まで水を運ぶのがぼくの仕事。このときはじめて、水が重いということを知った。

そんな中、福島第一原子力発電所で事が起こった。

「もしかしたら、ひなんするようになるかもしれないな。」

お父さんが言った。

「ガソリンをのこしておかなければいけない。あしたの水くみは歩いていこう。」  
よく日から、自動車で行っていた公園まで、歩いて行くことになった。

「お父さん、水くみ、いつまで行かないといけないの。重いから車で行こうよ。」

ぼくの言葉に、お父さんは悲しそうな顔をした。

次の日の朝、町内会長さんがぼくの家に来て来た。

「近くの集会所に給水車が来てくれることになりました。十時から給水できますよ。」

集会所までなら歩いて五分もかからない。

「水くみに行くぞ。」

お父さんは、せなかのリュックサックに入るだけのペットボトルを入れて、両手にはウォータージャグを二つ持って家を出る。お兄ちゃんはやかんを両手に持って後からいっしょについて行く。

ぼくも、あわてて小さいペットボトルを持って、お兄ちゃんの少し後ろをついて行った。

集会所に来ていた給水車は、きのう中央公園に来ていた給水車とはちがっていて、じゃ口がついていなかった。太いかんからドボドボといきおいよく水が出てくる。ペットボトルを持ってきた人が多かったが、のみ口が小さくて水がなかなかうまく入らない。あせって水を入れようとしているおじいさんの後ろで、いらだっている人たちの顔が見えた。

「ペットボトルの人、ここにやらんでください。」お父さんがとつぜん言った。そして、せっかくくんだウォータージャグの水を、みんなのペットボトルに入れ始めたのだ。ジャグで入れるとペットボトルはすぐにまんタンになった。すると、お兄ちゃんがやかんで、給水車の水をお父さんのところまで運び始めた。いつのまにかウォータージャグにならぶ人の数もふえて、列は五列れつになっていた。

「ああ、そうしてもらえると助かるたすばい。ざつ①となかばつてん、がんばらやんばい。」とつぜん後ろから声をかけられ、ぼくはびっく



① たいへんだけれど、がんばってください。

りした。

それは、水道局の人だった。(今、なんて言ったんだらう。) と思っていると、

「ああ、そうか。福島の人には分からない言葉だね。えっと……、『たいへんだけれど、がんばってね。』という意味になるかな。きみのお父さんのおかげで助かったよ。」

そう言う水道局の人のせい服には「久留米市水道局」と書いてあった。その話が聞こえたのだから、お父さんが手を止めて近づいてきた。

「久留米って、福岡県の久留米市ですか。」

お父さんは、水道局の人に聞いた。

「久留米市から、十一日の夜に、給水車で出発したばい。」

よく見ると、給水車にも久留米市水道局と書いてあった。お父さんはおどろいていた。

「ありがとうございます。たいへんでしたね。」

「いやいや、ざつとなかは、みなさんばい。がんばらやんばい。」

「本当に、ありがとうございます。とっても助かりました。」

水くみが終わっても、お父さんはまた同じように水道局の人にお礼を言っ



② たいへんなのは、みなさんですよ。

ていた。町内会長さんも、お兄ちゃんも、近所の人も、みんなていねいにお礼を言っていた。

「あしたも来ますから。」

久留米市水道局と書かれた給水車は、集会所から帰っていった。

家に帰ってから、ぼくは、久留米市の場所を調べた。お兄ちゃんが、千四百キロメートルぐらいはなれていること、車で十五時間ぐらいかかることを教えてくれた。

「お父さん、あしたも水くみに行こう。」

「そうか、助かるよ。ありがとうな。」

お父さんはうれしそうに言った。そう、ぼくには、久留米市の水道局の人たちにつたえていないことがある。あしたはしっかりとつたえよう。

ぼくは、ペットボトルをリュックにつめこんだ。

（「教材作成委員会」作成）

## 舞台ぶたいの上うへで

ぼくは何をやっても気持ちに乗らない。新学期が始まり、教室にけいじする顔写真をとっているときもそうだった。

「はい、わらって。」

と先生に言われても、

(急に言われても、すぐにはわらえないよ。)

と思ってしまう。

東日本大しんさいひがしにほんだいが起きてから、ぼくの住む地区すむちくもほうしや線りせんりようが高く、ひなんしななければならなくなった。お母さんかあが県内けんないでひなんできる地いきをさがし、ここ南会津町みなあいづまちにひなんすることになった。南会津は生まれてはじめての土地。ぼくの生まれ育った浜通りではほとんどふることのない雪がたくさんふる町だ。いつも相談そうだんにのってくれる父は仕事しごとのため地元はまどおにのこり、なかのよかつた友達だちともはなればなれで、楽しいことは何一つない。ぼくは、一人ぼっちになってしまった感じかんがした。

ひなんした南会津町には、日本三大祇園祭ぎおんまつりの一つがあり、今も「子ども歌舞伎かぶき」<sup>①</sup>がのこされている。ほぞん会や役場やくばの方々に教えてもらって、今年ことしはぼくたちの学年が「子ども歌舞伎」にちようせんする。二月には県の文化センターでのこうえんも決まった。えんもくは「絵本えほん 太功記たいこうき」<sup>②</sup>。



① 小学生が主体となつて歌舞伎をえんじる。祇園祭においては屋台でえんじられる。  
 ② 地元の小学校では学習発表会等でえんじ、発表する機会をもうけている。

明智光秀を主人公にした歌舞伎だ。主人公の光秀が、うら切り者として悲しいさいごをむかえる話だ。ぼくは、そんなえんもくをやりたいとは少しも思わなかった。

歌舞伎の練習も進み、いよいよ役者を決めることになった。すると

「十次郎役は、健君にやってもらいたいです。せつかく南会津に来たのだから、でんとうてきな歌舞伎を知ってほしいです。」

と、近所の正樹君がぼくをすいせんしたのだ。光秀のむすこで、味方のぐんが負けたことをつたえる重要な役である。もともとやりたくないのに、役までつくなんて。ぼくは顔を上げられなかった。でも、結局クラスのみんなにおされ、気が進まないまま十次郎役を引き受けてしまった。

③「……親人、此の所に御座あつてはあやうしあやうし、片時も早く

本国へ、帰らせ給え、早う早う」

深いきずを負いながらも、父親を気づかうという大切なせりふ。練習のたびに、

「首のふり方が大きくなって上手だね。」

「長いせりふを、よくおぼえてきたね。」

と、友達は何くをはげましてくる。でも、どんな言葉をもらっても、ぼくの気持ちは乗らなかった。

発表会が近づいたある日、東京から歌舞伎の先生が来て、ぼくた



② 歌舞伎の演目。明智光秀の「三日天下」を題材にして書かれた。

③ 十次郎のせりふ。「父上、ここにいらつしやつたのではとてもきけんです。一時も早く国へお帰りください。早く、早く」

ちの舞台のけいこをつけてくれた。そのとき

「君、なかなかいい声してるな。よく通った声は役者にはもってこいだよ。」

と、思いがけずほめられた。正樹君まで、

「だから健君をすいせんしたんだ。」

なんてじょうだんめかして話す。ぼくは急にてれくさくなつて言葉が見つからなかった。

ことば

えんぎだけではなく、舞台のセットや小道具も自分たちで

作る。

「よろいの色はこれでいいのかな。」

「後ろのかべはここでいいかな。」

など、みんな自分の役わりに一生けん命取り組んでいる。

④きだゆう

義太夫の声は、日に日に大きくなっているのが分かる。友達も、それを教える先生も、みんな本気だった。歌舞伎の発表会をせいこうさせたかったからだ。舞台に立つのは、数人の役者だけれども、それをささえるためにみんなが本気でがんばっている。気がつくと思はれてはいられないと思うぼくがいた。

舞台のそでで、出番を待っていたぼくに、歌舞伎の先生がそつと教えてくれた。

「正樹君も、県外からの転校生だったんだよ。お父さんの仕事の都合でね。かれも子ども歌舞伎を



④ 三味線とともに、情景や心情などを表したり、話を進めたりする役。



通して、この町の子になったんだ。君も舞台を経験したら、何かがわかるよ。」

本番と同じ歌舞伎のけしようをしたとき、白ぬりの正樹君の顔はおこっている顔なのに、とてもおかしくて、ぼくは思わずわらってしまった。正樹君もぼくの顔を見てわらいながら、

「悲しい顔なんだから、わらったらだめだよ。十次郎。」

と言うと、白ぬりをしたみんなが大わらいした。えがおのみんなの中で、ぼくもつられて大わらいした。

発表の日。ぼくが最後の<sup>さいご</sup>の出番で<sup>⑤</sup>見得を切ると、お客さんは大きなはくしゅをおくってくれた。ふり返ると、みんなわらっていた。ぼくはもう一人じゃないんだと思った。

〔教材作成委員会〕作成



⑤ 重要な場面や人物の気持ちがり上がったときなどにえんぎを止めてとるポーズのこと。  
ポーズをとることを「見得を切る」という。

## 私の誕生日

三月十一日は、春香の誕生日。春香の家では、家族の誕生日に欠かせないものが二つある。それは、母がかく似顔絵と手作りのケーキ。そして、春香にとって大切な存在なのが、さよ子おばさんだ。おばさんは母の妹で、助産師①をしている。毎年春香の誕生日には、お祝いに来てくれる。

今年の誕生日の朝も、春香が二階の部屋からおりてくると、母が、「はるちゃん、誕生日おめでとう。」

と言いながら、十一まい目の似顔絵を取り出して、リビングのたなの真ん中にかざった。

「わあ、お姉ちゃんの顔、去年より大人っぽい。」

妹の夏紀がパチパチとはくしゅをした。春香はとてうれしかった。

その日の午後二時四十六分、あの東日本大震災が発生した。とつぜんの大きなゆれに春香たちの教室には、悲鳴と泣き声がひびいた。あわてて校庭にひなんした春香たちは、小雪のまうち、母がむかえに来るまで、寒さにふるえながら待っていた。

その夜、春香たちは、水も電気も止まった家の中で、地震が起こる前に母が作っていたケーキを夕飯の代わりに食べた。ケーキにともしたろうそくの明かりが、こんなに明るく見えたのは初めてだった。

「お母さん、さよ子おばちゃんはだいじょうぶかな。」

① 出産を助け、母子に対する保健指導や世話をする人

「電話もけいたいもつながらないの。」

母の言葉に、春香は、おばが心配になった。

翌日、病院のおばから父の会社に電話があった。十一日の朝、出産に立ち会った後に大地震が起こって、れんらくを取るひまもなかったのだという。春香は、おばの無事が分かり、ほっとむねをなで下ろした。

四月から春香は六年生になった。大震災へのおそれは少しずつうすれ、以前の生活にもどつつあった。

震災の翌年の三月十一日、春香の十二回目の誕生日がやって来た。テレビでは、震災のことや震災でなくなった人のニュースがくり返し流れていた。

リビングには、春香の新しい似顔絵がかざられ、父、母、妹、春香、そして、おばさんがケーキを囲んでいた。

「はるちゃん、おめでとう。」

しかし、春香は、みんなのえがおを見ているうちに、何とも言えない気持ちになった。二万人近くの人命と未来をうばった大震災。三月十一日に「おめでとう。」だなんて言っただけののだろうか。



春香は、思わずうつむいてしまった。

だまっただままの春香に、おばは、

「ねえ、はるちゃん、これを見て。」

と、バッグから一まいの写真を取り出し、春香の目の前に置いた。写っていたのは、生まれたばかりの赤ちゃんとわかいお母さん、そのとりには白衣すがたのおばが笑っていた。

「はるちゃん、この子は震災の日の朝に生まれた赤ちゃんなのよ。地震のとき、病院はパニックになったわ。器械はたおれ、水も止まってしまったの。余震も続いていて、もうだめかと思っただぐらい。でも、私もお母さんもあきらめなかった。一階のロビーに、毛布もうふやふとんを運び出し、長いすをベッド代わりにして、赤ちゃんやお母

さんを休ませたの。あの日の夜は、こごえるように寒かったでしょ。お母さんたちは、赤ちゃんの体温が下がらないように、ずっと湯たんぽで温めていたのよ。」

たくさんの命が失われたあの日に生まれ、みんなに守られて生きぬいた赤ちゃんがいる。

「はるちゃん、あなただってそうよ。あなたは生まれてすぐに、腸に病気が見つかって手術しゅじゅつしたことは聞いているわね。みんながとても心配したのよ。小さな体にたくさんの管くだが通とされて、お父とうさ



んもお母さんもそれを見て泣いていた。お母さんは、あなたをだっこできないから、毎日病室であなたの似顔絵をかいていたの。お母さんが毎年かく似顔絵は、『元気に育ちますように。』っていう願いがこめられているのよ。あなたの誕生日が三月十一日の震災の日と同じだから、なおさら、みんなに支えられて、今生きていることをわすれてはいけないと思うの。」

春香は、おばの話にむねがいっぱいになった。顔を上げると、父と母は春香の方を見て、ほほえんでいた。

ろうそくの明かりに照らされた自分の似顔絵を春香はじっと見つめた。

「誕生日おめでとう、はるちゃん。」

「ありがとう。」

春香は力強く、うなずいた。



〔教材作成委員会〕作成





中  
学  
校  
編



## 五〇〇人の大家族

私は父の言葉に耳を疑った。

「覚悟があつてのことなんですね。」

念を押すように、母が聞き返す。

「もう決まっている。この先、営業はしばらく無理だ。後悔したくない。」

父の言葉をかみしめるように聞いていた祖父が、ゆっくりとうなずいた。

「分かった。好きにきなさい。」

父が、被災者を無料で受け入れたいという提案を家族にしたのは、東日本大震災の翌日だった。わが家は、曾祖父の代から福島県で温泉旅館を営んでいる。この地区は幸い地盤が固く、あの大きな地震でも配管が少し壊れただけだった。私の家族も、従業員の家族も全員が無事だった。建物と、全員の無事を確認してから、父は家族を集めて言った。

「福島が、東北が、大変なことになっている。この旅館を困っている人たちに使ってもらいたい。ここまでは避難して来てくれたら、後はゆっくりしてもらおう。もちろんお金は要らない。」

大震災で各地が大変なことになっていることは、中学生の私にも理解ができた。でも、なぜうちがそこまでするのか。思わず口から出かかったが、言葉にはならなかった。兄を見ると、けわしい表情で、やはり黙ったまま何かを考えていた。

翌日、父は、今度は従業員を集めて話をした。みんな、私が小さいときからここで働いてくれている家族みたいな人たちだ。きっと反対するだろう。無料で受け入れるなんてことをしたら、ここはつぶれてしまうもの。父の話が終わると、兄が声を荒げて言った。兄は調理場の責任者をしている。

「そんなことしたら、うちの旅館はつぶれてしまいますよ。みんなの給料だって、どうするんですか。」

「まあまあ、あつし、そう言うな。」

調理長の加藤さんが、間に入って言った。

「まず、お米を確保しなければなりませんね。いつもの農家さんにすぐ相談しましょう。」

「社長、配管修理も進めておきます。」

と、フロント係の佐藤さんも言う。父は笑顔でうなずく。

「みんな、ありがとう。がんばってくれ。必要なものは手分けして準備しよう。」

兄は、一人だまったままだった。私は兄と同じ思いでみんなの姿を見ていた。しかし、そんな私たちの思いと裏腹に、受け入れの準備は進んでいった。

受け入れの準備が整い、新聞に記事が掲載されるや否や、問い合わせの電話が鳴りやまなくなった。その後、原発の事故が発生したため、旅館の前には昼夜を問わず被災者の車が到着し、従業員のみんなは、一日中対応に追われるようになった。

旅館に着いた人たちは、殺気立っていたり、ほっとした表情を見せたり、さまざまだった。

「まずは、お風呂に入って体を温めてください。それからお部屋にご案内いたしますね。」

そう言う母の笑顔だって疲れていた。ほとんど眠っていないのだろう。ずっと駐車場で車を誘導している小林さんにしても、体が冷え切っているはずだ。父のこの決断は、家族ばかりでなく従業員たちも苦しめているようにしか思えなかった。

一人のおじさんが、厨房に顔を出したのは、そんなときだった。

「何か、お手伝いできることはありませんか。」

調理長が、ほっとした表情を見せる。

「お言葉に甘えていいですか。このおにぎりを二階に運んでいただけると助かります。」  
それ以来、

「お手伝いしますよ。」

「トイレの掃除、しておきました。」

宿泊者の中からそんな声が次々に聞こえるようになった。ほとんど休まずに働いていた父母も従業員たちも、少しずつ休める時間ができるようになった。

受け入れから五日がたった。

「地震がなかったら、友達と遊びに行く日だったのに……。」「私が一人でそんなことを考えていると、宿泊者のおばあさんが、たたんだタオルの束を抱えて厨房に入ってきた。

「おじょうちゃん、タオル乾いたけど、どこに運ばいいの。」

「あ、ここにお願います。」

「私はね、毎年この旅館に来るのが楽しみだったのよ。ここに来るとほっとしてね。こんな形でお世話になるなんてね……。あなたのお父さんに何かお返しがしたくて。こんなことしかできないけど。」

立ち上がってタオルの束を受け取ると、おばあさんは私の手にしわしわの手を重ねて言った。

「おじょうちゃんも毎日大変だね。いつもありがとうね。」

私は何と答えてよいか分からず、

「は。。」

と返事をするのが精一杯だった。おばあさんのしわしわの手のぬくもりが私の手に、いつまでも残っていた。

夕方、お風呂に入ろうと大浴場に続く階段を下りて行くと、話し声が聞こえてきた。見ると、浴場前のベンチに腰かけて、兄と父が話をしていた。父は兄に責められているのだろうか、私は思わず耳をすました。



「あつし、今な、この旅館には約五〇〇人がいっしょにいるんだ。五〇〇人の大家族ってことだ。すごいだろう。」

「父さんは、なんで従業員を犠牲ぎせいにしてまで受け入れをしているんだよ。俺おれたちだって被災者じゃないか。」

「そうだな、たしかに被災者だ。でも、犠牲というのは違う。うちの旅館が三代にわたって続いてきたのはな、これまで多くの人々の支えがあつてこそなんだ。その恩を返せるのは今しかないと思った。私は、必ずもう一度営業を再開する。毎年ここを利用してきているおばあさん、息子さんは被災現場に残って離ればなれの生活なんだ。でも、いつかまた、家族そろってみんなでここに来てほしい。それまで、こはつぶすわけにはいかない。そのときは、お前がここを受け継いで迎えてほしいんだ。」

「父さん……。」

「今日は、お前とゆっくり話ができよかったよ。ずっと忙しかったからな。頑張ってくれているお前にも、従業員にも感謝しているよ。」

兄はだまってうつむいていた。私は足音を立てないようにその場を離はなれた。

翌朝、一階に降りていくと、朝食の準備に追われている厨房から、従業員に指示を出す兄の大きな声が聞こえてきた。私は入り口ののれんをくぐると、兄に負けないくらい大きな声で言った。

「三階のお食事は、私が運びます。」

兄と目が合った。久しぶりに見た兄の笑顔だった。

〔教材作成委員会〕作成



## 手渡わたされたパン

「これから、どうなってしまうんだろう?」

三月十一日午後二時四十六分、今までに経験したことのない大地震じしんが起こった。

余震が続く中、教員の父と母が、勤めている学校から夜遅くおそに帰ってきた。震災後の対応に追われている両親は、かなり疲れた様子つかだった。しかし、翌日も翌々日も両親は避難所ひなんとなった学校へ行ってしまった。

こんなときなのに僕と弟の二人を残して行ってしまうのだ。祖母が食事しょくじを用意してしてくれたが、

「ご飯なんかいらない。」

と、ぶっきらぼうに言ってしまう。そのとき、いつもは穏やかな祖父が語気を強めて言った。

「こんな状況でもご飯が食べられることをありがたいと思いなさい。」

(こんな状況だから食べられないんだよ。)

毎日外に出られないことにも腹が立っていた。小さな弟は大きな紙にクレヨンでお絵描きかをしていた。

「お兄ちゃん、いつ、お外で鬼おにごっこできるかなあ。航君わたると遊びたいなあ。」

(弟も外で遊ぶこともできず、不安なんだ。)

震災から八日がたった。その晩、父が決心したように言い出した。

「避難するぞ。」

「どこへ行くの。」

「南へ、とにかく南へ行く。」

母が、

「茨城のたまみおばちゃんちに行くのよ、覚えているでしょ。」  
と言った。

父と母に促されて、家族六人全員が車に乗り込む。真つ暗なでこぼこの夜道を、父は慎重に車を走らせた。

深夜、おばさんの家に到着すると、おばさんが玄関の前で待っていてくれた。

「無事でよかった。さあさあ、早くお上がんなさい。」

「ありがとうございます。お世話になります。」

と両親は頭を下げた。僕と弟は、すぐに、二階の六畳間に通され、そのまま休むように言われた。弟はすぐ寝息をたて始めたが、僕はなかなか寝付けず、何度も寝返りを打った。両親は明け方までおばさんと話しこんでいるようだった。

翌朝、目が覚めて下に行くと、みんなは既に朝食を囲んでいた。

「よく寝ていたので起こさなかったのよ。」

と母が言った。僕は、たった一口しか食べられなかった。おばさんは、

「お口に合わなかったかしら。」

と心配そうに言ってくれた。

「別に……。」

「あら、食べないと体に悪いわよ。」



僕は黙って席を立つと、部屋に戻った。両親はそんな僕の態度に怒っているようだった。

僕は、むしゃくしゃして外に出た。弟も慌てて後についてきた。知らない土地で友達にも会えない。外に出ても僕の気持ちはおさまらなかつた。思わず出た大きなため息とともに、ぐうつとおなが鳴った。僕は初めておなががすいていることに気がついた。そして、さつき朝食を食べなかつたことを後悔した。

近くの公園でブランコに乗ってはしゃいでいる弟をぼんやりと眺めていると、知らないおばあさんが通りかかって、

「かわいい子だねえ。いくつ。」

と聞いてきた。弟は、大きな声で、

「三つ。」

と答えた。

「ここら辺では見ない子だね。どこから来たの。」

と、今度は僕に聞いてくる。

「福島。」

僕は、無愛想に答えた。すると、おばあさんは驚いた表情で、僕と弟を交互に見つめ、

「大変だったわねえ。無事でよかつたわねえ。」

と涙ぐみながら言った。おばあさんは、持っていた買い物袋からパンを取り出し、

「おなかすいてないかい、これ食べて元氣を出して。」

と、僕たちに渡してくれた。

「ありがとう。」

弟は大きな声で言いながら、もう既に袋を破ってパンをかじっていた。

「お兄ちゃん。おいしいよ。」

「よかった。お兄ちゃんも食べなさい。おなかですいてると力が湧かないでしょ。食べて元気を出しなさい。食べると笑顔になるものよ。」

僕はその言葉を聞いて、はっとした。そして、祖父の言葉を思い出した。

『ごはんが食べられることをありがたいと思いなさい。』

勧められるままに手渡されたパンの袋を破り、一口かじった。訳もなく涙が込み上げてきた。おばあさんは、僕の背中をさすってくれた。

僕と弟は、おばあさんと別れた。そして、まだ遊びたそうな

弟の手を強く握って言った。

「家に帰ろう。おばあさんに、そして、お父さんとお母さんに謝らなくちゃ。今朝の自分の態度を思い出しながら、もと来た道を足早に歩いた。」



〔教材作成委員会〕作成

## この町のために

「ちよつと出かけない。」

あの大地震だいしんさいから何日かたった三月のある日。母が私を誘さそってきた。

「ガソリン大丈夫だいじょうぶなの。ドライブどころじゃないでしょう。」

「いいから、いいから。」

母が、珍めずらしく強引に私を連れ出した。私は、久しぶりの外出に少し緊張きんちやうしていた。見慣れたはずのいつもの道。いや、「いつもどおり」じゃない。屋根瓦がわらが落ちた家、所々かんぼつ陥没した道路、傾かたむいた看板、母はどういうつもりだろう。

車は中学校に近づいていった。

「もうすぐ入学式ね。四月六日、予定どおりだった。」

そのとき、校舎の窓に掲かかげられた大きな文字が目飛び込こんできた。

『大好きな 国見町』<sup>①</sup>『支えよう 県中生』

私は、胸が熱くなった。

「学校は大丈夫さうね。」

学校の前に車を停めた母は、緩ゆるやかに車を走り出させた。

(そうだ、私は中学生になるんだ。)

私は、交差点で右折して見えなくなるまで中学校を見つめていた。

いよいよその日がやってきた。午前中は、一か月遅おくれの卒業式、そして午後は、緊張の中での入学式。中学校生活のスタートだ。



① 国見町



(中学生になったんだ。勉強もがんばる、部活もがんばる、新しい友達も作るんだ。しつかりしなくちゃ。)  
 しかし、そんな最初の意気込みとは裏腹に、実際は、うまくいかないことばかりだった。授業を一生懸命受けているつもりでも、周りの雰囲気にもまれて手を挙げることさえためらってしまう。部活動では先輩の指示に戸惑うことばかりで注意を受ける。落ち込む毎日だった。中学校は、生徒数も多くて、私が何もしなくても学校生活はどんどん進んでいく。

(まあいいや、どうだって。) と思い始めるようになった頃、総合的な学習の時間がスタートした。学習のテーマは『町を知る』だ。活動を通して、町の復興のためできることを考える、ということになった。

「明日までに取り組んでみたいことを考えてきてください。」  
 帰りの会で先生から話があった。

町のためにできること。中学生に何ができるのだろうか。

家に帰ってから、食卓でぼんやりしていた私に、母が話しかけてきた。

「どう、学校は。」

「ううん。まあまあ。」

「まあまあか。」

課題を思い出した私は、母に尋ねてみた。

「ねえ、お母さん、町のためにできることなんてないよね。」

「町のために、中学生ができることでしょ。そうねえ。」

首をかしげた母は、何か思いついたように言った。

「悠里、あの言葉、覚えている。『大好きな国見町』。」

『支えよう県中生』。」

思わず、母と私の声がそろった。

「町のために、できること。きっとあるはずよ。」

そのときよみがえってきたのは、あの日の気持ちだった。

「うん。考えてみる。」

翌日の総合的な学習の時間は、学級委員長、副委員長の二人が話し合いを進めた。

「震災で被害を受けた町のために、できることはありませんか。」

「募金活動。」

「がれきの片づけ。」

その後も、ごみ拾い、バザー、仮設住宅の訪問など、さまざまな案が飛び交った。

（私が黙っていても、誰かが意見を出すだろう。私が手を挙げなくても、きっと話はまとまるんだ。でも、それでいいのだろうか。）

司会の二人が

「それでは、そろそろ意見をまとめたいと……。」

と言いかけたとき、私は思わず手を挙げてしまった。

「うちわ……。うちわ作りはどうですか。」

「何それ。」

「なんでうちわなの。」

学級がざわめく。

「あのう、私の母は、仕事で仮設住宅に行くことがあるんですが、仮設住宅にはエアコンがなくて、夏の暑さが心配だと……。それで……。少しでも涼しさを感じてもらえるように、うちわを贈るのと……。あと、うちわにメッセージを付けたらどうかと思うんです。」

「メッセージ?。」

「うちわを手作りして、そこにメッセージを添えたらいいと思うんです。私も、震災のとき、言葉に元気をもらったから、今度はこの元気を誰かに届けたいんです。」

「へええ、うちに古いうちわがあるよ。」

「やってみたい。」

「おもしろそう。」

「いいんじゃない。」

私の意見がみんなに受け入れられたのだ。

数日後、うちわ作りが始まった。それぞれが一枚一枚にイラストを描く。そして、思い思いのメッセージをつけていく。

私も心を込めて、うちわを作った。下書きをして、色を塗っていく。肩越しにのぞき込んできた友達が、私のうちわに書かれた言葉を読み上げた。

「『大好きな国見町。私たちが支えます。』なんかいいね。」

「ありがとう。これね、私が元気をもらった言葉をヒントにしたの。」

「あつ。」

と小さく声を上げた友達は何か思い出したようだった。

「『大好きな国見町。』」

「『支えよう県中生。』」

友達と私の声が重なった。

「きつと、このうちわをもらった人も、元気になるよね。」

ひさしぶりに、学級の中に明るい声が響きわたった。



(「教材作成委員会」作成)

## 仮校舎

僕は都路中の三年生。

郡山から、旧春山小学校の仮校舎までスクールバスで四十分かけて通っている。

用務員の土屋さんは、僕によく声をかけてくれる。

「貴紀君、元気かい。卓球部の練習、がんばってるんだろう。遠くから通いながら

部活をするのは大変だね。」

そんな土屋さんも都路町から避難し、田村市にある仮設住宅に住んでいる一人だ。

「土屋さんこそ、毎日おそうじ大変ですね。」

「校舎を借りているんだから、あたりまえですよ。」

（校舎を借りているって言うっても、すでに廃校になっている学校なのに。）と思っただが、僕は口には出さなかつた。

学校には、全国各地、海外からさえも、「負けないでください。」「心から皆さんを応援しています。」などのメッセージが毎日のように届けられる。ノート、鉛筆などの学用品から、「美しい花を見て、元気を出してください。」とたくさんの花の苗を贈ってくれた会社もあった。田村市からも「元気を支援する事業」として、野球観戦や講演会、体験学習など、いろいろな機会を設けてもらった。こんなにもたくさんの人たちが僕たちのことを気にかけて応援してくれる。しかし、校舎は元小学校ただだけに、教室も体育館も校庭も何もかも小さい。狭い体育館で、スクールバスの時間を気にしながらの部活動の練習は、なんとなくもど



かしかつた。限られた時間と場所での練習では強くなれるはずもない。僕は、日々支給される支援物資や励まししえんのメッセージにも、気持ちを動かされなくなっていった。そして、だんだん投げやりな気持ちになっていった。

何か大事なことを忘れてしまっていないか。このままではいけないのではないか。僕がこんなふうに思い始めたのは、ある出来事がきっかけだった。

五月の日曜日に実施された親子奉仕作業ほうし。その前夜から降り始めた雨は、やむ気配がなかった。

(こんな雨なのに、どうして奉仕作業なんてやるのかな。わざわざ学校まで出かけていくなんで、面倒めんどうくさいなあ。)

そう思いながら、僕は、しぶしぶ母の車に乗った。

学校に着くと、既にたくさんの人たちが校舎の玄関前げんかんに集まっていた。土屋さんも来ていて見知らぬ大人の人たちと用具の準備をしていた。そう言えば、今日は、地区の人たちも学校の奉仕作業に参加してくれると言っていた。

「兄ちゃんは、どこから通ってるの。」

「郡山からです。」



「遠くから大変だね。わざわざ雨の中、奉仕作業に来るなんてえらいね。俺は、この小学校の卒業生なんだ。都路中のみんなに校舎を使ってもらってるうれしいよ。がんばれよ。」

地区の人にそんなことを言われて、しぶしぶ学校に来たことが少し後ろめたくなった。

奉仕作業が始まり、みんなはきびきびと働き始めた。雨は激しく降り出していて、カッパやウインドブレーカーを着ていても、ずぶ濡れの状態だった。友達もそんな大人たちに混じって、ひたすら草をむしったり、たまった草をかき集めたりしていた。僕も、雨でぐちゃぐちゃになった校庭の草を一心にむしった。手は冷たい雨でかじかんできたけれど、終わってみると、あんなに乗り気でなかった作業時間が不思議と短く感じられた。

次の日、朝の集会で校長先生がおっしゃった。

「昨日の奉仕作業、ごくろうさまでした。皆さんのお父さんやお母さん、そして、春山地区の方々が一生懸命学校をきれいにしてくださいました。地区の皆さんにとって、この学校は心のよりどころなのだそうです。都路中が校舎を使っていることをとても喜んでくれています。皆さんががんばっている姿を見て、元氣をもたると言ってくださいます。しかし、地区の皆さんが、あなた方に温かい手を差し伸べてくれているのをあたりまえだと思っていませんか。あなたたち一人一人が、自分で何をすべきなのかを考えてほしいと思っています。」

僕は、それまでの自分を恥ずかしく思った。

六月の中体連最後の団体戦、僕は全力を出し切って試合をすることができた。チームの仲間もがんばった。

友達も春山地区の人々も大きな声で応援してくれた。結果は、五対〇の完敗だった。

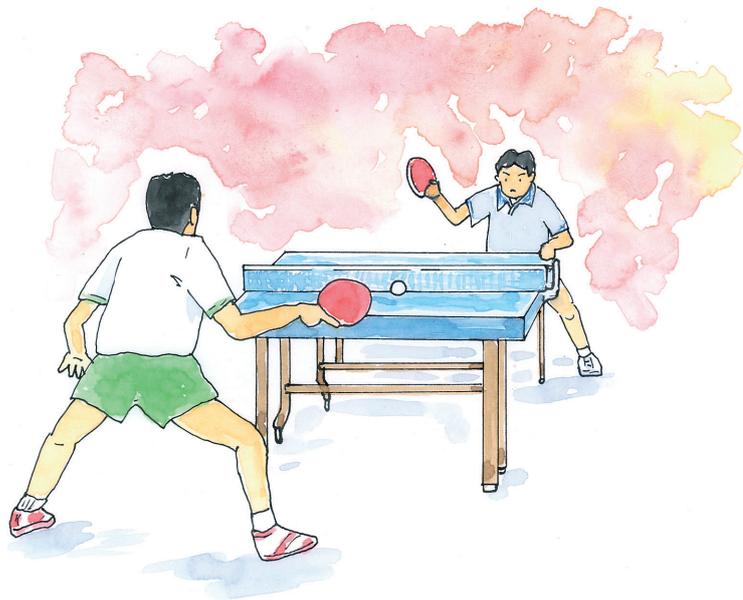
試合から帰ってきたとき、土屋さんが声をかけてくれた。

「おつかれさま。がんばったね。応援盛り上がっていたよ。」

「はい。ありがとうございます。思い出に残るいい試合ができました。」

僕は自分の弾んだ声に驚いた。

〔教材作成委員会〕作成



## たった一秒の「ありがとう」

三月十一日。東北そして私たちの故郷を恐ろしい地震と津波、予期せぬ原発事故が襲った日だ。私たち家族は、地震発生直後の真暗闇の夜を祖母の車の中で過ごし、翌朝大好きな故郷を離れた。すぐに戻れるだろう。移動用バスの中で私は、軽い気持ちでそんなことを思っていた。だが、原発から漏れ出た放射能は、私たちにそう簡単には戻してくれなかった。

避難所に到着し、私たちはここでしばらく過ごすことになった。母や祖母の不安そうな表情を見て、私の頭は混乱した。その日は疲れて寝て

しまった私に、翌朝次々と問題が襲ってきた。お風呂がない。トイレが流せない。着替えもない。歯も磨けない。今まであたりまえとして行ってきたことが、あたりまえではなくなっていたのだ。それは、二か所目の避難所に行っても同じだった。広い体育館では、いつ誰が見ているか分からない。人前で着替えなどできるはずもなく、ふとんの中で



隠れながら着替えた。夜になり、みんなが寝静まると、赤ちゃんの泣き声や話し声、人の動く音など、ぐっすり眠ることさえできなかつた。一日おにぎり一個の日もあり、数少ない食べ物の中には、賞味期限が切れているものもあったが、誰も文句など言わず黙々と食べていた。毎日知らない人と過ごし、ダンボールで囲まれた場所での生活は、暗いトンネルの中に入り込み、出口の見えない状態であつた。

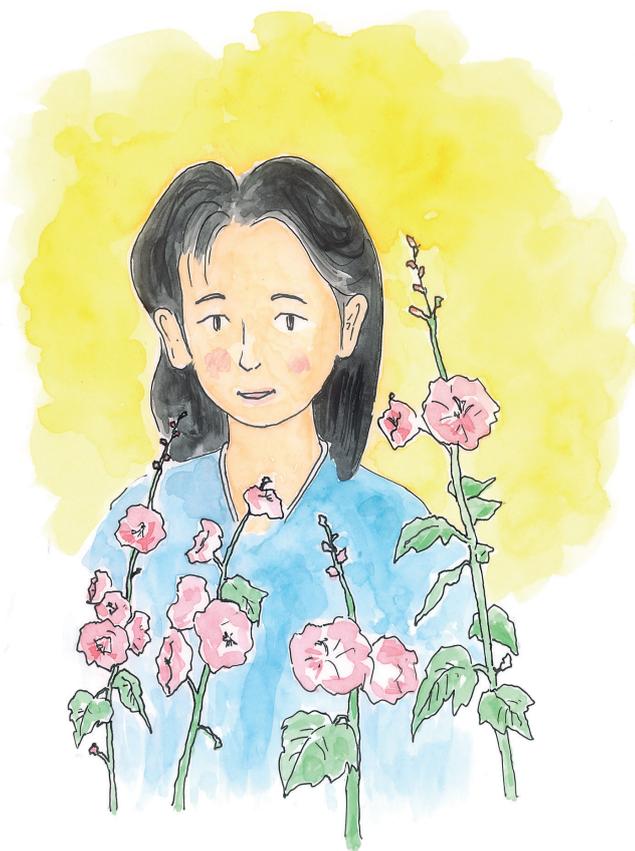
避難生活をしている間、私たちは人間としての人権や自由を完全に奪われていた。「被災者だから我慢しなればならない」と祖母に言われた。そのことは十分頭では理解している。でも、そんな状況が一か月も続くうちに私の心は壊れていった。ささいな事でもすぐ怒り出したり、涙ぐんだりしていく自分の心の弱さが自分で許せなかつた。精神的に追いつまれていく自分の心がコントロールできなくなつていった。そんな中、ボランティアの人たちの献身的な心遣いに、私の心が少しずつ和らいでいった。優しい一言に温かい光を感じた。救われた。そして、自分を取り戻せた。

その後、私たちは会津若松市に避難した。初めは「また嫌な思いをするのだろうか」と不安だつた。だが、会津の方の温かい心は、私たちに生きていく勇氣と安らぎを与えてくれた。避難先のホテルでは、部活を終えて帰ると、スタッフの方が優しい笑顔で「おかえり」と言ってくれ、おいしいご飯を用意して待っていてくれた。子供たちと遊んだりお年寄りには世間話をして笑わせたりして心を和ませてくれた。私はここで、ようやく「人間らしい心と生活」に戻ることができ、人の心のぬくもりをひしひしと感ずることができた。全ての人間に平等にあるもの、それが「人権」であつたはずだ。では、私たちの体育館での生活には果たして人権があつただろうか。「被災者だから」という一言の言葉で片付けられ、プライバシーも安らぎもないあの生活の中に人権はなかつたのだと思う。

ある日、母の車の窓から外を見てみると、私の目は、看板の言葉にくぎ付けになつた。「立葵のてっぺん

の花が咲くと梅雨あけです。『ありがとう』は、たった一秒の言葉です。暑さをのりきってがんばろう。』私はすぐに口ずさんだ。「ありがとう」確かに一秒だ。私の心が梅雨あけのようにさわやかに晴ればれとなっていくのを感じた。

先日、学校に支援のレトルトカレーが届き十袋ずつ配られた。私は「十袋も重いな。他にも荷物あるし。持ち帰るの嫌だな。」と心の中で思っていた。その時、教頭先生から「今日のカレーは兵庫のある会社からいただきました。震災から一年以上も経っているのに、今もこのように支援して下さる方がいます。皆さん、感謝の気持ちを持って家族で味わって食べて下さい。」という放送が入った。私は頭を殴られた思いで、自分のすさんだ心が恥ずかしくなった。その時ふと、先日見た看板の言葉が頭に浮かんだ。「たった一秒の『ありがとう』を私は忘れていたのだ。私たちは支援していただけることに慣れてしまっていないか、あたりまえに思っ甘えてはいないだろうか。私は、自分の心の中にある「慣れという恐ろしさ」にがくぜんとした。



体育館に避難した時の辛さや苦しき、そして今の生活の不便さに不満をもち、自分が出来ないのは誰かのせいだと、相手を責めることばかりしていた自分に気づいた。確かに避難した時は、人間らしい環境かんきょうではなかった。人間としての平等や自由も与えられなかった。しかし、今は世界中の人の温かい支援に助けられて生活している。私たちは世界中の人への感謝の心を忘れてはいけない。

今は、故郷にも自宅にも帰れない。これから先どうなるのかという不安もある。たくさんの「ない」の中で、私は人間としての尊厳だけは決してなくさないようにしたいと思っている。そして、「たった一秒の『ありがとう』」の重みを心に刻んでおきたい。

（第三十二回全国中学生人権作文コンテスト） 生徒作文

## 紫紺の襷しこん たすき

早朝から太陽がきらきらと照りつけるグラウンドで、駅伝部の練習が今日も始まった。練習は、毎朝一時間ほど行われる。ストレッチやジョギングから、徐々にハードな走り込みへと進んでいく。顧問の原田先生は、今日も誰よりも早くからグラウンドに立っている。そして、先生の的確なアドバイスがグラウンドに響き渡る。

「高志！ 膝から下をもっと前に出すイメージで走れ。上体を起こして、腕をもっと後ろに振って走らないと、スピードが乗ってこないぞ。」

僕は、二年生に進級したが、一年生から続けてきた野球部でも勉強でも、満足のいく結果は残していなかった。そんなとき、同じ野球部の同級生である敬介に誘われて、僕は駅伝部に入った。駅伝部は、九月に行われる地区大会、それを勝ち抜いた学校だけが出場できる十月の県大会をめざして結成される特設の部活動で、他の部とのかけ持ちができる。

僕の通うY中学校が、かつて県中学校駅伝競走大会において三連覇を成し遂げたことは、Y中出身の両親から何度も聞いたことがある。両親は、駅伝部でもなかったのに誇らしげに語るのだ。僕は、そんな両親の話を他人事のように聞いていた。そして、(昔と今は違う。生徒数は減ったし、そんな活躍を今のY中生に求めるのは無理だよ。)



「紫紺」  
紺がかつた色。濃い紫色。

「襷」  
細長い布を輪状にして、一方の肩から他方の腰へ斜めにかけるもの。

と半ばあきらめていた。実際に、ここ十年の間、Y中駅伝部は県大会出場さえ果たしていない。

七月に入り、駅伝部の練習は本格的なものになっていた。傾斜のある道路での走り込みや、大会コースでの試走をする。今日の練習はとりわけきつかった。何しろ昨日まで三泊四日の野球部の遠征に行っていて、今日はその直後の練習だ。体が重く感じられ、全くスピードが乗ってこない。タイムも遠征前に比べて、だいぶ遅くなっている。

駅伝部の練習では毎回タイムを計るので、力を付けてきているのが誰なのか一目で分かる。敬介は、僕より十秒ほど速いタイムでゴールした。敬介の背中を必死に追いかけているが、遠征先でも野球部の練習が終わってから、薄暗いグラウンドを一人で黙々と走る彼の姿を、僕は思い出していた。

駅伝競技では、大会直前の期間に休みは二日続けないというのが鉄則だ。

「地区大会まであと一か月しかない。野球との両立は大変だと思うが、遠征中も何とか時間を見つけて走っておくんだぞ。」

遠征に出かける前、原田先生から言われた言葉が、今になって思い出された。

「どうした、高志！ お前の走りができていないだろう！」

原田先生はそう言ったとき、僕の前を立ち去った。そして、その言葉は、いつまでも僕に重くのしかかっていた。

練習が終わり家路を急ぐ僕に、「高志君。」と声をかける人がいた。声のする方を振り向くと、Y中駅伝部OBで県大会三連覇を成し遂げたメンバーの一人、新田さんだった。今は村で建設業を営んでいる。時々練習に顔を出し、僕たちを励ましてくれたり差し入れをしてくれたりする。

「調子はどうだい。地区大会までもう少しだからね。」

僕は、

「まあまあです。」

と曖昧あいまいに答えた。

「昨日、原田先生に会ったら、『Y中駅伝部の鍵かぎを握にぎっているのは高志だ。高志はまだまだ伸びる力がある選手だ。』って言ってたぞ。」

僕は驚おどろいた。

「しかし、原田先生も熱いよな。ここまで面倒めんどう見てくれるなんて。

聞けば、原田先生の自宅は原発事故のため帰還困難区域①きかんこんなんくいきになっていて、当分戻ることができないそうだ。遠くに避難している家族とも、めったに会えないって言ってたぞ。」

僕は、心のどこかで駅伝を投げ出していた自分に気づき、恥ずかしくてしかたがなかった。

翌日、僕は原田先生に、夏休みの間、夕方行っている駅伝部の練習に参加させてほしいと申し出た。自分の部活動の練習が終わってから、自主的に駅伝の練習に励む生徒が、敬介の他にも数名いたのである。

「高志！ 待ってたぞ。」

敬介のいつもと変わらない明るい声が、今日は涙なみだが出るほどありがたかった。そして、グラウンドを照らすわずかな明かりを頼たよりに、練習が始まった。



① 原子力災害により五年以上の長期にわたって居住が制限される地域



「高志！ 苦しくても敬介についていけ。」

原田先生の気合いの入った声が、グラウンドに響き渡る。練習は、大会の数日前まで続いた。

地区大会を三日後に控え、大会登録メンバーが発表された。二年生からは、僕と敬介が選ばれた。そして原田先生は、僕たちの目の前に紫の襷を掲げた。襷に刻まれたY中の名は力強く見えた。

「長距離走の中で、駅伝競技だけにあるのが、この襷だ。この襷をつないで走るのはお前たちだ。Y中という一本の襷を、今日まで途切れることなくつないできたことは、決して容易なことではなかったはずだ。この襷の紫は、走る人の汗によって紫紺となる。三年後、Y中は統廃合で閉校となるが、この襷は必ず受け継いでいかななくてはならない。」

原田先生は、一言一言をかみしめるように言った。

それから僕たちは、雲一つない秋晴れの空の下を競うように走り始めた。紫紺の襷を胸に描きながら。

〔教材作成委員会〕作成



「ありがとう。あなたには、無事にたどり着いたと伝えられた。」  
電話の向こうは涙声だった。

「本当によかった。お互い必ず乗りきって、いつか必ず会いましょう。」

三月十一日（金）午後二時四十六分。

出張先の霞ヶ関ビルの六階で大きな揺れを感じた私は、ただならぬ揺れに鳥肌がたった。会議は中止となり、帰宅するよう指示された私は、余震におびえながら階段を降り、外に出て驚いた。歩道は、溢れんばかりの人だった。

とっさに、家のことが頭に浮かんだ。家は、大丈夫だろうか。新幹線は、走るのだろうか。頻繁に襲う余震を足の裏で感じながら、前の人について歩く。「東京駅<sup>①</sup>まで着いたら福島<sup>②</sup>に帰る方法が見つかるかも知れない。」

日比谷公園入り口では、立ち止まらないようにと警察官の誘導する声が飛ぶ。間違いない。駅はこっちだ。ふと、昼間買って飲みかけたペットボトルの水を思い出し、ひとくち飲んで我に返った。何としてでも、家に帰りつかねばならない。みぞれ交じりの雨が降り始めた東京で、そんな思いが、私を奮い立たせていた。

東京駅中央口が正面に見える喫茶店で、私は、携帯電話を充電させてもらいながら、家にメールを送り続けた。ワンセグで観るニュースの映像は、映画のワンシーンのようにどれも信じられない光景ばかりだった。何度かけても電話はいつかつながらないままだった。



喫茶店は、朝の四時まで営業と聞いたが、絶え間なく続く余震と政府からの重大発表があるとのことで、午前三時に閉店を告げられた。お礼を言って店を後にしたが、新幹線の復旧の目処めどが立たず、行くところがない。私は、仕方が無く、出張先の会議室に戻ることにした。地下鉄は、各駅停車のうえ一時停止を繰り返しながら時間をかけて進む。そして、昼間やつの思いで逃げ出したビルに戻る事ができた。

私は、そこで帰宅困難者リストに名前を記入した。講堂で防災シートを受け取って、靴を脱いで横になる。ひよっとしたら、これは、架空の防災訓練ではないか。早く誰か終わりを告げてくれないか。そんな思いが溢れて一睡もできなかった。

三月十二日（土）午前七時十分。

私は、思い切って大宮駅に行くことにした。ペットボトルの水をひとくち飲んで、自分に言い聞かせる。電車がだめなら国道に沿って歩くしかない。

霞ヶ関を出発すると、東京駅から京浜東北線で大宮駅に半日かけて行くことが出来た。駅は、信じられない人混みで、構内に入るにも規制が敷かれた。電車一本に対して、ホームに入る人数を制限するのだ。構内では、駅員に罵声を浴びせている人もいた。誰が悪いわけでもない。ただ、現実を受け入れられない人がいた。

三月十二日（土）午後八時四十五分。

大宮駅から東北本線に乗り換えて、宇都宮駅に着いたのは夜だった。電車はここで終点となることをアナウンスが繰り返して告げていた。このまま宇都宮駅前で一泊する。明日は、どうしたらいいのだろう。

三月十三日（日）午前五時二十分。

早朝の駅で、情報を収集する。テレビの情報だと新幹線は終日運休とのこと。電車は動くのか。代替輸送

はあるのか。バスは、タクシーは、走るのか。改札で、すべての電車が終日走らないことを知った私は、取り敢えず、駅前のバス停にむかった。ペットボトルの水は、すでに半分を切っていた。

「あの、どちらまで行きますか。」

私に声をかけてきたのは、若いサラリーマンだった。

「タクシーを予約することが出来たんです。自分は、宗像と言います。北に行くのならごいっしょじゃないですか。郡山まで行きたいんです。」

自分の町の名がこれほど懐かしく聞こえたことはなかった。

「私も、郡山に行きたいんです。いいんですか。」

「ご一緒しても。」

「ええ。僕と、先ほど知り合ったあの方、吉田さんは、仙台に行きたいそうです。あなたを入れて三人ですが、大型タクシーは六人乗りなので、あと三人乗れます。」

「どこに向かうんですか、そのタクシー。いっしょの方向なら乗せてもらえませんか。」

声の方を振り返ると、作業着姿の男性がいる。今、思えば山口さんとの出会いだった。

「まず、郡山をめざします。そこまで、ごいっしょでできる人を三人捜しています。」夢中で説明する私の言葉に一つ一つうなずきながら、山口さんは、自分の目的地は岩手までだが、とりあえず、郡山までいっしょに移動したい、と言う。これで四人。あと二人乗れる。



「下のバス停で、白河駅まで行きたい人がいました。今なら間に合うかも知れませんが、タクシーの件、お伝えしてきてもらいますか。」

私は、改札のある二階から階段を降りると、バス停に戻った。私の急いだ説明に、白河駅に行きたい持田さんとバス停で時間を調べに来た留学生のヤンさんが乗車することになった。私は二人の乗車を知らせずに、改札口に急いだ。これで家に戻れる。

大急ぎで宗像さんに「二人乗ります。これで六人です。」と告げると、当初、私が誘ってくる人は一人だと思った宗像さんたちが声をかけて、すでに一名乗ることになったと告げられた。これでは、七人になってしまう。私は、混乱した。

「みなさんで先に行ってください。私は、次のタクシーを予約します。」

「いや、初めに声をかけて乗ると約束したのはあなただ。あなたには乗る権利がある。」

「でも、私は、バス停で、タクシーには、あと二人乗れると約束してしまいました。私の分は、その方に乘っていただいて構いません。」

そのとき、山口さんが言った。

「タクシー会社の電話番号を覚えてくれないか。私は、岩手で一番遠い。この方といっしょに、次のタクシーを待つことにしよう。これならみんなが気に病むことはない。」

宗像さんが、少し考えてこう言った。

「では、今からタクシーをもう一台追加できないか聞いてみることにします。タクシー会社もつながりにくい状態です。電話をかけ続けてみます。」

私は、みんなの家路を遅らせてしまうかも知れないことが申し訳なく、いたたまれない思いでいっぱいだった。ペットボトルの水は、もう三分の一もない。

「タクシーが、もう一台来てくれるそうです。」

宗像さんの弾んだ声が響いた。私は、一瞬すべてが許された感じがした。

後から聞いた話だが、最初に声をかけてくださった宗像さんは、大手電機メーカーで、乾電池の研究をしているとのこと。岩手に帰る山口さんは、石油タンカーに乗って、つい先日、日本に戻ったばかりだ。福島市在住の吉田さんは、埼玉の実家から自宅に戻る途中らしい。ベトナムからの留学生のヤンさん。米沢に行きたい大和田さんは、奥さんに間もなく赤ちゃんが生まれるとのこと。香港に一週間の出張で、大震災直後に着陸した飛行機で一夜を過ごした佐藤部長と菊地さんは、製薬会社に勤務していた。その後も、宮城に帰りたご夫人を入れて、合計十人で、北をめざしてタクシーに相乗りすることになった。

三月十三日（日）午後二時三十五分。

ようやく車窓から見えたのは懐かしい風景だが、緊張感が走る。信じられないほど人通りが少ない。郡山駅周辺は、閑散としていた。

タクシーを降り、精算した。「二人で帰ったと思えば、はるかに安い金額だ。」と言って多めに支払ってくださった佐藤部長。「おつりはいいよ。」と言ってくださった大和田さん。気がつけば、タクシー代をお支払いしても残金が出た。私は、思わず宗像さんに「郡山より北に向かう人々に、旅費としてお渡ししましょう。」と提案した。その場にいた誰もが快く頷いてくれた。

それからは、夢中で米沢、仙台方面に向かってくれるタクシーを捜した。ロータリーにプールしている小型タクシーに事情を話すと、福島市まで行ってくれるという。米沢まで行ってくれるというタクシーも見つかった。

山口さんは、別れ際に、くしゃくしゃの名刺を私に握らせた。

「一番遠い私がたどり着けば、みんなも無事に着いたと考えられる。タクシーを乗り継いで、私は家をめざして行くよ。あなたは、見知らぬ人のために席を譲って、車を降りると言った。しかし、諦めなかったからこそ、こうしてみんなで前に進むことができた。本当にありがとう。」

山口さんの乗ったタクシーを見送って、私はペットボトルの水を飲み干した。ここからは一人で歩いて帰るのだ。住み慣れた大好きな街は、あちこち倒壊して、今、傷だらけである。とにかく前へ進むしかない。私は、何か大きなものにつき動かされていた。

昨日のみぞれ交じりの曇り空は一転して、雲一つ無い青空だった。私は生きている。そんなあたりまえのことを実感した。

山口さんが別れ際にくれた名刺は、今でも大切に手帳に収められている。いつか会いに行くつもりだ。電話の向こうの涙声も、今も耳に残っている。

「ありがとう。あなたには、無事にたどり着いたと伝えなかった。」

〔教材作成委員会〕作成





高等學校編



## もう一人の八重

## 日本のマザーテレサ「井深八重」



井深八重は一八九七（明治三十）年に会津藩家老の流れをもつ名門一家に生まれました。幼少期を東京で過ごした後、京都で学び、卒業後は長崎で英語の教員として働いていました。ところが、二十二歳頃、身体に赤い発疹が現れ、心配した親戚が医者所に連れていくと、八重は「らい病」の疑いがあると診断されました。そのため、八重は病名も行き先も教えられないまま、伯母たちに連れられて、静岡県御殿場市にある神山復生病院に來ました。

七月初めのどこまでも続く梅雨の曇り空が、そのまま八重の気持ちのようでした。衣類と生活道具の入った小さな荷物を抱え、「一体どこに行くのだろう。」と思いつながら、立ち並ぶ建物と木立の中を歩いていました。ほどなく一軒の洋館に到着し、部屋に通されると、そこには司祭服を着た白い髭の老人が静かに座っていました。その人が、ドルワル・ド・レーゼー院長でした。早速、院長と伯母たちが話を始めましたが、何度も出てくる「らい病」という病名が、大きな衝撃となって八重を襲いました。八重は、病院に隔離されるのです。いろいろな思いが脳裏を駆け巡り、八重はその場に茫然と立ち尽くしました。

① 八重は井深彦三郎とテイの長女として生まれた。父親の彦三郎は軍政顧問として活躍し、祖父の宅右衛門は会津藩の番頭で日新館学校奉行を務めていた。伯父に当たる井深梶之助は明治学院（現明治学院大学）の第二代総理で、八重が幼い頃両親が離婚し八重の面倒をみるのができなかったため、この伯父に預けられた。

② 一八九九（明治二十二）年創立。日本最初のハンセン病療養所であり、日本の公立のハンセン病療養所より二十年早く設立された。もととは一八七三（明治六）年にフランス人宣教師のテストウイド神父が布教中に道すがら出会った悲惨な状況下にあったハンセン病患者を救済するために保護したことに始まる。静岡県御殿場市神山にあるこの神山復生病院は、創立以来百二十年以上続いて

「らい病」は、現在は「ハンセン病」<sup>③</sup>と呼ばれ、日本で古くから知られてきた病気です。今では、この病気は感染症であり、感染力も非常に弱く、早期に発見すれば治療することが分かっています。しかし、以前はよく効く薬もなく、感染すると末梢神経と皮膚が菌におかされるため、顔の皮膚や骨が腐り、盲目になったり、頭髮が抜けたりして、男女の区別さえつかなくなる患者もいました。そのため、当時、らい病は不治の病で、恐ろしい伝染病と見なされ、患者は不当に差別されていました。また、患者本人だけでなく、その家族も同様に差別されることが多かったため、家族は患者がいることを周囲に隠そうとして、死ぬまで家の離れに隔離したり、患者自身が家を出て、そのまま外で死んでしまったりすることが数多くありました。

名門の家かららい病の患者が出たと知られたら、親や親戚に迷惑がかかります。八重は、過去を一切断ち切るという慣例に従い、「井深八重」の名を捨てて、「堀清子」と名乗るようになりました。しかし、名前を変えても気持ちは変わりませんでした。毎晩涙が止まらず、絶望感から自ら命を断とうと考えたことも一度や二度ではありませんでした。「八重さん、今どちらにいらっしゃるのですか。急に行方が分からなくなり、皆心配しております。」転送されてきた友人や教え子からの手紙を何



中央左がレゼー院長、中央右が八重

③ 一八七三年にノルウェー人医師のアルマウエル・ハンセンが病原菌を発見したことによる。今では「らい病」と言う言葉は使われない。本文中でも最小限の記載に努めた。

度も読み返すと、どうしようもなく涙があふれてくるのでした。

ドルワル・ド・レゼー院長は、当時七十歳の高齢でした。フランス貴族出身のカトリック司祭でありながら、日本という異国の地で、献身的に患者に尽くしていました。当時、この病院には看護婦（現在の看護師）はおらず、資金の援助も少ない状態でしたが、院長は一人で治療を行い、時には水を求めて慣れない井戸掘りさえしていました。

ある日、病院の中庭を散歩していた八重は、ふと院長の様子が目に入りました。院長は、顔や手が赤く腫れて膿んでいる患者たちに、病気を恐れることもなく素手で手当てをしているのです。そして、患者一人一人に笑顔で、冗談を交えて話しかけ、患者の気持ちを和ませていました。

「希望をもてないはずの患者たちが、院長のおかげであんなに楽しそうに笑っている。」  
八重はしばらくその光景を見つめていました。

信仰の故とは云いながら、故国を遠く、風俗習慣すべて異なるこの見知らぬ国へ渡り、このような病者をわが子と呼び、御自身もその親ともなつて尽して下さるそれらの偉業に対し、日本人としてだまつていてよいのだろうか、私はしみじみと考えました。

〔道に来て〕井深八重より抜粋、『人間の碑——井深八重への誘い——』井深八重顕彰記念会

それから間もなく、八重はレゼー院長を助けて重症患者の看護を始めました。窓ごしに空を見上げると、厚い雲の間からひとすじの光が射すのが見えました。

やがて三年が過ぎましたが、八重の症状は悪くなるどころか、少しずつ良くなっていったのです。そして再び検査を受けたところ、「らいにあらず」という診断が下されたのでした。三年前の診断は誤診だったので。院長も八重も、とても喜びました。しかし、八重は、「もし許されるのであれば、ここに留まり、院長のお手伝いをして病院のために働きたいのです。」

と申し出ました。再び教師として働くという選択肢や、院長から提案された、院長の故郷のフランスに移住するという選択肢は八重の心の中にはありませんでした。レゼー院長は、八重の希望を喜んで受け入れました。

八重は看護婦になることを決心しました。そして、看護学校で免許を取り、病院唯一の看護婦として働き始めた時には、二十六歳になっていました。患者は六十人くらいいましたが、その一人一人の患部を洗い、軟膏を塗り、包帯を巻いて皮膚の手当てをします。他にも、炊事や食事の世話、かさぶたや膿の付いた包帯や衣服の洗濯、病院の経理や寄付金を集



洗濯風景（正面を向いている人物が八重）

めることなど、あらゆる仕事を行いました。自ら選んだ看護婦の道とはいえ、あまりの重労働に、病院から逃げたくなることもありましたが。それでも、愚痴をこぼしたり、弱音を吐いたりせず、「一度休んだら癖になる。だから怠けてはだめだ。」「私は侍の子だから。」と何度も自分に言い聞かせ、辛い時期を乗り越えました。

患者たちも、病状に応じて、水汲み、畑仕事、精米、薪割り、建物の補修、裁縫や洗濯、餅つきやそば打ちなど、病院の自給自足を目ざして協力しながらよく働きました。そして、時にはピクニック、野球やテニス、音楽や芝居などを行い、お互いを楽しませながら、病院を、そして自分自身を支え続けました。

井深八重は聖書にある「一粒の麦」<sup>④</sup>という言葉が好きだったといわれています。一粒の麦は、そのままではただの一粒にすぎませんが、地面に落ちればそこから豊かな実を結んでいきます。時には優しく、時には厳しく患者に接し、まさに病院の「一粒の麦」として、八重は六十五年間にわたり、患者の救済に自身の生涯を捧げました。

「母にもまさる母」と呼ばれ、多くの患者たちや看護婦たちに慕われてきた八重は、長年の功績が高く評価され、一九五九（昭和三十四）年にローマ教皇であるヨハネ二十三世から聖十字勲章が、一九六一（昭和三十六）年には国際赤十字社から看護婦の最高の名誉であるフローレンス・ナイチンゲール記章が贈られました。日本においても、黄綬褒章を受賞し、宝冠章勲五等にも叙せられました。また、一九七五（昭和五十）年には、アメリカの週刊誌『TIME（タイム）』に「マザーテレサに続く日本の天使」と紹介されました。

④ ヨハネによる福音書第十二章二十四節、「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」より。

一九八九（平成元）年五月十五日、八重は「お世話になりました。神様の待っておられるよいところに行きます。喜んで……。」と短く語り、九十二年の生涯を静かに終えました。折しも翌日は、こうやまかくせい神山復生病院の創立百周年にあたり、式典に訪れた多くの人々が、思いがけず八重との別れを惜しんだといえます。

〔教材作成委員会〕作成

（写真提供 神山復生病院）


 私の明日

あすか  
 明日香は四月から高校三年生だ。大学進学を目ざしていた。しかし、震災・原発事故以来、受験生とは程遠い生活をしてきた。避難所生活も一か月を超えようとしている。明日香の村が福島第一原子力発電所から三十キロメートル圏内に入っていて、全村避難という事態になっていたからだ。

避難所に置かれたテレビは、震災と原発事故に関するニュースばかり流している。正直、もううんざりだった。しかし、明日香は、あるニュースにくぎ付けになった。ニュースキャスターが「福島では、農作物が次々と出荷制限<sup>①</sup>されている。」と言ったからだ。せっかく作った野菜が出荷できない。私たちの生活はどうなってしまうのだろう。明日香の家も、稲作と畑作をしてきた農家だった。

祖母は避難所で生活する間、田んぼや畑のことを一切口にしなかった。このときもいっしょにニュースを見ていたのに、何も言わなかった。

「体を動かさなくなったから、太ったわあ。何もすることがないからねえ。」  
 こうぼやいて祖母は笑っていた。こんなときでも笑顔を絶やささない。いちばんつらいのは祖母のはずなのに、いつもと同じ朗らかな祖母だった。

振り返ると、母と目が合った。(ああ、母も同じことを感じている。)と明日香は思った。

明日香はおばあちゃん子で、子どもの頃から、祖母が米や野菜を作っている姿をよく見ていた。明日香や弟の拓也<sup>たくや</sup>が「これ、おいしいね。」と言って、夢中で野菜を食べているそばで、祖母はとても嬉しそうに

① 農産品を市場に出ないようにすること。

ここにこと笑うのだ。明日香は、いつの頃からか、「私もおばあちゃんみたいに自分で野菜を作ってみんなに  
おいしいって言ってもらえたらいいなあ。」と思うようになっていた。

明日香は、小学校の頃から家に帰ると農作業の手伝いをしていた。稲の種まき、田植え、稲刈り、はせ掛  
け、葉たばこの移植・補植<sup>⑤</sup>などの手伝いである。葉たばこの移植のときは、近所の人が手伝ってくれるのに  
交じって明日香も祖母といっしょに作業をした。明日香がビニールシートの一つ一つに穴をあけ、そこに祖  
母が苗を入れていく。二人三脚の作業だ。

「明日香は手際がいいねえ。私より上手だわ。」

祖母はお手伝いの人たちにそう言って笑った。農作業の合間にたわいのない話をするとき、祖母は本当に楽  
しそだった。

「おばあちゃん、私、おばあちゃんみたいに農家をやりたい。」

「明日香、農家だけはやめておきなさい。」

明日香は、祖母の言葉に驚いた。

「明日香の気持ちは嬉しいけれど、農家は苦勞が多いんだよ。雨の日も雪の日も、外に出て働かなくちゃな  
らない。お前には勧めたくないねえ。」

庭の向こうに青々と広がる田んぼを見ながらこう話す祖母は、やはり笑顔だった。

「私もいろいろ考えたんだよ。獣医さんとか、薬剤師とか。だけど、やっぱり農家がいいって思ったの。拓  
也より、私の方が農業が好きなんだから、私家が継いだ方がいいんだよ。ぜったい。」

中学生になっても明日香の農業への憧れは変わらなかつた。祖母は、農家を取り巻く社会の厳しい現状を  
話してくれた。明日香は、祖母の話で初めて農業を仕事にするのは、そんなに簡単ではないことを知った。

② 刈り取った稲を自然乾燥するために木や竹を使って干すこと。地方によって「はせ掛け」「おだ掛け」等さまざまな呼び方をする。



はせ掛け

③ 「たばこ」の原料となるタバコ属の植物、または、その葉のこと。

④ 播種箱<sup>はしほび</sup>で育ててきた苗をポット等に植え替えたり、苗を畑やコンテナなどに植え付けたりすること。



たばこの苗の移植

⑤ 写真提供・福島県農業総合センター(旧福島県たばこ試験場)

⑤ 植樹・造林等で、苗木が枯れてできた空地に、再び苗木を植えること。

両親も、明日香が農家になるのには反対だった。しかし、高校生になっても農業に関わる仕事をすると言い張る明日香に負けて、農学を学ぶ道に進むことは認めてくれた。(稲の良い育て方とかおいしい野菜の作り方とか勉強するんだ。そうしたら家族にも村にも役に立つだろう。)そう思うと胸がわくわくした。祖母は、そんな明日香の夢を、やはり笑顔で聞くのだった。明日香は高校二年になると、農学部へ進学するために理系クラスに入った。この頃から明日香はバイオテクノロジーに興味<sup>わ</sup>が湧いていた。

そんなとき、あの震災と原発事故が起きたのだ。

原発事故の後、福島の農業の状況は大きく変わってしまった。この状況の中で大学に進学して農学を学ぶ道を選んでいいのだろうか。明日香は、初めて自分の進路に対して悩み始めた。原発事故で村での農業はできなくなった。田んぼも畑も荒れるままだった。少しずつ除染<sup>⑥</sup>は進められているが、除染で表土をはぎ取ってしまうと、土を耕し、肥料を入れ、雑草を取り、丹精込めて作り上げてきた農地はなくなってしまふ。つまり、農地にする以前の状態に戻ってしまうのだ。それをもう一度農地にするのは大変な作業だ。今、祖母は大切にしてきた農家としての全てを失って、じっと耐えている。

明日香は、祖父母に、もう一度私たちの村で元のように働くことができるようにしてあげたいと思った。「私、やっぱり大学で農学を勉強したい。村でもう一度農業ができるようになる方法を見つけないか。除染した後の土地をできるだけ早く農地に戻せるようになる方法を。」  
もともと明日香が農学を学ぶことを賛成していなかった両親が、初めて明日香の話聞いてくれた。

今、両親と祖父母は仮設住宅で暮らしている。村は少しずつ除染が進められているようだ。だが、まだ村

⑥ 放射性物質や放射性物質が付着したものを除去し、人が生活している空間の放射線量を下げること。その方法は、さまざまである。

へ帰ることはできない。それはもっと先になるだろう。

明日香は福島を離れて大学で農学を学んでいる。おいしい米や野菜の作り方を学びたいとぼんやりと考えていた中学生や高校生の頃とは違う。やるべきことは決まっている。除染した土地を少しでも早く農地に戻し、活用できるようにする方法を研究することだ。レポートや実験、実習も大変だ。毎日が忙しい。だが、この毎日をつらいとは思ってはいない。今日の先にあるときとは違う祖母の笑顔があると思うからだ。

（「教材作成委員会」作成）




 道標

真一しんいちが視覚に違和感をおぼえたのは、中学校の卓球部で練習をしているときだった。それまでは普通に返球できていたのに球の軌道が見えにくくなった。眼科に受診をして緑内障であることを告げられた。手術をしたが視力は改善することなく、それでも普通高校に進学した。

病状は変わらなかった。左眼の視力がほとんど無いことを隠して通学していた。体育の授業でバスケットボールをよけ切れずに、「どうした、真一。ちゃんとボール見ているのか。」と言われたり、教科書に顔を近づけるために、無意識に姿勢が悪くなったりした。

「真一はいいよな、出席番号最後で。窓際まじりかわだし一番後ろの席だし。」

真一の心の内は誰も知らない。教室の後ろの隅からでは、黒板の文字は全く見えないのだ。「前の席を希望する人は申し出るように。」と先生は言っていたけれど、片方の目が見えないことは誰にも知られたくなかった。しかし、何とか自力で予習して、必死で聞き取った授業の内容を復習することにも限界があった。そんな恐怖心から少しは解放されると思うと、明日から始まる夏休みは真一にとって何よりの救いだだった。

「ただいま。」

「おかえり、暑かったでしょう。今日はどうだった。」

「べつに。」

そう言ってテーブルの上にかばんを投げ出し、リビングのソファに寝転んだ。

母親の「今日はどうだった。」には、「目が見えないことで友達にからかわれたりしなかったか。」とか「学

校への行き帰りの路上で危険な目に遭わなかったか。」とききたいのだということを、真一はよく分かっている。テレビをつけようとりモコンに手を伸ばしたとき、テーブルにある一枚のちらしに気がついた。手に取って間近に見ると、それはおそらく母親が置いたのであろう富士登山の募集ちらしだった。そこには大きな字で『あきらめず一步一步登っていけば、必ず夢はかないます。日本一の富士山に一緒に登ってみませんか。』と書いてあった。部活動をしていない真一に、母親は、夏休みのキャンプや野外体験などのちらしを持ってきては、真一に参加するよう勧めていたのだった。

「こんなの絶対行かねえからな。」

真一は台所の母親には聞こえない声で言い捨てた。

しかし、夜、布団に入ってから、「日本一の富士山」という文字が真一の頭から離れなかった。(行きたかったって人の迷惑になるだけじゃないか。山登りに挑戦したからって、どうなるっていうんだ。) そう思う一方で、真一はキャンプや屋外体験とは違う魅力を富士登山に感じていた。自分自身を試してみたい、今の自分を変えたいという思いは今までもあったし、今でも強く願っていることだ。日本一の山に登ったら何かが変わるかもしれない。そう思うと目が覚めて眠れなかった。

次の日、朝ご飯の準備をしている母親に声をかけた。

「あのさあ、富士山に登ってみようかなあ。」

「あら、どうしちやったの。」



母親は、笑顔で振り向いた。

### 富士登山への挑戦

和神 真一

「一緒に富士山を登ってみませんか。」

私は、最初この話を持ちかけられた時は全く興味が沸かず、むしろ嫌でした。なぜなら、他の人に迷惑をかけないか、視野が狭く見え難い自分が無事に富士山の険しい山道を登れるか、視覚障がい者の私が、健常者の高校生の中に混ざっていたら、変に思われなかつたかという不安があったからです。

登山の前にオリエンテーションがありました。スタッフの中に視覚障がい者の山登りをサポートしてくださる方たちがいて、その人たちと一緒に登ることになりました。安全に登ることができると安心し、不安はひとつ解消されました。しかし、まだ別の不安が残ったままです。それは何と参加する高校生は、六十人いたのです。私は、てっきり十人か二十人程度かなと思いついていたので、本当にこの人たちの中でうまくやっていけるのか、と逆に不安は大きくなりました。

いよいよ二泊三日の富士登山に出発する日がやってきました。一日目の夜、一人不安を抱えたまま部屋にいたら、とある男子たちが、何とこの視覚障がい者である私を、

「一緒にトランプやろうぜ。」

と誘いに来てくれたのです。学校のことなど他愛のない話をしていくうちに、抱えていた不安が薄らいでゆくのがわかり、小さなことにこだわっていた自分がバカらしく思えてきて、共通する話題で笑いが止まりませんでした。視覚に障がいがあるからといって、変に思われることはなかったのです。

二日目は、前夜の事もあり、自然と心が弾んでいました。ご来光を見るために、朝早く起きて登り始めたのですが……。生憎あいにくの雨で岩場は滑りやすく、視界の利かない私は「この先段差」とか「頭の上気をつけて」と教えてもらっても、ふらついたり、転んだりの連続でした。雨は降り続き、険しい山道を登っても登っても、辺り一面雲に覆われていて、ご来光どころかずと真っ白のままでした。結局、頂上まで周りの景色は変わらず、雲の中を泳いでいるようでした。本当に自分たちは富士山に登頂したのかと、一緒に登った人たちと笑い合いながらも、今までに味わったことの無い達成感がありました。

下山してからの毎日は、これまでの日常とは違った景色が広がって見えるようになりました。まるで心にかかっていた霧が晴れたように。

障がいがあるからといって自分の世界だけにとらわれず、もっと広い視野で周りを見てみる事が大切だなと感じるようになりました。たとえiPS細胞①による網膜の再生より私の眼が光を失う方が早くとも、何にでも挑戦し、人生の山坂を踏破してみせます。

(平成二十五年 東北地区盲学校弁論大会出品作品)

(「教材作成委員会」作成)

① 人工多能性幹細胞。二〇〇六年に山中伸弥教授たちの研究グループが、世界で初めてマウスの細胞を用いてiPS細胞を作ることに成功した。

## 三十年後の桜

① NPO法人ハッピーロードネットは、双葉郡の子どもたちのために活動している団体である。道路沿いのごみ拾いをしたり、花を植えたりといういろいろなボランティア活動をしている。その活動の中心にいるのが、広野町に住む専業主婦の西本由美子だ。西本は、自分の子どもが自立してから、地域の子どもたちのボランティア活動を推進するNPOの活動をしていた。その活動の一つとして、近くの高校生たちと海沿いを走る浜街道に桜の木を植える活動をしていた。西本は、ハッピーロードネットのメンバーと会うたびに、桜が咲き誇る世界一美しい浜街道にしようと話していた。



西本は震災当日、仙台での会議に出席する予定があった。しかし、その日の朝はそれまでに感じたことのない体のだるさに襲われ、会議をキャンセルしたのだ。もし仙台での会議に参加していたらと思うと凍りそうになった。津波があったあたりを車で通過していて大津波にのみ込まれていた可能性があった。西本は、自分の命がある、ありがたさを痛感していた。

しかし、東日本大震災による大津波は、西本たちが植えた桜の木とともに、その活動の中心だった高校生の咲子の命を奪ってしまった。咲子は当時、卒業後の進路も決まり、運転免許を取得しようとしている最中であつた。あの日、自動車教習所の送迎の車に乗っていたところを津波にのまれて、帰らぬ人となってしまうのだ。

咲子の死を知ったときに思った。

(この生かされた命を無駄にはいけない。)

① 「特定非営利活動促進法（NPO法）」により法人格を認証された民間非営利団体。

津波の犠牲になってしまった咲子は常々、

「ボランティアは人に感謝すること。やらせていただくものだから、人にやらされるのではなく、自ら進んでやるものなのよ。」

と後輩の中学生に教えていた。しかし、そんな咲子も西本と活動をいっしょに始めた頃は、学校の先生に無理矢理連れてこられて、しぶしぶやっていたのであった。その成長した咲子の命を、大津波は一瞬にして奪ってしまったのだ。

大震災と原発事故から一年が経った春に、西本は、避難先である仮設住宅のテレビ映像で富岡とみおかの夜ノ森よのもりの桜を見た。誰もいないところに静かに咲く桜の木々たちを見て、西本の目から涙が溢れていた。そして、そのとき、あの大津波にさらわれてしまった咲子への思いとともに、もう一度、「世界一美しい浜街道にしよう。」と思い立ったのだ。国道六号線沿いを満開の桜でいっぱいにしようかと決心したのだ。西本はハッピーロードネットのメンバーに自分の気持ちを打ち明けた。

「六号国道に桜並木を作ろう。世界に誇れる浜街道にしよう。」  
メンバー全員が西本の言葉に頷うなずいた。避難生活を強いられているにもかかわらず、メンバー全員が協力を申し出たのだ。

必要なものは、数えたらきりがなかった。まずは資金がない。どうやって桜の苗木を調達するのか。誰が植えるのか。誰が管理して、誰が維持していくのか。西本は考えた。自分のような年配の者ではなく、三十年後も活動できる人にやってもらおう。そこで、地元の青年会議所のメンバーに相談してみた。西本の熱い願いは受け入れられ、青年会議所のメンバーも意気込んだ。浜通りはまどおりの各青年会議所へ連絡を入れ、賛同を得るまではさほど時間がかからなかった。しかし、問題は活動資金だった。

桜の苗木を国道六号線沿いの一九三キロメートルに植樹するとすると、少なくとも桜の苗木は二万本が必要となる。まずは、県の震災復興を担当する課に話を聞いてもらおうとした。将来の子どものための事業であることを熱く訴えたが、趣旨には賛同してもらえなかったもの、提示された額は、予算額の五分の一にも満た





なかった。

資金の準備と並行して、植樹する場所の許可を得る交渉も始めた。国道六号線沿いに十二メートル間隔で桜の木を植える許可を国土交通省に申請した。そして、同じ頃、資金のめどが立たないまま、この桜のプロジェクトの事業をマスコミの力を借りて全国へ発信することにした。五月の最初の交渉から始まり、何度も何度も行政に出向き、復興を担当している課だけではなく、聞いてくれそうな課を回り歩き、賛同を求めた。西本は、自分の中の思いを絞り出すように担当者に訴えた。粘り強く、時には涙ながらに、復興の意味と子どもたちの将来への希望を熱く訴え続けた。

「多感な子どもたちは、多くのものを失って、苦しい避難生活をしている。今ここで、大人たちが行動を起さなかったら、誰が子どもたちの三十年後を守ってやれるのですか。」

ついに十月、計画していた希望通りの予算額を支援してもらうことができた。西本は、ハッピーロードネットのスタッフたちと抱き合い、皆で涙した。国土交通省への申請も済み、世界一の桜の名所をめざす桜プロジェクトは、本格的に動き出すことになった。さらに西本は精力的に動く。県外や県内の市町村へ出向き、それぞれの市町村長に会い、桜プロジェクトの賛同を得ようと必死になって訴えた。さらに、企業からの賛同も得ようと奔走した。会津若松市を訪れたときのことだった。立ち寄った蚕養国神社で、なんと樹齢千年を数える「峰張桜」の後継木を一本頂いたので。千年に一度ともいわれるような大震災に千年生きる桜が見守るといふ「ご縁」を感じずにはいられなかった。そして、この木を復興の基地である「ヴィレッジ」に植えることに



決めたのだ。さらに、しだれ桜で有名な三春町からは、三春滝桜の苗木を二本寄贈してもらった。その頃には、多くの企業からも賛同を得ることができ、植樹した後の桜の管理や維持費の準備も、徐々にではあるが整っていった。

震災から二年後、新地町を皮切りに、いわき市、南相馬市、榎葉町と浜通りの各地で、国道六号線沿いの桜の植樹がスタートした。翌月には、西本の地元である広野町での植樹も行われた。ハッピーロードネットのボランティア活動に参加していた地元の中学生たちも、避難しているいわき市から母親らと一緒に駆けつけた。

「おばちゃん、来たよ。」

聞いたことのある懐かしい声があった。西本の息子とその友人たちだった。

「みんな、どうやって来たの。」

西本の目には涙が溢れていた。息子と友人たちはハッピーロードネットのホームページを見て、東京から植樹にわざわざ駆けつけたのだった。

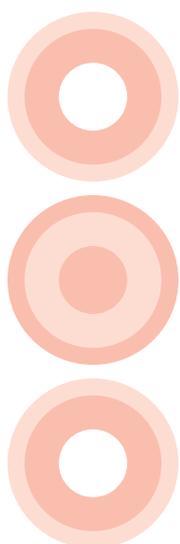
西本が忙しい合間を縫って協力をお願いし、賛同を得た企業の他に、個人の会員として桜のプロジェクトに賛同する人々の数も徐々に増えた。北海道から沖縄までの日本全国、年齢・性別を問わず幅広い世代にわたり復興を願う会員数は八千人を超えた。桜の苗木を植樹した人は、メッセージ入りのプレートに飾ることができた。

広野町での植樹に集まった子どもたちの言葉が、西本の耳に残っている。

「西本さん、三十年後、花が満開になるときに、自分の子どもと来るからね。」

〔教材作成委員会〕作成





第

Ⅱ

章

# 読み物資料の活用例



## おむかえ

## 4—(3) 家族愛(小学一・二年)

## 一 ねらい

自分が家族からの愛情によって守られていることに感謝し、家族を大切に  
する心情を育てる。

## 二 資料の特質

## (1) 資料の生かし方

小学校低学年の時期は、幼児期の自己中心性は残っているものの、他人の立場を認めたり、理解したりする能力も徐々に発達してくる。この時期に、家族に依存している日々の生活について振り返らせることは、意義のあることである。

本資料は、実際にあったエピソードをもとにしている。連絡もなかなかつかない状況の中、主人公を迎えに行くために何時間も歩いた姉の姿から、家族の愛情やありがたさ、家庭のぬくもりについて考えを深めさせたい。

## (2) 資料の概要

小学校で東日本大震災に遭遇した主人公は、家庭との連絡が付かないまま、友達とともに体育館で家族の迎えを待つことになった。友達の家が次々と迎えに来る中、主人公の迎えが来たのは夕方遅くになってからであった。しかし、主人公は、長時間歩いて迎えに来てくれた姉に対し、一人で待っていた苛立ちから、冷たい言葉をかけてしまう。

家に帰った主人公は、姉が駅から三時間も歩いて自分を迎えに来たことや、兄もまた自分を探し歩いていたことを知る。

## (3) 資料を通して伝えたいこと

東日本大震災を機に「家族の絆」が強まった。親にも子にも、「家族はかけがえのないもの」「家族と一緒に過ごしたい」という意識が強まっ

ていると言われている。

本資料を通し、低学年の児童に対して、自分が家族からの愛情や努力によって守られていることに感謝し、家族を敬い大切に思う心情を育み、その上で、家族の一員としての自覚を育てていきたい。

## 三 展開例(○発問、◎中心発問、●主な活動)

- 家族について考えていることを自由に話し合う。
- ◎ 体育館で家族の迎えを待つときのひなさんは、どんな気持ちだったのだろうか。
- おねえちゃんが迎えに来てくれたときのひなさんは、どんな気持ちで言葉を書いたのだろうか。
- おねえちゃんや家族のみんなが自分をさがしてくれた話を、ひなさんはどんな思いで聞いたのだろうか。
- ◎ ひなさんは、どんな気持ちでおねえちゃんに電話をしたのだろうか。
- 自分の家族について振り返り、家族が自分のことを思う気持ちや愛情について考えを深める。

## 四 「わたしたちの道徳」(小学校一・二年)との関連

「家ぞくのやくに立つことを」(百三十八〜百四十三頁)を活用して話し合い、家族のよさや家庭のあたたかさ、家族のために自分ができることなどについて考えさせる。

## 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 生活科における探究活動や体験活動との関連を図るとともに、授業や、家庭との連携しながら進めていく。
- 役割演技を取り入れることは、家族の心情を考えさせるためにも有効である。

○ 震災に関連した資料であることや、多様な家族構成や家族状況があることを踏まえ、児童一人一人への十分な配慮を欠かさないようにする。

ぼくたちの学校

4 — (6) 愛校心 (小学五・六年)

一 ねらい

最高学年としての自覚をもち、自分たちの学校や校風・伝統を大切に思い、みんなで協力して自分たちの学校をよくしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

小学校高学年の時期は、児童会委員会活動やクラブ活動などで中心的な役割をになう。学校の一員であることや代表であることへの気持ちが生みえる。

本資料は、震災や津波によって、主人公たちの学校が壊れたが、様々な人々の助けを受けて、他校を間借りして学ぶことができるようになったという内容である。もとの学校にもどれる日まで、たくさん感謝を忘れることなく先生や仲間たちと共に母校を守っていこうとする主人公の気持ちを考えさせたい。

(2) 資料の概要

震災時、津波によって学校や家を失い、また、原子力発電所の事故によって、多くの友達も避難してしまい、長い間、友達とも先生とも会うことができなかった。これからどうなるのだろう、学校はなくなってしまうのだろうか、という不安を抱えた中、学校再会の連絡を受け始業式の会場へと行くと、先生方の笑顔と「心配していた」と再会を喜ぶ級友の姿があった。元気がない仲間を元気づけるために何とかしたい、六年生としてできることはないかと考える。そして、校歌を歌うことや、学校を思うことが仲間を元気づけることだと気付く。

(3) 資料を通して伝えたいこと

校舎はなくても仲間と協力し合い校風を引き継いでいく気持ちが一人一人の心になれば、愛校心は生まれる。母校と呼べる学校をみんなで作っ

ていこうとする大切さを考えさせたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・自分の学校のよさについて話し合う。
- 始業式に行く前、史哉はどんな気持ちだったのだろうか。
- 校長先生の話を聞いて、史哉はどんな気持ちになったのだろうか。
- バスの中でゆう君に「このバスの中も学校だね。」と言われたとき、史哉はどんな気持ちだったのだろうか。
- ◎バスの中で、史哉はどんな気持ちで校歌を歌ったのだろうか。
- ・学校の校風を守っていくためのこれまでの取組を振り返る。

四 「私たちの道徳」(小学校五・六年)との関連

「より良い校風を求めて」(百六十〜百六十三頁)を活用し、校風を考えさせ、自分たちの学校をよりよくしていくために、今の自分に何ができるかを考えさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

- 導入の段階で、学校の写真や校歌の歌詞などを用意しておき、資料をもとに自分たちの学校や校風について考えることができるようにする。
- 震災で辛い経験をした児童も多い。資料を活用する際、実態に応じて十分な配慮をする。

六 補足資料

主人公が応援してくれた人々に向けた作文

「みなさんありがとうございます。僕たちは、いつも永崎小学校に帰れることを祈っています。いつ戻れるか今はわかりませんが、どこにいても、僕たちの母校は永崎小学校です。これからも下を向かず、いつも上を向いていたいと思います。僕たちのために本当にありがとうございます。」

## がんばらやんばい

## 2—(4) 尊敬・感謝（小学校三・四年）

## 一 ねらい

日頃、自分たちの生活を支えている人々やお世話になった人々を尊敬し感謝する心情を育てる。

## 二 資料の特質

## (1) 資料の生かし方

小学校中学年の時期は、自分を取り巻く環境への理解が深まるとともに感謝する対象が家族だけでなく、自分たちの生活を支える人々にまで広がっていく。

本資料の主人公「ぼく」は、遠く久留米市から援助に来てくれた水道局の人について知ることとなる。そして、水の確保を支える人々の存在と、その思いに気付くことで、復興への第一歩を力強く踏み出すようになっていく。その主人公の心情に共感させることで、日々の生活を支える多くの人々の存在に気付かせたい。

## (2) 資料の概要

震災当日から毎日、車で公園に水をくみに行っていた主人公とその家族は、もしもの時の避難のために、ガソリンはできるだけ節約したいと考える。そこで、遠くの公園まで歩いていくことになった。主人公は「大切な仕事」という認識はあるが、なかなか積極的になれない。そんな中、「近くの集会所でも給水ができるようになった」との連絡を受ける。集会所では福岡県久留米市の水道局職員が給水の世話をしていた。主人公は、遠く離れた地域からかけつけてくれた人々の支えがあって、水を確保できることに気付く。そして、感謝の気持ちをもって、水くみに前向きに取り組んでいくようになっていく。

## (3) 資料を通して伝えたいこと

多くの子どもたちが生活用水の確保のために給水所に並んだ。そして、

その生活用水を被災者に届けるために、全国の給水車や水道局職員が被災地で活躍した。たくさんの人たちに支えられたことを再度思い起こすことで、子どもたちの感謝の思いを多くの人に広げ、人間社会の温かさを感じさせたい。

## 三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・ 毎日の生活の中でお世話になっている人々について想起し、理由も含めて話し合う。
- リュックサックに入るだけのペットボトルを入れたお父さんの背中を追って給水所へ向かうぼくは、どんな気持ちだったのだろうか。
- 地域の人が協力して水をくんでいるのを見てぼくは、どんな気持ちだったのだろうか。
- ◎ 水道局の人の話を聞いて、ぼくはどんなことを思ったのだろうか。
- ぼくは、どんなことを久留米市水道局の人に伝えたいのだろうか。
- ・ わたしたちの道徳（八十二～八十七頁）を活用し、自分たちの生活を振り返る。

## 四 「わたしたちの道徳」（小学校三・四年）との関連

「そんけいと感謝の気持ちをもって」（八十二～八十七頁）を活用し、自分たちの生活のために働く様々な人々の存在があることに視点を広げる。

## 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 社会科など他教科で学習した毎日の生活を支える人々の仕事と関連付けを考えることができるよう、授業を構想する。
- 本資料は、方言や地理等について解説が必要になるため、児童が理解できるように補足説明する。
- 東日本大震災や原発事故以来、水道局の他にも日本だけでなく、世界中から様々な支援をいただいていることも考えさせたい。



## 私の誕生日

たんじょう

## 4—(5) 家族愛（小学五・六年）

## 一 ねらい

家族の無償の愛に気付き、感謝するとともに、家族の信頼関係と深い絆を大切にしようとする心情を育てる。

## 二 資料の特質

## (1) 資料の生かし方

小学校高学年の時期は、日常生活の中で、自分に対する家族の深い愛情や自分のかけがえのない居場所である家庭の大切さに気付かずにいることが多い。しかし、東日本大震災は、家族との絆を改めて考える機会になった。

本資料は、家族の祝福を受けることがあたりまえのように感じている誕生日に焦点をあてている。

誕生日が震災の日と同じ三月十一日である主人公の心の揺れや気持ちの変化を話し合うことで、家族の心づかいや願いに気付かせ、家族の一員としての自分の生き方を考えさせたい。

## (2) 資料の概要

春香の家では、家族の誕生日に母の描く似顔絵と手作りのケーキが欠かせない。しかし、春香の十一回目の誕生日に東日本大震災が起こったために、ケーキが夕飯代わりになり、大好きな叔母も来られなかった。震災の翌年、二年ぶりの誕生日が開かれたが、春香は、家族の「おめでとう。」の声にうつむいてしまう。助産師の叔母から、震災の日に生まれ、みんなに守られて生き抜いた赤ちゃんのこと、春香が誕生した時の両親の思い、「似顔絵」に込められた母の願いを聞き、春香は、家族の愛情やかけがえのなさを感じ取る。

## (3) 資料を通して伝えたいこと

家族は、子どもたちが大人に成長していくための原点であり、人生においてつまずいたとき、乗り越える勇気の源ともなる。また、家庭は、互いを思いやり、自分の役割を自覚する中で社会性を身に付けていく場

でもある。一年に一度訪れる誕生日について話し合うことを通して、家族の一人一人が相手の立場や気持ちを考え、温かい心で接し、助け合うことがよりよい家庭を築くことにつながることを伝えたい。

## 三 展開例（○発問、◎中心発問、●主な活動）

- 家族がいてよかった、と思ったことについて話し合う。
- 水も電気も止まった家の中でケーキを食べているとき、春香はどんな気持ちだっただろうか。
- みんなの「おめでとう。」の声に、うつむいてしまった春香は、どんなことを考えていたのだろうか。
- ◎ さよ子おばちゃんから、震災の日に生まれた赤ちゃんのことや母が毎年描く似顔絵の意味を聞いたとき、春香は心の中で、どんなことを思ったのだろうか。
- 「ありがとう。」と力強くうなずいた春香は、どんなことを思ったのだろうか。
- 家族にあてた手紙を書く。

## 四 「私たちの道徳」（小学校五・六年）との関連

「家族の幸せを求めて」（百五十六〜百五十九頁）を活用して、家族に見守られてきた自分の歴史を振り返らせたり、家族の一員としてできることを考えさせたりする。

## 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 家族に対する意識（よさを感じたこと、けがや病気を心配したこと、怒りを感じたり反発したりしたこと）や家族の一員としてしていることなどを事前に把握しておき、意図的指名に活かす。
- 家庭科や保健の学習との関連を図り、家庭での自分の役割を自覚させ、継続的な活動や実践につなぐことができるようにする。
- 事前に、家庭から「子どもたちへのメッセージ」を書いてもらい、家族の大切さに気付かせる。
- 多様な家族構成や家族状況があることを踏まえ、児童一人一人への十分な配慮を欠かさないようにする。

## 五〇〇人の大家族

2—(2) 温かい人間愛 思いやり(中学一・二年)

## 一 ねらい

どんな時でも、人は互いを思いやり、支え合いながら生活していることに気付く、身の回りの人々を思いやり、行動しようとする態度を育てる。

## 二 資料の特質

## (1) 資料の生かし方

中学生の時期は、誰かと人間的なかわりを強く望む一方で、自分の力で何でもできる、干渉しないで欲しいと思う矛盾した気持ちを抱えている。また、時として自分のことを優先して考えてしまう。

本資料は、震災の被害が少なく、多くの被災者を受け入れた地域の人々の姿を描こうとした。混乱の中で受け入れを決断した父の姿から、温かい人間愛について考えさせたい。

## (2) 資料の概要

大震災発生の翌日、地盤が固く、被害が少なかった会津の温泉旅館が被災者を無料で受け入れる決断をする。原発事故の混乱がいつまで続くかの見通しが全くない中、主人公は、被災者を受け入れることに不安を募らせていた。しかし、同じ福島県に住む者が互いに助け合い、思いやりながら生きている姿を目の当たりにし、また、受け入れを決めた父の思いを知ること、自分もまた支えられている存在であることに気付く。

## (3) 資料を通して伝えたいこと

震災で観光客が激減し、旅館経営が困難になることは目に見えていた。被災地にいる自分たちが、無償で被災者を受け入れることに抵抗を感じていた主人公とその兄が、周囲の人々の姿と、父の心情に触れて変わっていく。支えていたつもりが、実は自分も支えられて生きている。誰か

への思いやりの心が感謝の心につながり、生きる喜びにまでつながっていくことに気付かせたい。

## 三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・震災により避難をした人々は、どんなことが不安だったのかを話し合う。
- わたしはどんな思いで旅館で働く人々の姿を見ていたのだろうか。
- おばあさんの手の感触を感じながら、わたしは何を考えていたのだろうか。
- 宿泊者を「家族」と言った父の言葉を、わたしはどんな気持ちで聞いたのだろうか。
- ◎兄と目が合ったとき、わたしはどんな思いになったのだろうか。
- ・思いやりのある行動について、自分の生活を振り返る。

## 四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「温かい人間愛の精神と思いやりの心を」(五十四〜五十九頁)を活用し、互いに認め合い尊重し合う「思いやりの心」について考えさせる。

## 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 震災・原発事故後の、生徒一人一人の体験及び考え方・感じ方は違うため、特に避難してきた生徒に対しては十分に配慮する。
- 主人公の父の「後悔したくない」という生き方に触れ、「なぜこんな時に自分たちが人助けをしなければならないのか」と思っていた主人公の心情が変化していく様子は、家族愛(4—(6))として考えさせることもできる。

## 手渡されたパン<sup>わた</sup>

2—(6) 感謝(中学一・二年)

### 一 ねらい

人は人の支えによって生きていることを理解し、感謝の気持ちをもって強く生きていこうとする態度を育てる。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

中学生の時期は、自立心が強まる一方で、感謝の気持ちを素直に伝えられない場合がある。特に、自分の存在に深く関わる事柄になると言葉や行動で感謝を表現することができない。

本資料は、東日本大震災をきっかけに出会った人々とのかわりの中で、改めて自分が生かされていることに気付き始める主人公を描いている。主人公の思いに共感させ、そこから、今、自分ができることを考えさせたい。善意や支えてくれる人々への感謝の気持ちを素直に表そうとする態度の大切さに気付かせたい。

#### (2) 資料の概要

震災後、家族とともに茨城県のおばさんの家に避難した中学一年生の主人公は、余震と放射線による不安からやり場のない怒りでいららしていた。家族を心配してくれている両親に対しても反抗的な態度をとってしまう。避難先のたまみおばさんに対しても感謝を伝えることができず、イライラした気持ちをどうすることもできなかった。しかし、公園で見ず知らずのお婆さんと出会い、やさしくされ、心が動いたとき、祖父の言った言葉の意味を理解した。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

人生には出会いがあり、その中で受けた恩に対し感謝する場面はたく

さんある。そこで、人と人が助け合って生きていくことが重要であることに気付かせ、たくさんの人に支えてもらっているという感謝の気持ちを育てたい。

### 三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・家族がいて良かったと思うことについて話し合う。
- なぜ、ぼくは、むしゃくしゃして外へ出たのだろうか。
- ◎ぼくがパンをかじったときに、訳もなくなみだがこみ上げてきたのはなぜだろうか。
- ぼくは、どういう思いで弟の手を強く握り、もと来た道を足早に帰って行ったのだろうか。
- ・感謝の気持ちを言葉や行動に表せた経験とそのときの気持ちを振り返る。

### 四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「人々の善意や支えに応えたい」(八十二〜九十五頁)を活用し、社会を支え円滑に動かしている「感謝の心」について考えさせる。

### 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 資料を扱う際には、震災時または震災後の生活体験や考え方・感じ方が生徒一人一人に違いがあることを考慮し、実態に応じて配慮する。
- お互いに支え合い、善意のある行為が、人としての絆を育てるのだということに気付かせたい。

この町のために

1—(5) 自己の向上(中学一・二年)

一 ねらい

自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学校入学後の一年生やクラス替え後の二年生は、大きな環境の変化に戸惑い、自信を失ったり、うまく周囲になじめなかったりすることがある。

本資料で、悩みをもって生活しているのは自分だけではないことに気付かせ、前向きに学校生活を送ろうとする気持ちをもたせたい。

(2) 資料の概要

意欲をもって中学校に入学した主人公だったが、実際は慣れない学校生活に戸惑い落ち込む日々が続いた。自分が何をしなくてもどんどん進んでく学校生活に、無気力な毎日を送るようになる。しかし、町のために何かをしようということになったとき、辛かったときに励まされた自身の経験をもとに、うちわにメッセージを書いて仮設住宅に住んでいる人に送ろうという提案をする。その意見が友達に受け入れられたことで、積極的に前向きな自分を取り戻していく。

(3) 資料を通して伝えたいこと

日常生活の中で、「このくらいいいや」「このままでいいや」と、現状に甘んじ、周囲に流されてしまったり、決断することを避けてしまったりすることは誰にでもある。しかし、多くの人々の支えによって生活し、生かされている自分を自覚したとき、よりよい生き方や自己の向上

を目指したいという思いも生まれるはずである。一歩踏み出す勇気をもって、小さなことから自分を変えていく気持ちをもたせたい。

三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・部活動や勉強など、がんばっている友達について話し合う。
- 中学校に掲げられた文字を見たとき、主人公はどんな気持ちだったのだろうか。
- ◎「思わず手を挙げた」主人公を後押ししたものは何だったのだろうか。
- 主人公は、今後の中学校生活をどのように過ごしていくのだろうか。
- ・自分のよさについて考え、これからの生き方について考える。

四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「自分を見つめ個性を伸ばす」(三十八〜四十五頁)を活用し、今の自分を見つめさせ、これからの自分の生き方について考えさせる。

五 指導上の留意点および配慮事項

- 東日本震災後の状況を振り返るため、震災経験のある生徒について十分に配慮する。
- 自分たちが、町のためにできることを考えさせるため、勤労・社会への奉仕・公共の福祉(4—(5))として考えさせることもできる。

## 仮校舎

2—(6) 感謝(中学二・三年)

### 一 ねらい

多くの人の善意や支えにより、自分の生活や現在の自分があることに感謝し、それに応えようとする心情を育てる。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

中学生の時期は、感謝の気持ちを素直に伝えられないことがある。特に現在は、遠方からの支援、数々の援助が当たり前になってしまっているところもある。しかし、気持ちや生活が落ち着きを見せ始める時にこそ「当たり前」について改めて考え、自分たちが、周りの人たちの善意と支えによって生かされていることに気付くことが、これからの復興に欠かせない視点である。

本資料を通して、その人たちの支援や思いに応えるためにはどうすればよいのかを考えさせ、前向きに生きようとする気持ちを育みたい。

#### (2) 資料の概要

避難先で過ごすことになった主人公は、すべてにやる気を失っていて、海外や、各地からのたくさんの方の支援を受けても気が湧いてこなかった。廃校となった小学校を借りてスタートした中学校生活にもなじみずいた。しかし、自分の身の回りであった小さな出来事を通して、「感謝する気持ち」や「思いやりの心」の大切さに気付く、次第に前向きな気持ちを取り戻していく。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

突然の環境の変化に戸惑い、気力をなくしてしまう心の弱さは誰にもある。しかし、今回の東日本大震災、原発事故で被災して、多くの人から支援の手が差し伸べられたり、励ましの言葉をかけられたりしたよ

うに、決して自分たちだけで生きているのではなく、多くの人の思いやりによって生かされているということに気付かせたい。そして、自分たちを支えてくれている人たちの思いに応えるためには、周りの人々への感謝の気持ちを忘れず、精一杯生きることだという考えに共感させたい。

### 三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・自分たちを支えてくれている人々を挙げ、その理由について話し合う。
- 乗り気でなかった奉仕作業の時間が短く感じられたのはどういう気持ちからだったのだろうか。
- ◎ぼくが、朝会で校長先生のお話を聞きながら「それまでの自分を恥ずかしく思った」のは、どんなことを考えたからだろうか。
- 完敗した試合なのに、土屋さんに「思い出に残るいい試合ができました」と答えたのはどうしてだろうか。
- ・自分の生活を振り返り、これまで気付かなかった多くの善意や支えについて考える。

### 四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「人々の善意や支えに応えたい」(八十二〜九十五頁)と関連させ、相手を大切に思う気持ちや感謝の心があれば、表情や態度にそれが表れ、その思いは相手に伝わっていくことに気付かせたい。さらに、前向きに進んでいこうとすることが、数々の支援に応えていくことにつながることに気付かせたい。

### 五 指導上の留意点および配慮事項

○東日本大震災の地震・津波の被害に加え、原発事故による避難が大きな要因となり、避難生活が長引いている家庭があること、また、生徒の身内や知り合いの中には、原発関係で仕事をしている人がかなりいると思われることから、地震の被害の説明では、配慮が必要である。

## たった一秒の「ありがとう」

2—(6) 感謝(中学二・三年)

### 一 ねらい

自分を支えてくれている周りの人々に対して、進んで感謝を伝えようとする態度を育てる。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

中学生の時期は、自他とのかかわりの中で様々なことを思い悩むことがある。一方で、人権の大切さについても自分の経験を重ねて考えることができるようになる。

本資料は、県人権作文コンテストで最優秀賞となった中学二年生の作文である。避難を余儀なくされた筆者の心に寄り添い、人権の大切さと、周りの人々への感謝について考えさせたい。

#### (2) 資料の概要

東日本大震災にともなう福島第一原子力発電所の事故の影響で避難を転々とする筆者の最初の避難所には、着替える場所がない、トイレの水が流れない、食べ物がないなど、今まで当たり前だったことが当たり前でない状況があった。しかし、次の避難所で支援者の温かい心に触れ、勇気と安らぎを得て人間らしい生活と心を取りもどす。そして、筆者は元気になるにつれ、周りの人々に対して感謝の気持ちを忘れていた自分に気付く。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

筆者の避難生活の体験を通して人権の大切さについて考えさせるとともに、身の回りを見つめ直すと、多くの人々の温かい善意が自分を支えていることに気付かせたい。

### 三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・日常生活の中で、どんな時に「ありがとう」と言うかについて話し合う。
- 避難先のホテルで、ボランティアの人々の献身的な支援を受けた筆者は、どんな気持ちだったのだろうか。
- ◎『「ありがとう」は、たった一秒の言葉です。』という看板を見た筆者は、どんなことを考えたのだろうか。
- ・大切な人に「ありがとう」を伝えた経験を振り返る。

### 四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「人々の善意や支えに応えたい」(八十二〜九十五頁)を活用し、身の回りの人々への感謝の気持ちを素直に表し、伝えることの大切さについて考えさせる。

### 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 人権教育の視点も加えて指導したい。当たり前の生活が奪われたことで生じた経験をもとに、人間としての最低限の保障をされた社会を作っていくことの大切さに触れたい。
- 震災で辛い経験をした生徒も多い。資料を活用する際、実態に応じて十分な配慮をする。

## 紫紺の襷しこん たすき

### 1—(2) 希望・勇気 強い意志(中学二・三年)

#### 一 ねらい

より高い目標を目指し、困難に屈することなく希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志と態度を育てる。

#### 二 資料の特質

##### (1) 資料の生かし方

中学生の時期は、自分の好むことに対しては意欲的に取り組むが、困難に直面すると簡単に挫折し物事をあきらめてしまいがちである。

本資料は、主人公が、駅伝競技に挑戦することを通して、困難に屈しないでねばり強く最後まで着実にやり抜くことの充実感・達成感を味わい、教師や仲間などへの敬愛の念を深めるという構図になっている。野球を理由にして駅伝競技と真摯に向き合うことから逃げていた主人公が、駅伝練習に自主的に励み、大会登録メンバーに選ばれるまでに変容した理由を中心に考えさせたい。

##### (2) 資料の概要

Y中学校の生徒である高志は、野球部においても勉強においても満足いく結果が残せていなかった。そのような中、敬介に誘われるまま、二年に進級後、駅伝部に入った。敬介や駅伝部顧問の原田先生との関わりを通して、高志は野球を言い訳に心のどこかで駅伝を投げ出していた自分を恥じるようになる。そして、困難に屈しないで物事に主体的に取り組むことの楽しさに気付き始め、原田先生や敬介への敬愛の念を深めたり、Y中への愛校心を胸に抱いたりしながら、自らの可能性を追求しようと駅伝競技に打ち込む。

##### (3) 資料を通して伝えたいこと

中学生の一般的な傾向として、自分自身にあえて負荷をかけずに、無理のない範囲での学習や部活動などに取り組むという一面がある。しかし、目標に向かうくじけないうる心育てるためには、困難と向き合い、それを乗り越えようとする経験が欠かせない。より高い目標を目指し、困難に屈することなく希望と勇気をもって着実にやり抜くことで、真の充実感を味わうことができ、その経験が強い意志と態度を育てることにつながることを伝えたい。

#### 三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・部活動の練習の楽しさや苦しさについて話し合う。
- 野球部の遠征中、薄暗い中を黙々と走る敬介の姿を思い出す高志は、どのような気持ちだったのだろうか。
- 原田先生の「どうした、高志！ お前の走りができていないだろう！」という言葉聞いたとき、高志は、どんな気持ちだったのだろうか。
- ◎「ぼくは、心のどこかで駅伝を投げ出していた自分に気付き、恥ずかしくて仕方がなかった。」のは、どうしてだろうか。
- ・生活の中で、がんばってやり抜いた経験を振り返る。

#### 四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「目標を目指しやり抜く強い意志を」(十六〜二十一頁)を活用し、自分の目標やそれを目標とする理由、目標を実現するためにこれから取り組むたいことを考えさせる。

#### 五 指導上の留意点及び配慮事項

○襷の実物を見せて資料内容を身近に感じさせたり、兼務教員や帰還困難区域等の説明をして資料内容の理解を促したりする。

一 ねらい

多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それに応えようとする態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

東日本大震災に際し、世界中から支援を受けたことに対する感謝の気持ちをどのように表したらよいか、善意や支えにどのように応えていったらよいかを考えさせることは、復興を担う生徒のこれからの生き方につながるだけでなく、震災前からの課題である人間関係の希薄化の解決に向けての一助になる。

大震災直後に、通信や交通が遮断された中、東京から福島に帰る途中に、様々な人々との出会いを通して、感じたこと、考えさせられたことを描いた本資料を通して、自分を支えるあらゆるものへの感謝について考えさせたい。

(2) 資料の概要

震災直後の混乱した東京で、通信や交通手段が絶たれた状態の中、帰宅困難者となった主人公は、苦勞してたどり着いた宇都宮駅で、同じように北を目指す人々と知り合い、タクシーで家路につく。同じ目的を持った人々と助け合い、協力し合いながら、様々なことへの感謝の気持ちがあふれてくる主人公の姿を描いている。

(3) 資料を通して伝えたいこと

東日本大震災では、日本人の道徳性が世界中から賞賛された。しかし、大震災を経験したからこそ、人々の善意や支えによって、自分が生かされていることに気付くことができたとも言える。

感謝の心は今までもあった。しかし、受けた善意や支えに応えることで、新しい人間関係や絆が生まれたことも事実である。感謝の心が、

生きる上で人との新しい絆を深めることを伝えたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・知らない人に親切にされたり、恩を受けたりした経験を想起する。
- 見知らぬ男性から携帯電話を借りたとき、私はどんな気持ちだったのだろうか。
- 帰宅困難者リストに名前を書いたとき、私はどんな気持ちだったのだろうか。
- タクシーに自分が乗らないと言ったとき、私はどんな気持ちだったのだろうか。
- 山口さんに「一緒に次のタクシーに乗るよ。」と言われたとき、私はどんな気持ちだったのだろうか。
- ◎山口さんから「あなたには、無事にたどり着いたと伝えなかった。」と言われたとき、私はどんな気持ちだったのだろうか。
- ・社会の中で人々が支え合って生きるために大切な心構えについて話し合う。

四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「人々の善意や支えに伝えたい」(八十二〜九十五頁)と関連させながら、感謝について考えさせる。震災を機に多くの人々から支援をいただいたことへの感謝の気持ち、それにどう応えるか等、自分が他者に対して何をもちて応えることができるのかについても考えさせたい。

五 指導上の留意点及び配慮事項

- 震災当日から帰宅するまでの様子を克明に扱うため、震災でつらい思いや身近な人を亡くした経験のある生徒がいる場合は、事前及び事後に個別の配慮が必要である。
- 「温かい人間愛」2 — (2)にも重なる要素があるので、生徒の実態に合わせて指導する。

## もう一人の八重 〈日本のマザーテレサ「井深八重」〉

2—(2) 人間愛（高校生）

## 一 ねらい

温かい人間愛の精神を深め、様々な状況にあっても自他を尊重する心を育てる。

## 二 資料の特質

## (1) 資料の生かし方

高校生の時期は、思春期の混乱から脱し、自立した大人となるための自らの生活を顧みることができるようになってくる。また、人間としての在り方や生き方を主体的に考えるようになる。

本資料は、「井深八重」の伝記である。大河ドラマで「八重の桜」が放送され、新島八重について広く知られるようになった。しかし、ゆかりのあるもう一人の八重、「井深八重」という人物については、あまり知られていない。ハンセン病患者の救済のために、無私の心でその生涯を捧げた井深八重について、人間愛にあふれたその生き方を知る機会とし、温かい人間愛の精神を考えさせたい。また、生徒自身の職業選択における価値観についても考えさせたい。

## (2) 資料の概要

本資料は、ハンセン病であると誤診されたものの、そのまま患者を収容した病院にとどまり、看護婦として患者の救済に尽力した井深八重（一八九七年—一九八九年）の伝記である。絶望的な状況におちいっても、その場所のできることを精一杯行い、多くの人々の希望となっていた八重の生涯を知ることができ資料である。

## (3) 資料を通して伝えたいこと

どのような状況であっても、自分のことばかりではなく、他を思いや

る温かい人間愛を失わずにいることの大切さに気付かせたい。また、未来が見通せない状況の中では、人は不安に思い悩み苦しむが、そのような状況だからこそ、希望を見出し自分の使命に気付くこともできる人間よさにも気付かせたい。生徒自身にとって大切だと思えること、進んでいきたい道はどのようなものであるか、この機会に考えてほしい。また、進路を決定する際に、自分自身の指針となるものや信念となるものは何か考えさせ、職業観、勤労観を育みたい。

## 三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・「もう一人の八重」を読んで感想をもつ。
- 「ハンセン病（らい病）」であると知った時の八重はどのような気持ちだったのだろうか。
- 教え子や友人からの手紙は、どのような役割を果たしたのだろうか。
- 八重が神山復生病院で、一生懸命手伝いをしていたのは、どのような気持ちからだったのだろうか。
- ◎誤診と分かった後でも、八重が病院に留まって働きたいと思ったのはなぜだろうか。
- ・今までの生活を振り返り、困難な状況にあったときに自分はそれをどのように乗り越えてこられたかを話し合う。

## 四 指導上の留意点及び配慮事項

○「どんな時でも人の為に一生を捧げるように」というような価値の押しつけにならないように留意すること。

私の明日

あした

4—(6) 家族愛（高校生）

一 ねらい

困難な状況にあっても、家族に対する敬愛の念を忘れず、自分の生き方を顧みながら家族とよりよい信頼関係と絆を築こうとする態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

高校生の時期は、自己の生き方について葛藤しながらも卒業後の生き方について深く考えるようになる。

本資料では、主人公が避難所での祖母の言葉から自分のなすべき役目を考え、自己の進路に対する考え方を変化させていく姿に焦点をあて、自分と家族とのかかわりや自分が家族の中で果たす役割を考えさせた。

(2) 資料の概要

主人公の家は農家で、祖母の姿を見て育ち、祖母のようになりたいと思っていた。しかし、震災後の原発事故で村全体が避難区域になり、祖母は農業ができなくなってしまった。そんな祖母の姿を見た主人公は、一度はゆらいだ農業への志を新たにし、祖母や村のために改めて農学部に進学しようとする。

(3) 資料を通して伝えたいこと

原発事故により、福島県全体において、第一次産業の受けたダメージは非常に大きく、復旧・復興の道も険しい。その中で祖母の失ったものを思い、あえて農業の復興のために進学したというその選択に、主人公の祖母への「敬愛」の気持ちを感じとり、改めて、日頃自分を支えてくれている家族について考えを深めさせたい。

三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・自分自身の進路選択のあり方についてどのように考えているかを振り返る。

○小学生の頃主人公が、おばあちゃんに「農家だけはやめておきなさい。」と言われたとき、どんな気持ちだったのだろうか。

○高校生の頃主人公が、両親に農道を学ぶことを認めてもらったとき、どんな気持ちだったのだろうか。

○明日香の進路に対する考え方のゆらぎや変化について、どのように感じるか。

○本文の中に何か所かある祖母の笑顔は、それぞれ、どんな意味があるのだろうか。

◎主人公は、この後、どんな生き方をしていくだろうか。

・自分が今後、家族の中でどのような役割を果たすことができるのか、考える。

四 指導上の留意点及び配慮事項

○現在も仮設住宅から通学している生徒や、原発事故による避難が続いている生徒がいるため、震災時や避難区域等の扱いについては配慮が必要である。

○「郷土愛」4—(8)にもつながる要素を含むため、生徒の実態に合わせて指導する。

道 みち  
標 しるべ

## 1 — (5) 個性の伸長（高校生）

## 一 ねらい

自己を受容し、自己を理解しながら自尊感情を高め自分自身のよさを伸ばしていきこうとする態度を育てる。

## 二 資料の特質

## (1) 資料の生かし方

多くの高校生は、障がいのある人とかかわる機会は多くない。「障がい」「健常」という言葉が、あたかも優劣であるかような誤ったとらえ方から、偏見や誤解をまねく心配もある。自他の相違に目を向け理解し合うことで、人と人のつながりが生まれることを理解させたい。

本資料では、視覚に障がいがある生徒の心に共感させるとともに、今まさに生きづらさを抱えている生徒に対しては、これからの自分の生き方も考えさせる機会としたい。

## (2) 資料の概要

視覚に障がいがある男子生徒が、学校生活や日常生活において困難を乗り越え、周囲の人々とのかわりを通して、互いを認め合い、自分への自信を取り戻し成長してゆく。

## (3) 資料を通して伝えたいこと

学校や家庭は失敗をさらけ出してもよい場所であり、お互いを補いながらつながりを深める場である。「他者」をいたわり大切にすることが、ひいては自分自身を大切にすることにもなる。障がい者の実態と心の内、それを取り巻く周囲の反応、そして家族の心情について触れながら、困難を乗り越える人間のたくましい姿を伝えたい。

## 三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・山登りをした経験を話し合う。
- 主人公は、生活の中で様々な困難を経験しているが、どのようなことに苦慮しているのだろうか。

○「日本一の山に登ったら」と考えた主人公は、どんな気持ちだったのだろうか。

◎主人公が「まるで心にかかっていた霧がはれたように」と感じることでできたのはどうしてだろうか。

・今の自分自身が充実感や満足感を抱いているとしたら、その状況を支えている根拠は何なのかを考える。

・不満や言い知れぬ不安感があるならば、その発端になっていることや根源にあるものは何なのかを考える。

## 四 指導上の留意点及び配慮事項

○障がいがある生徒が在籍している場合や、家族に障がいがある生徒が身近にいることを想定して取り扱うこと。

## 五 補足事項

○「富士登山への挑戦」（平成二十五年度東北地区盲学校弁論大会出品作品）より抜粋引用。

## 三十年後の桜

1 — (2) 希望・勇気（高校生）

### 一 ねらい

より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもって生きようとする態度を育てる。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

高校生の時期は、卒業後の進路について考えるところにも、理想とする将来の姿を思い描きながら、夢と希望を膨らませる。一方、夢と現実の狭間で思い悩む生徒も多い。

本資料は、東日本大震災による第一原子力発電所の事故でふるさとに帰ることができない地域がある中、ふるさとに誇りと希望がもてるような桜並木を作ろうと、困難に立ち向かう主人公の姿を通して、夢をもつことの大切さや使命感に燃え行動する生き方を考えさせる。

#### (2) 資料の概要

NPO法人ハッピーロードネットの代表である西本由美子氏が、浜通りを南北に通る国道六号線沿いに桜の木を植える活動をえがいたものである。壮大な夢を訴えかけ行動におこすことで、その夢が実現する。そしてそれが避難をしている人たちへの希望となった。困難に立ち向かう中での使命感に燃える姿と活動にかかわる人たちへの感謝の気持ちを考えさせることのできる資料である。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

浜通りを世界一の桜の名所にしようする壮大な夢は、たくさんの人たちに語り継ぐこと、そして、実際に行動することで現実にならせた。希望をもち続けること、小さな一歩を踏み出すことの素晴らしさを伝えたい。

### 三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・三十年後の自分の姿を想像する。
- 西本氏は、なぜ、「もう一度、『世界一美しい浜街道にしよう』」と思いついたのだろうか。
- 西本氏の活動に周囲の人はどんな反応をし、その後どんな変化があったのだろうか。
- ◎西本氏の活動に対する使命感は、なぜ、生まれたのだろうか。
- 三十年後、国道六号線が通る浜通り全体が満開の桜で覆われたときの人々の様子や街の様子を想像してみよう。
- ・自分の夢を語り合う。

### 四 指導上の留意点及び配慮事項

- 震災で辛い経験をした生徒も多い。資料を活用する際、実態に応じて十分な配慮をする。



第  
III  
章

实践事例集



## 歌が心を一つにする

『I love you &

I need you ふくしま』

～メッセージソングを活用する道徳教育～

(小学生)

### 一 実施のねらい

震災後、福島を愛する人がふるさとのために作った歌が日本中に流れた。特に『I love you & I need you ふくしま』は、多くの人々の心に響き、胸を熱くし、勇気と希望を与えた。そこで、授業の中にこの歌を資料として取り上げ、そこに込められた思いや願いを考えさせることにより感謝の気持ちを育み、郷土を愛する気持ちを深めたいと考えた。

### 二 児童の実態

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故により、大きな不安と不自由な思いを経験した子どもたちがたくさんいる。学年末の三月十一日は、公立中学校の卒業式の当日、小学校は卒業式の練習が始まったばかりだった。多くの子どもたちは、学校へ行くことができなくなり、「友達は大丈夫だろうか。」「卒業式はできるのだろうか。」「新学期はいつからだろうか。」「などと先の見えない日々を送った。

通常の番組が消えたテレビから、流された震災の映像は、私たちに衝撃を与えた。ニュース以外は、ほぼ毎日、日本広告機構のCMが繰り返し流された。そのような中で、『I love you & I need you ふくしま』という曲が流れ始めた。テレビやラジオから流れたこの曲は、

多くの福島県民の心に響き、福島の子どもの心に大きな励ましを与えた。

感受性が強く、多感な時期の子どもたちは、心に響いたメロディーとともに、歌詞に込められた思いや願いから多くのことを得るであろうと考ええる。そこで、美しい福島の映像資料とともに、この曲のもつ意味を考えさせることにした。

### 三 実践までの経緯

二〇一一年三月十一日 担任している児童二八名と教室で被災した。

二〇一一年四月 テレビから流れてきた曲を聴いた事をきっかけに、動画サイトから『I love you & I need you

ふくしま(四十七都道府県の人々が歌う)』をダウンロードした。

二〇一一年九月 「LIVE福島 風とロックSUPER野馬追」へ行き、猪苗代湖ズや多くのミュージシャンと会場が一体となって『I love you & I need you ふくしま』を熱唱する感動を体験した。

二〇一一年十月『I love you & I need you

ふくしま』が、県内の小・中・高校の学習発表会や文化祭でたくさん歌われた。

二〇一三年七月 震災から二年たっても『I love you & I need you ふくしま』は毎日、県内の天気予報と一緒に流れている。また、いわきグリーンスタジアムで行われたプロ野球オールスターゲームで、猪苗代湖ズと会場の観客がこの曲を熱唱した。

このように、人々の心に大きな共感を与えたこの歌の歌詞を取り上げ、「感謝」と「郷土愛」の二つの側面から道徳的実践力を高めたいと考え資料を開発した。

四 指導上の留意点

東日本震災当時のできごとを「思い出したくない」、「話したくない」児童がいる可能性もあるので、授業中の児童の様子の変化にも十分に留意する。

五 考 察（活用例1「感謝」に焦点を当てた場合）

歌詞に込められた作詞家の思いや願い、また、曲ができるまでの経緯を知ること、歌を通して県民を応援し、福島を復興させようとした猪苗代湖ズに対する感謝の気持ちを考えさせた。また、私たちが生活する福島の自然や文化、共に生きる福島の人々に対する感謝についても考えさせ、感謝の視点を広げること、前向きに生きること、今の自分にできることを考える授業を行った。

導入で歌を聴かせると自然に口ずさむ児童が多く見られた。一方で、歌自体は知っていても、曲ができるまでの経緯や、利益の全てが義援金として寄付されていることは知らなかった児童もいた。歌詞にじっくり向き合わせ、そこに込められた作詞家の思いや福島のよさについて考えさせたことで、授業後は、感謝に対する思いに変化が見られ、授業の後半で歌った時は、声が大きくなり気持ちの一つになったようだった。児童が書いた手紙からは、猪苗代湖ズに対する感謝の気持ちだけでなく、福島で生活していることへの喜びと感謝、前向きに生きていこうとする気持ちの高まりも読み取ることができた。

《児童が書いた手紙》

猪苗代湖ズのみなさんへ

私たちに元気付ける歌をありがとうございます。短時間で曲を作ったと聞きました。福島を早く復興させたいという気持ちに強くなりたいなあ、と思いました。私たちはその時一年生でした。とてもこわい思いをしました。でもみなさんのおかげで元気ができました。歌が、人に勇気や元気を与えてくれるすばらしいものだと分かりました。福島のいいところも、みんなで考えることができました。すばらしい福島に生活していることにも感謝しなければならぬなあ、と思いました。

S・Eより

猪苗代湖ズのみなさんへ

二年前、震災で元気をなくしていたぼくたちのために歌を考えてくださってありがとうございます。あの歌を聞いてぼくたちはとても勇気付けられました。

この歌を聞いた時、みんなが一つになった、そんな気がしました。「明日から、何かが始まるよ、ステキなことだよ」「僕は ふくしまが好き」という歌詞が大好きです。

僕は、今でも福島が大好きです。福島のために何かできることをしたいと思いました。

W・Tより

猪苗代湖ズのみなさんへ

福島のために「I love you & I need you ふくしま」をありがとうございます。今聞いても泣きそうになります。

歌詞にも感動しました。心にひびきわたり、この曲を聞くと安心します。福島や日本中が一つになれたのはこの曲があったからだと思います。

歌詞に「野馬追い」「赤べこ」「鶴ヶ城」などがでてくるのがおもしろいと思いました。授業では、みんなで福島のいいところを考えたら、たくさん出てきました。出てきた福島のいいところを入れて、替え歌を作っていました。

猪苗代湖ズさん、福島のいいところを歌にしてみんなに教えてくれてありがとうございます。

Y・Hより

## 六 資料

### 1 曲ができるまでと、その後の経緯

「猪苗代湖ズ」……福島県で生まれ育ち、今は東京や横浜で暮らすミュージシャンと、クリエイターの福島県人バンド

二〇一〇年九月「猪苗代湖ズ」は、大自然に囲まれた裏磐梯の野外ステージで、福島への思いを真っすぐに『アイラブユーベイビー福島』という曲にして歌った。

二〇一一年三月 激しい地震や津波の被災に加え、原発事故への不安、危機感に包まれる福島県。「故郷への恩返しをするのは今しかない。」と立ち上がった四人の再集結。決断からの行動は早かった。

三月十七日 節電に最大限に配慮して、東京を離れて名古屋のスタジオへ向かい、音源化されていなかった『アイラブユーベイビー福島』をグループや会社の壁を越えて『I love you & I need you ふくしま』としてレコーディング。

三月二十日 配信シングルとして緊急リリース。(手弁当と最少人数、最小限の電力で生み出した福島への愛の歌は、三日で完成)

四月一日 全国四十七都道府県の出身者が、リレー形式で楽曲を口ずさんでゆく構成で、猪苗代湖ズの活動に賛同した西田敏行さん、笑福亭鶴瓶さん、阿部寛さんなど著名人が多数出演したミュージックビデオが完成。

四月三日 JFN系列三十七局音楽チャートラジオ番組で第一位獲得。

四月二十七日 CDをリリース。

四月二十九日 音楽配信サービスサイトでのチャリティ配信を開始。

五月二十五日 オリコンインディーズチャート四週連続第一位を達成。

六月二十六日 カラオケ配信開始。

九月十四〜十九日 福島県六箇所で開催された「LIVE福島 風と

ロックSUPER野馬追」の全会場で、『I love you & I need you ふくしま』が全十五回歌われた。猪苗代湖ズも三日間三会場ライブステージを披露。その模様は世界中に配信され、およそ百八十六万人が福島に思いを馳せた。

十二月三十一日 第六十二回NHK紅白歌合戦に出場。

活動による利益の全てを故郷である福島県の「福島県災害対策本部」に義援金として寄付する。

### 2 授業で活用した資料

(1) 歌詞(百七頁参照)

(2) 『応援ありがとう。がんばる、ふくしま』(福島県観光交流課)巻末CD映像

## 七 資料の活用例(百五頁)(百六頁)

(活用例1) 感謝に焦点を当てた場合

(活用例2) 郷土愛に焦点を当てた場合

## 歌が心を一つにする 活用例1

2 — (5) 感謝（小学五・六年）

### 一 ねらい

多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っている日々の生活の中で、自分が生きていることに対する感謝の気持ちを持ち、それに応えようとする気持ちを育てる。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

小学生の時期は、視野がせまく、周囲の状況をあまり知らずに生活していることが多い。本資料は導入でミュージックビデオを視聴させ、どのような気持ちで、この曲を作ったのかを考えさせる。また、曲ができるまでの経緯も紹介することで、故郷の人々を思う気持ちを考えさせたい。さらに、震災前も震災後も、福島が多くの人々によって支えられていることを再認識することで、感謝の対象の視点を広げさせたい。

#### (2) 資料の概要

「I love you & I need you ふくしま」の歌詞には、「ふくしまが好き」というフレーズが繰り返して出てくる。その中で「明日から 全てがはじまるよ 君の日々だよ」など、前向きな生き方を呼びかけている。また、「野馬追い」「赤べこ」「鶴ヶ城」など、福島にゆかりのものが紹介されている。「福島県を応援しているよ。元気をだして。大丈夫だよ。」という思いやりの気持ちも伝わってくる歌詞である。観光交流課で作成したDVDは、美しい福島の風景や文化、食べ物などが曲とともに流れ、感謝の視点を広げるのに有効な資料となっている。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

離れていても、故郷のためにできることを考え活動する人たちの

思いが、多くの人々の心を動かした。福島県民や、故郷を離れて避難しなければならなかった人たちの応援ソングとなった。この曲が勇気と希望を与えてくれたことを忘れずにいてほしい。

### 三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・DVDを視聴する。
- ・この曲ができるまでとその後の経緯を知る。
- 「ふくしまが好き」という言葉は、どんなふくしまをイメージして好きと言っているのだろうか。
- 「明日から 全てがはじまるよ 君の日々だよ」には、どんな思いが込められているのだろうか。
- 「野馬追い」「赤べこ」「鶴ヶ城」などの言葉は何を伝えようとしているのだろうか。
- ◎猪苗代湖ズのメンバーは、どんな気持ちでこの歌を作り歌っているのだろうか。
- ・猪苗代湖ズのメンバーへ手紙を書く。

### 四 「私たちの道徳」（小学五・六年）との関連

「支え合いや助け合いに感謝して」（八十八〜九十五頁）を活用して、多くの人々に支えられている私たちの毎日の生活について考えさせる。

### 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 思いやりの心が、多くの人たちの心を動かし、感動と勇気を与えてくれることに焦点を当てるように展開する。
- 歌詞を事前に配付して、一緒に歌を歌えるようにしておく。

### 六 活用した資料

- 歌詞（百七頁参照）
- 『応援ありがとう。がんばる、ふくしま』（福島県観光交流課 巻末CD映像）

## 歌が心を一つにする 活用例2

4 — (7) 郷土愛（小学五・六年）

### 一 ねらい

福島によさについて考え、郷土を大切に思い生きる人たちのことを知り、郷土を愛する心情を養う。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

小学生の時期は、視野がせまく、自分が住んでいる地域がすべてであり、そのため、そのよさをあまり意識しないことが多い。本資料は、作詞家の歌詞に込めた思いを考えさせるために、県内各地の美しい映像を重ねたDVDを視聴させる。また、曲ができるまでの経緯も紹介することで、故郷を思うメンバーの気持ちを考えさせたい。

#### (2) 資料の概要

自然豊かな福島の景色や四季折々の風景や伝統工芸、各地の祭りをちりばめながら、福島への思いを表現している歌である。また、東日本大震災の直後から、「故郷福島のためにできることは何か。」を考え、熱い思いを歌に託して活動した猪苗代湖ズの故郷福島に対する思いも伝わる歌詞である。観光交流課のDVDは、曲とともに福島の景色の映像が流れるものなので、福島県のよさを再確認できると考える。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

離れていても、故郷のためにできることを考え活動する人たちがいる。その思いが多くの人々の心を動かし、実際に福島県民や、故郷を離れ避難しなければならなかった人たちの応援ソングとなった。郷土を思う心が形となって、人々に勇気と希望を与えてくれた

ことを忘れずにいてほしい。

### 三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・歌詞を読む。
- ・この曲ができるまでとその後の経緯を知る。
- 「ふくしまが好き」という言葉は、どんなふくしまをイメージして好きと言っているのだろうか。
- 「野馬追い」「赤べこ」「鶴ヶ城」などの言葉は何を伝えようとしているのだろうか。

○自分の好きな福島の景色や、いいところを発表しましょう。

◎作詞家は、どんな思いを込めて、この曲を作ったのだろうか。

・DVDを視聴して、福島県のよさを味わい、余韻を残して授業を終える。

・歌詞の中の地名や名所・名物・名産について話し合う。

### 四 「私たちの道徳」（小学五・六年）との関連

「郷土や国を愛する心を」（百六十四～百七十三頁）を活用して、福島県のよさ、県民の郷土を思う気持ちについて考えさせる。

### 五 指導上の留意点及び配慮事項

- 作詞家の郷土に対する思いに焦点を当てて、授業を進める。
- 歌詞を事前に配付して、一緒に歌を歌えるようにしておく。

### 六 活用した資料

- 歌詞（百七頁参照）
- 『応援ありがとう。がんばる、ふくしま』（福島県観光交流課）巻末CD映像

## 『I love you & I need you ふくしま』

猪苗代湖ズ

ふくしまに ふくしまに ふくしまに  
置いてきたんだ 僕は 本当の自分を

ふくしまで ふくしまで ふくしまで  
愛したいんだ 僕は 本当の君を

明日から 何かがはじまるよ ステキな事だよ  
明日から 何かがはじまるよ 君のことだよ

I love you baby ふくしま  
I need you baby ふくしま  
I want you baby 僕らは ふくしまが好き  
I love you baby ふくしま  
I need you baby ふくしま  
I want you baby 僕らは ふくしまが好き

ふくしまで ふくしまで ふくしまで  
君が すばらしいってこと 確かめさせて

ふくしまで ふくしまで ふくしまで  
夢みたいな 日々と 美しい君

明日から 何かがはじまるよ ステキな事だよ  
明日から 何かがはじまるよ 君のことだよ

I love you baby ふくしま  
I need you baby ふくしま  
I want you baby 僕らは ふくしまが好き  
I love you baby ふくしま  
I need you baby ふくしま  
I want you baby 僕らは ふくしまが好き

明日から 全てがはじまるよ 君の日々だよ  
明日から 新しい日々だよ 君の日々だよ

I love you baby ふくしま  
I need you baby ふくしま  
I want you baby 僕らは ふくしまが好き  
I love you baby 浜通り I need you baby 中通り  
I want you baby 会津地方 ふくしまが好き  
I love you baby 野馬追い I need you baby 赤べこ  
I want you baby 鶴ヶ城 ふくしまが好き

I love you baby ふくしま  
I need you baby ふくしま  
I want you baby 僕らは ふくしまが  
I love you baby ふくしま  
I need you baby ふくしま  
I want you baby 僕らは ふくしまが ふくしまが 好き！



## 聞いて紡ぐ 震災時の思い

「聞き書き」を通して

家族について考えさせる道徳教育

(中学生)

### 一 実施のねらい

学習指導要領の改訂により、体験活動が重視され、学校教育全体で道徳教育を進めるに当たっては、「職場体験活動」などの豊かな体験や道徳的実践を充実させ、道徳の時間と関連をもたせることによって生徒の内面に根ざした道徳性の育成に配慮することが示されている。

今回の実践は、職場体験活動の事前学習として、震災時に家族が職場でのような体験をしていたかを聞く活動を取り入れ、職業人としての保護者の姿や震災時の保護者の家族に対する思いを知る機会とした。普段は見ることのない親の職場での苦労話や、東日本震災という非常時に親が家族のことをどのように考えていたかなどを知ることが家族の大切さについて考える上で、価値のあることである。そこから職業人としての大変さや、自分は親に大切に思われているという事に気付かせたい。さらに、周囲の多くの人々の支えにより、自分が生かされていることに気付く、自分はそれにどう応えていかなければならないかを考えさせたい。

### 二 生徒の実態

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故については、大変衝撃的な出来事として心に刻まれている生徒が多い。しかし、当時、学校が休校となり、そのつらさを共有できる場がなかったため、友人と話すことができず、自分の気持ちを押し込めたままになっている生徒も見受けられる。

中には、自分の故郷を離れて避難生活を余儀なくされている生徒もいる。また、身内や身近な人が亡くなったり、行方不明になったり、県外に避難していたりする生徒もいる。

### 三 実践までの経緯

今回の事例は、総合的な学習の時間と関連させて行う授業である。職場体験学習の事前学習として、東日本大震災時に身近な職業人である親がどのような状況下におかれ、対応していたのか、また、その時どのようなことを考えていたか、などについて「聞き書き」をさせた。

「聞き書き」は、身近な人、特に家族について知るには適する手法だと考え、夏休み前に、「身近な職業人である保護者に震災時の職場での出来事を聞く」という課題を出した。思春期の中学生は、保護者との会話も少なくなりがちな時期である。しかし、共通体験である震災当時の様子は素直に聞くことができ、親のあまり見せない、あるいは、見ていない一面や職業人としての素顔、家族を心配する思いなどを知ることができた生徒は多かった。

家族に対して、感謝の気持ちや敬愛の念を改めてもつとともに、東日本大震災当時の職場の人や周囲の人々の対応を聞いて、多くの人の善意や支えがあったことに改めて気付く生徒もいた。

それらを踏まえ、自分はその思いにどのように応えていかなければならないかを考えた上で、職場体験に臨むようにさせた。また、「聞き書き」を体験した保護者の気持ちもアンケートにより確認し、生徒に提示したいと考えた。

※「聞き書き」とは、「人の話をよく聞き、それを文字で記録する」ことで、相手の話に耳を傾け、語る人の心を受け取り、それを文字に起こす作業である。奥会津地方で、一枚の写真をもとに、家族や身近な人の話

を聞いて書き起こしたものを記録集としてまとめる活動を行っている団体がある。

#### 四 指導上の留意点

震災当日の親の勤務状況等は様々であり、「聞き書き」した作文を提示する際には、誰の作文か分からないような配慮も必要である。  
また、「聞き書き」の対象に関しては、親を亡くした生徒への配慮も考え、親という限定ではなく、「親、祖父母、親戚」など身近な職業人に、震災時の職場や家庭での対応について聞くよう指示した。

#### 五 考察

今回の事例は、東日本大震災・原発事故のため、日常生活が制限されることが多く、将来に希望がもてなくなっている生徒たちに、未曾有の事態の中でも、親が必死に頑張っていたことを「聞き書き」を通して知らせて、それにより、家族や周囲の人々への感謝の気持ちをもつだけでなく、家族に愛されていることを再確認させ、将来への希望をもって生きて欲しいという願いを込めた。

授業実践後の生徒の感想として、  
「他の家族の話も聞いて、どの家も親が一生懸命子どものことを考えていたのだと分かった。」

「震災の時、親は、簡単に学校に迎えに来てくれたと思っていましたが、着くまでに大変な思いをしてくれたのだということが分かった。」

「聞き書きをしなければ、親の大変さに気付くことができなかつたと思う。」

「『子どもがいるから早く帰りなさい』と、会社の人が言ってくれたので親と早く会えたと分かった。会社の人にも感謝している。」

など、親への思いを強くもつ生徒、さらに、自転車を買ってくれた知り合いや、会社の方々など周囲への感謝の気持ちをあげる生徒も見られた。

#### 六 資料

##### 生徒作文

(活用例1)

僕の父は、工場で働いている。震災の日の父は、姉の卒業式に出るため、会社を休み、式を終えて家に帰ったところだった。震災後四日目に会社から招集がかかり、地震災害状況の調査・報告をした。その調査の途中も地震が来てそのたびに避難することとなりとても怖かったそうだ。本社から工場復旧のために五百〜六百人が派遣され、本格的な復旧作業がはじまった。会社で昼食を取る時、物資が届いていなかったため、ご飯が皿の半分ほど、おかずは漬け物だけという時もあったそうだ。だが、家に帰ってくると、「みんな大丈夫か」と自分のことより家族のことを心配してくれていた。あの時の僕は「大丈夫」と普通に答えていたけれど、話を聞いてから考えると、父は自分のことより家族のことを心配してくれていたのだと、改めて父のすごさを感じた。この話を聞いて、大震災などがあっても対処できる大人になりたいと思った。

震災当日、私以外の家族は、偶然自宅で震災を体験した。携帯電話から今まで聞いたこともないような音が鳴り響いたかと思ったり、とても強い揺れを感じ、両親は立っているのもやっとで、家中のものが落ち、本当に何が起きているか理解できないような状況だったそうだ。父の会社は、家から見えるところにあるので、近所

に住む同じ会社の人と様子を見に行った。あんなに近い所に会社があるのに、行くまでに近所の家から瓦が落ちていたり、家の外壁や塀が崩れていたり、普通ではない状況に何とも言えない複雑な気持ちでいたそう。母は、スーパーのお総菜コーナーで働いているので、次の日から何事もなかったように仕事に出かけなければならなかった。母の仕事場は女性が多く、子どもがいる人がたくさんいた。だから自分だけ休むというわけにはいかなかったのだ。余震が続く中、姉と私を残し仕事に行かなければならなかったことが、一番つらかったそう。そのような中でも、母は仕事先で何百個もの注文のおにぎりを握ったり、お総菜を作ったりしてとても大変だったと思う。けれど、お客さんの「ありがとうございます」「助かります」の言葉に励まされ、頑張れたという。今回両親に聞いてみて、初めて知ったことがたくさんあった。震災の時やその後が一番大変だったのは両親だったのかもしれないと、聞き書きをして思った。

あの日、私の母は飯館村の役場の中で震災にあった。机の上のパソコンが倒れたり、湯飲みのお茶もこぼれ、棚の書類もすべて落下したりするほどの強い揺れだった。その後は停電となり、電話も通じず、仕事にならなかったが、机の上や散乱した書類などを片付けた。母は、その間もずっと家族へ電話をしていたが、全く連絡が取れなかった。母は家や子どもたちのことを心配しながら公務にあたっていった。夕方に職員全員が集められ、今後についての説明があり、女子職員が家に帰されたのは、夜の十時過ぎだった。母はその時初めて家族の無事が確認できたのだ。家族全員で一緒に集まって寝た。次の日からは、浜通りの津波被災者の方の受け入れの避難所開設や職員への炊き出しに追われた。午後は村内幼・小・中学校に關する広報を車でアナウンスしながら回った。四時頃、南相馬方面

から避難してきた人から原発が爆発した話を聞かされた。だが、詳しいことが分からないまま、炊き出しを続けていた。その日の夜は、双葉郡から福島方面へ移動する被災者がひっきりなしだった。この日も十時過ぎに帰って来て家族と寝た。次の日も母は同じように避難所の対応と炊き出しの仕事に追われた。夕方になってやっと電気が復旧した。十四日からは通常業務に加え、震災関連業務も行うこととなった。朝は通常より早く出勤し、十時過ぎにならないと帰れない毎日が続き、家のことは何もできず、子どもたちと一緒に居られなかったことが、とても悲しかったと母は言っていた。私もとても心細かったけれど、毎日一生懸命みんなのために働いている母の姿を見て、寂しくても頑張ろうと思っていた。聞き書きを通して母の話を聞き、母はそんな大変な中でも私たち子どものことを考えてくれていたのだと改めて思った。

#### (活用例2)

僕の母は看護師なので、その日は病院の先生と患者さんの看護に当たっていたそうです。最初は余震だったので、患者さんを避難させてから起きた大きな地震にはびっくりしたと言っていました。母は地震で揺れる中、ものにしがみつきながら他の患者さんも避難させました。その後母も外に出ると、病院の中で物が落ちる音がしたり、外では車がうねりながら上下に動いていたりしたと言っていました。地震が弱まった後、母は一番に家族のことを心配したと言っていました。そんな時、母の姉から子どもたちは無事だと聞いてとても安心したそうです。その後も余震の心配があるといい、母は一度避難させた患者さんを近くの体育館に連れて行きました。その後、母の元には、地震だけをした人がたくさん来しました。その時母は

子どもたちが無事だと聞いたので、今夜は徹夜で仕事をしようと思っただけです。しかし、夜勤の人と何とか交代でき、その日遅くに家に帰ることができたそうです。母は家に着いたとたん、僕たちを見て大泣きしていました。それだけ僕たちのことが心配だったのだと思います。僕は震災当時の母の職場の様子について話を聞き、母に尊敬の心を抱きました。大きな地震があった中、患者さんの看病や診察などをしていたと思うと、すごいなと思います。僕もそんな母を見習って将来医療関係の仕事に就きたいと思います。

震災当時、僕たち家族は、富岡町にいた。両親は富岡町で就任中、兄は中学校の卒業式を終え家に帰っていた。僕は小学校にいた。母は、テレビから緊急地震速報が鳴ってびっくりしたそうだ。両親もこんな大きな地震になると思っていなかったそうだ。震災直後は携帯がつかず、父は車で、母は走って家に急いだ。その時集団下校していた僕は、母と偶然会うことができた。放送で津波が来ると聞き、子どもを第一に考え食料、靴、布団などを急いで車に積んで高台に行った。高台で数時間過ごし、広野町にある祖母の家に行った。広野町に行く途中、母は「いつ津波が来るかわからない」という恐怖と、「地震で道路がボコボコでこのまま走って行けるのか」という不安で、心臓の音が聞こえるくらい焦っていたそうだ。広野町は電気がついていて、お茶を飲んで少しほっとしたが、まだ津波警報が鳴っていたので、高台へ行った。夜が明けて祖母の家に戻り、後ろにある避難所で役場の人たちから情報を聞いた。いつ何が起るか分からないので、ガソリンを入れなければならないと思えば死んで情報を集めると、役場の人が開いていたガソリンスタンドの情報を親切に教えてくれて、満タンに入れることができた。今でもその人にとっても感謝していると言っていた。その後、原発が爆発したと

聞き、「早く逃げなくては」とおにぎりをたくさん作り毛布などを積んで、祖母と一緒にいとこの家がある千葉県柏市を目指した。いつもなら三時間で行けるところを七時間かかって行った。着いた時は、やっと安心して眠ることができた。聞き書きをして改めて、両親が必死に僕たちを守ってくれていたと感じた。

七 資料の活用例 (百十二頁) (百十三頁)

(活用例1) 家族愛に焦点を当てた場合

(活用例2) 感謝に焦点を当てた場合

## 聞いて紡ぐ 震災時の思い 活用例1

4 — (6) 家族愛（中学生）

### 一 ねらい

自分たち子どものことを第一に考えてくれる父母、祖父母に対する敬愛の念を深め、人間として他を思いやる心を育てる。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

中学生の時期は、親に対して素直に自分を表現できない傾向が強い。そのような時期でも、「聞き書き」という活動であれば、親の自分に対する思いを素直に受け止め、自分が愛されていることを改めて感じる事ができる。その思いを、家族だけでなく、他の人に対する思いやりにも広げていけるようにさせたい。

#### (2) 資料の概要

この資料は、生徒が親から震災時の仕事場での状況について聞き書きした作文である。どんな状況下でも、家族のことを心配している様子が書かれている。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

親は、職業人として、仕事を行っていても、常に家族のことを思っていることに気付かせ、改めて自分は親の愛情を受けて生活していることに気付かせたい。そこから、親に対する感謝の気持ちを持ち、それを他の人への思いやりの気持ちへつなげて欲しい。東日本大震災を経験し、改めて家族の絆を考えさせられた子どもたちに、自分

は愛されているという自己肯定感をもって、前向きに生きていくことの大切さを伝えたい。

### 三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・ 最近うれしかったこと、嫌だったことについて話し合う。
- ・ 資料を読む。
- 親の働く姿や家族への思いに対して、あなたはどうか思っただろうか。
- ◎ 家に帰らず仕事を続けた親は、どんなことを思っていたのだろうか。
- ・ お家の人の書いたアンケートを読み、感想を話し合う。

### 四 「私たちの道徳」（中学校）との関連

「家族の一員としての自覚を」（百八十一～百九十三頁）を活用し、家族に愛されていることの幸せと、自分が家族のために何ができるのかを考えさせる。

### 五 指導上の留意点および配慮事項

- 親の子どもに対する思いに焦点を当てるように展開する。

## 聞いて紡ぐ 震災時の思い 活用例2

2 — (6) 感謝 (中学生)

### 一 ねらい

震災等の非常時に、多くの人の善意や支えにより、自分や家族の生活が成り立っていたことに感謝し、それに応える気持ちを育てる。

### 二 資料の特質

#### (1) 資料の生かし方

中学生は、周囲の人々の協力があつてこそ、物事が進んでいくことについて気付きながらも、素直に感謝の気持ちを伝えることが難しくなる時期でもある。「聞き書き」をすることにより、親がどのような状況だったかを、初めて知る生徒が多かった。家族が心配でも仕事を全うした内容についての作文を活用し、仕事に従事する人々に対する感謝の心へとつながるようにさせたい。

#### (2) 資料の概要

「聞き書き」をした作文の中から、家族が心配でも仕事を行っていた親や、仕事先から優先して帰してもらえた親の話をまとめる。

#### (3) 資料を通して伝えたいこと

震災時、自分の親は普通に帰って来たと思っっている生徒が多いが、職場での配慮があつて家に帰れた親がいたことや、またそのまま職場に残り仕事を全うすることで、他の人に対して貢献している親がいたことを知ることにより、自分や家族の生活は、様々な人たちの支えや善意により成り立っていたことに気付かせたい。東日本大震

災という大惨事を乗り越え、職業に従事する人や親への感謝の念をもち、これから自分はどうのような気持ちで生活したり周囲の人と接したりしていくかについて考えさせたい。

### 三 展開例 (○発問、◎中心発問、●主な活動)

- 資料を読む。
- 震災時、なくて困ったことは何だっただろうか。また、あつてありがたかったことはどのようなことだっただろうか。
- 仕事をする上で大切なことは何だろうか。
- ◎ 震災を通して、あなたはどんな思いをもっただろうか。
- これから自分はどうのような気持ちで生活していきたいかについて考える。

### 四 「私たちの道徳」(中学校)との関連

「人々の善意や支えに応えたい」(八十二〜九十五頁)を活用し、身の回りの人々への感謝の気持ちを素直に表し、伝えることの大切さについて考えさせる。

### 五 指導上の留意点および配慮事項

- 生徒作文は、個人名が分からないように配慮する。

## 部活動を通して、豊かな心を育てる

ミミーティングを通じた道德教育

(高校生)

### 一 実施のねらい

小・中学校と異なり道德の時間が設けられていない高等学校の学習指導要領解説には「学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の指導のための配慮が特に必要である」と記されている。そのため、教科や特別活動をはじめとした様々な場面での指導が求められている。

本校の学校経営・運営ビジョンに、「小規模校の特性を生かし、社会に貢献できる人材を育てる」ことを目指し、重点目標の「豊かな心を育む生徒指導」の中の一つに、部活動の活性化が掲げられている。そこで、部活動を通じた道德教育を意図的に行いたいと考えた。

部活動の本来の目的は、競技を通して健全な心身を育成することにある。しかし、とりわけ、勝敗を競う運動部では、大会での結果が問われがちである。いつの間にか「勝つ」という目標が重視されすぎ、本来の目的が達成できていない場合が多い。部活動を通して「心豊かな人間になる」という「目的」と、大会で結果として「勝つ」ことを求める「目標」を明確にした指導を行うことが重要である。大会での結果を出すためには、技術の向上を目指すだけでなく、人間的な成長がなくてはならないという指導を柱にし、最終的には、部活動を引退した際に、人としてどれだけ成長しているか、道徳的実践力を身に付けているかを生徒自身が感じることができると指導を行いたいと考えた。

### 二 生徒の実態

一学年二クラスという小規模校である本校は、学習に対して苦手意識を持って入学してくる生徒が少なくない。平成二十四年度の進路状況は、進学二十六名、就職二十五名である。部活動の加入状況は、平成二十五年度部活動編成時で約八十五％(二百二十一人中百八十九人)である。学習面だけでなく、規範意識が稀薄な生徒や他者とのコミュニケーションが苦手な生徒も見られる。

また、仮設住宅や借り上げ住宅に住んでいる生徒が多く、身近な人物を津波で亡くした生徒もおり、東日本大震災の爪痕も大きい。平成二十三年度は、福島第一原子力発電所の事故の影響で、相双地区南部からの転入生が急増する一方で別の地域に転校する生徒もおり、生徒の生活環境は不安定であった。そのため、学校生活の様々な場面で、悩みを抱えた生徒に対する配慮が必要であった。

ソフトテニス部には、中学校で競技経験のある男子生徒が避難により転入してきた。彼の呼びかけにより、中学校での競技経験がない友人が集まり、平成二十三年度入学生六名でソフトテニス部の活動がスタートした。当初は、県連盟や高体連の配慮により支援物資が届けられ、生徒は不自由なく部活動に励むことができた。しかし、時が経つにつれ、支援してもらったことが当然になり、感謝の気持ちが薄れていくように感じた。そこで、各部活動の心得を「感謝」とし、自分に関わるすべてのことに感謝の気持ちをもつことに、より重点を置いた指導を行おうと考えた。

### 三 指導上の留意点

「心豊かな人間」とは、「規範意識を持っている人間」「感謝できる人間」「他人を思いやれる人間」などが含まれると考えられる。さらに、「規範意識は、他者を思いやる気持ち、感謝の気持ちから生まれる」という考えの

もと、以下の点に留意して指導を行った。

- (一) 大会結果は、あくまで三年間の部活動の過程にある「目標」であり、最終の「目的」は「心豊かな人間になる」ことである。
- (二) 自分一人では活動することはできず、家族・教師・友人・対戦相手等がいることで、初めて競技を行うことができることに気付かせる。
- (三) 練習・練習試合・公式試合等の競技に関わる場面だけでなく、家庭生活や学校生活などの日常生活に及ぶまで様々な場面での指導を行う。
- (四) 家庭環境・中学校時の部活動経験の有無等、生徒一人一人の状況に応じて、段階的な指導を行う。
- (五) 生徒の状況に応じて、定期的には、練習メニュー・反省・次回への課題等を提出させ、生徒の成長を支援していく。

#### 四 実践例と生徒の反応

##### (一) 日常生活やミーティング等、生徒への働きかけの例

◆部活動の目的を確認する

教師の発問 「部活動の目的は何か。」

生徒の反応 「○○大会で□位になることです。」

「技術の向上です。」

教師の再発問 「部活動の期間は二年半。部活動を引退して競技を行わなくなった時に、部活動を頑張った証を残そう。」

「高校生活で何を学ぶのか。」

「卒業までに身に付けなければならない能力は何か。」

「部活動を通して、競技の技術以外にも学ぶことはありますか。」

生徒の再反応 「大会結果はあくまで過程であり、それよりも『心豊かな人間になる』ことが大切です。」

「大会結果はあくまで過程であり、それよりも『心豊かな人間になる』ことが大切です。」

「大会結果はあくまで過程であり、それよりも『心豊かな人間になる』ことが大切です。」

◆規範意識を身に付ける

教師の発問 「なぜルールを守ることが必要なのか。」

生徒の反応 「決まっているからです。」

「それがないとスポーツが成立しないからです。」

教師の再発問

「その通り。それだけでなく、例えばコート整備を行わなかったら、次に使う人はどう思うか。例えば、ごみの分別、正しく行わなかったら、片付ける人はどうなるか。」

「ルールを守ることによって、自分に関わる人が気持ちよくプレーできます。」

「ルールがあるのは競技だけに限らず、施設の使用方法、学校生活、社会生活でも同じです。」

生徒の再反応

「ルールを守ることが、感謝の気持ちを伝える第一歩です。」

「誰の力も借りず、自分だけの力で部活動の目標と目的を達成することができているか。」

「できません。」

「普段どのような人に支えられているか。」

「家族・教師・友人・対戦相手をはじめ、大会運営者・地域の方々等、様々な人がいて、部活動ができます。」

◆感謝の気持ちを表す

教師の発問 「感謝の気持ちを相手に伝えるにはどうしたらよいですか。」

生徒の反応 「態度で示すことです。」

「あいさつ・言葉遣いをしっかり行うことです。」

「人がされて喜ぶことをすることです。」

「その通り。それは生活のどの場面か。」

「その通り。それは生活のどの場面か。」

教師の再発問

「その通り。それは生活のどの場面か。」

「その通り。それは生活のどの場面か。」

「その通り。それは生活のどの場面か。」

「その通り。それは生活のどの場面か。」

「その通り。それは生活のどの場面か。」

「その通り。それは生活のどの場面か。」

生徒の再反応 「部活動の場面だけでなく、日常生活の様々な場面で意識しなければいけないと思います。」

◆人間的な成長と競技の関連付け①

教師の発問 「試合で勝つために、相手の心理を読んだり、弱点に気付いたりするためにはどうしたらよいか。」

生徒の反応 「わかりません。」

教師の再発問 「テニスコートだけでなく、普段から、他人の気持ち

を考えて行動したり、困っている人に気付いて助けた  
りすること、つまり、気配り・心配りができれば、競  
技中も気付けることが増えるのではないか。」

生徒の再反応 「他人に対する気配りや心配りが、競技力向上につな  
がると思います。」

◆人間的な成長と競技の関連付け②

教師の発問 「試合で勝つためには、対外試合（練習試合）を多く  
こなさなければならぬが、練習試合や各種大会にた  
くさん参加するためにはどうしたらよいか。」

生徒の反応 「他校に練習試合をたくさんお願いすることです。」

教師の再発問 「マナーが悪かったり、相手を思いやる行動ができな  
かったりするチームと練習試合がしたいか。周囲から

応援される人間になるには。」

生徒の再反応 「道徳性を身に付けることで相手に信頼されたり、応  
援されたりすることが大切です。」

(二) **練習や試合等、実際の活動の中での指導例**

◆規範意識を身につけるために

- ・ 校則をはじめ、社会のルールを守る。
- ・ 集合時間を守る。
- ・ 部室他、関連施設をきれいに保つ。

- ・ 道具を丁寧に扱う。
- ・ さわやかな服装・頭髪で生活する。

◆感謝の心を育むために

- ・ 支援をしてくださった方に礼状を書く。
- ・ 誰に対してもさわやかな挨拶をする。

- ・ 学校・地域に対して奉仕の精神をもつ。（清掃活動・ボランティア活動の実施）

◆他人を思いやる人間になるために

- ・ ボール拾いを素早く行う。
- ・ コート整備を丁寧に行う。
- ・ 気配り・目配り・心配りをし、困っている人を助ける。
- ・ グループエンカウンターを利用した練習やミーティングを行う。

例一……新チームになって約一カ月後、部員それぞれの長所・短  
所を全員で把握するために、グループワークに取り組みせ  
る。（別紙資料1）

例二……引退を控えた三年生に、後輩に向けたメッセージを書か  
せる。（別紙資料2）

例三……ポジションが固定され、それぞれの役割を理解した頃、  
自分の本来のポジションとは異なるポジションを練習さ  
せ、それぞれの役割を理解させる。

(三) **生徒自らが成長を記録する**

- ・ 生徒の状況に応じて、毎日から週に一度程度、練習メニューや反省・  
次回への課題等をまとめさせる。教師は、声かけやコメントの記入を  
行うとともに、成長の記録を累積、整理していく。

## 五 部活動以外の場面での期待される生徒の変化

- ・ 教師・地域住民等に挨拶をすることができる。
- ・ 校則をはじめ、社会のルールを守ることができる。
- ・ 学校生活・家庭等で率先して仕事を引き受ける。
- ・ 地域のボランティア活動に参加する。
- ・ 施設・道具を大切に扱う。

## 六 考察

「試合の勝ち負けよりも大切なことがある。」という話をした当初は、生徒の間には戸惑いも見られた。しかし、東日本大震災及び原子力災害からの復興に向けての様々な支援や、周りから信頼される社会人とはどのような姿か、といった問いかけを続けた結果、生徒に少しずつその考えが浸透していったと感ずる。

例えば試合会場では、学年が上がるにつれて、自分たちの準備運動よりも優先して会場設営を手伝う姿が見られるようになった。

引退を控えたある三年生の部活ノートに、「本当に大切なのは、部活動を引退してから、学んだことを生かしてどう成長していくか、ということ学びました。」と書かれていた。このことから、部活動を通しての道徳教育は一定の成果があったと思われる。

ミーティングの効果については、「別紙資料1」を活用したところ、普段言葉にしにくい部活動や部員に対する思いを出し合うことができ、その後の部活動の雰囲気は良くなった。一人一人の変化としては、自分では気付かない自分の長所を理解しながら活動することができるようになり、長所を伸ばすよい契機となった。例えば、責任感の強かった部長が、さらに他の部員の意見を大切にして、部をまとめるようになった。「別紙資料2」については、「最後の大会を終えたら部活動は終わり」という考えではなく、

「後輩に伝統を受け継ぐ」という考えに持つことができ、三年生は引退後も定期的に部活動に参加し、後輩を指導した。他者を思いやり、他者のために行動する力が身に付いたと考える。

高等学校での道徳教育は、道徳的実践力を発揮する場を意図的に設定することで、社会に出てからの道徳的実践につながっていくと考えられる。

(別紙資料1)

## ミーティング資料

よいチームになるためには、まずお互いの「よいところ」を認め合う必要があります。そして、お互いのよいところを皆で励まし合っていくことが大切です。

よい雰囲気の中で練習をするために、自分の考えをもとに、皆で意見を出し合って話し合しましょう。

1 メンバーそれぞれの「よいところ」「励ましの言葉」を記入する。

	よいところ	励ましの言葉
A		
B		
C		
D		

2 雰囲気のよい練習をするためにはどうすればよいか、アイデアを記入する。

3 みんなで話し合う。

(1) 良いところ

(2) 出た意見をもとに、一人一人のよさが生かされるように、部全体で大切にしてい  
くことを整理する。

氏名 \_\_\_\_\_

(別紙資料2)

## ソフトテニス部ミーティング(3年生用)

三年生、インターハイ県大会お疲れ様でした。県総体、頑張ってください。さて、三年生の使命は、後輩たちを励まし育てることです。あなたたちが後輩たちに伝えたいことを書いてください。あなたたちの背中を見て、後輩たちが育ちます。今後の生活態度も、期待していますよ。後輩たちは、あなたたちの頑張りを見えています。先輩からのエールは、後輩たちの一番の力になるでしょう。顧問の言葉より、何倍も力があるはずです。彼らのコーチになったつもりで、メッセージを書いてください。

### ■ A (後輩の名前)

よいところ	励ましとアドバイス

### ■ B (後輩の名前)

よいところ	励ましとアドバイス

### ■ C (後輩の名前)

よいところ	励ましとアドバイス

### ■ D (後輩の名前)

よいところ	励ましとアドバイス

氏名 \_\_\_\_\_





「ふくしま子ども宣言」作文コンクール  
「モラル・エッセイ」コンテスト

作品集

「社会の一員として人の役に立つ」あなたの決意をお聞かせください。

（「ふくしま子ども宣言」作文コンクール）

あなたの心温まる体験談・すてきなエピソードをお聞かせください。

（「モラル・エッセイ」コンテスト）

【最優秀賞】

## 被災地を笑顔に

福島市立庭坂小学校

六年 梅津 悠らら

私は東日本大震災で起きた津波の被災地に木や植物を植えて、緑豊かにして、みんなを笑顔にしたいです。なぜなら、浜通り地方の海側はいまだに震災直後のままで、修理もそうじもされていないからです。私は砂浜周辺にある、ごみや破片などを片付けるボランティアや周りに木や植物を植えるボランティアなどに参加したいです。

例えば、花言葉が「笑顔」や「明るい」などといった花を植えたりますと、それを見たみんなの心がほかほかして、あの恐怖の出来事が少しはやわらぐでしょう。避難している方々は、今もわすれられないと思います。だから、私が自然を増やし、それを見せることでみんなをハッピーに、笑顔にさせてあげたいです。もしも私も避難していたら、恐怖にたえられなかったと思います。しかし、花を見れば少しは気持ちやわらぎます。

将来、このようなことを全世界でもやって、世界中のみんなを笑顔にしていきたいです。

【優秀賞】

私はくじけない

南相馬市立大甕小学校

六年 大畑 滯奈

私は、東日本大震災を経験した一人として将来「命を救い守る」仕事に就きたいと思って居ります。

今まで体験した事のない大きな地震・津波によって、私は友達や親せきを亡くしました。そして考えもしなかった原発事故、その事故によって避難を余儀なくされた祖父が当時人工透析をしており、家族は祖父の透析を引き受けてくれる医療機関が見つからず苦勞した事を今もって強く記憶にあります。

原発事故によって起きた放射線、目に見えない、臭いも無いだけに恐怖です。今後、ずっとつづくであろう放射線の検査、私達は健康でいられるのか不安でいっぱいです。

しかし、逃げられない現実なのです。誰よりも「命」の大切さを知る一人として将来、医療に関わる仕事に就き福島に住む人達の希望になれるように、そして友達や親せきを亡くした悲しみを背負い、たくさんの人の役に立てるようにがんばって行こうと思っています。

自分でできる事

南相馬市立大甕小学校

六年 川島 大知

ぼくの夢、それは小学校の先生になる事だ。もし先生になったら、大甕小学校につとめたいと思う。それは、自分の後輩達に、東日本大震災から学んだ二つの事を伝えていきたいからだ。

一つめは、命の大切さだ。南相馬市では、五百人以上の方が亡くなったそうだ。残念ながらその中に大甕小学校の児童もふくまれていた。校庭に植えられている五本桜の慰霊の意味と、命の大切さを伝え続けたい。

二つめは、助け合う事の温かさだ。震災直後、家に帰れなかったぼくを、避難させてくれた地域の方々、暗くて寒い時にはげましてくれた方々、たくさんの支援を送ってくれた全国のみなさん。ぼくは、こんなにたくさんの人に支えられている温かさを改めて感じた。

今も、避難生活は続いているが、自分でできる事は、しっかり勉強し、夢に向かってがんばる事だと思う。十年後二十年後の福島を支える一人になりたい。

## 福島をみつめて

須賀川市立第一小学校

六年 永田 さくら

福島の農業を大切にしていきたいです。その理由は、私もおじいちゃんのようにおいしいお米やお野菜を作ってみんなに食べてもらいたいからです。

私のおじいちゃん家は、農家で、いつもおいしいお米や新鮮な野菜を届けてくれます。

私は休みになると、時々おじいちゃん家に行き、一緒に種をまくのを手伝います。初めは、小さい苗でも日が経つとだんだん大きくなります。私は雑草をぬいたり、水をあげたりすることしかできませんが、おじいちゃん毎日様子をみに行ったり肥料をあげたり自分の子どものように大事に育てています。

愛情のこもったお米やお野菜は、私たち家族に元気と笑顔をくれます。

農業は、天気にも左右されるので大変な仕事だと思えます。でも、食べてくれるみんなが笑顔でいっぱいになるように心のこもった食材を毎日の食卓に出せるように、農業の勉強をしたいです。

## 私にできること

いわき市立小川小学校

六年 志賀 明優

たくさんの方の命をうばい、たくさんの方の悲しみを生んだ東日本大震災から、二年半が経とうとしている。今、私にできることは何だろう。自分の使命は何だろう。

私は、夢に向かって努力したい。私の夢は、医者になること。病気で苦しんでいる人を笑顔にしたい。そして、震災の時にお世話になった全ての人々に恩返しをしたい。大震災が起こった時、私はたくさんの方に支えられた。いつもそばにいてくれた家族。避難する時、家へ迎え入れてくれた親戚。避難先で私を励ましてくれた先生。転入してきて、不安でいっぱいだった私と仲良くしてくれた友達。たくさんの方の支援をしてくれた日本中の人々。医者になって社会の役に立ち、感謝の気持ちを込めて、恩返しをしたい。

今、私は夢に向かって、何事も一生けん命に取り組み、少しずつ医者になるための勉強もしている。東日本大震災の事を、忘れない。そして、夢に向かって、精一杯努力したい。

## 心を守る

いわき市立中央台南中学校

二年 小野 夏海

地震が起きた瞬間、私は下校の途中でした。おさまるのを待って急いで家に帰りました。メチャメチャになった誰もいない家の中で一人でいるのは怖くてしかたがなかったです。そして私は、小学校に戻ることにしました。そんな時に助けてくれたのが小学校の先生でした。先生は、

「お母さんは、もうすぐ来るからね。」

と言って私をなぐさめてくれました。先生にもお子さんがいて、本当は急いで自宅に帰りたいと思ったに違いないと思います。先生方は教室を開放し、余震が起こる中、やさしく私達を守ってくれていました。そして家族が全員そろった時には夜の七時がすぎていました。

次の日、檜葉の方達が避難してきた時も、先生は体育館へ誘導し、いろいろと活動していました。いつも、「困っている人を助けるんだよ。」

と言っている先生方は実際に困難にぶつかった時、優しく手をさしのべていたのです。

それから私は「先生になって小さい子たちを守ってあ

げたいなあ。」と思うようになりました。学校の先生になるために必要な勉強をしっかりと、立派な教員になると心に誓ったのです。そして、東日本大震災のことをたくさんの人に伝えて「命の大切さ」を次世代へ伝えると共に優しさや人を思いやる心を子供たちと育てていきたいです。

ただ泣いていた私も中学生になり、次にまた何らかの災害があっても、立ち向かえる心が出来ているつもりです。今度は私が子供たちを守ります。「泣かなくても大丈夫だよ。一緒にいようね。」あの時の先生のように……。

## 魔法の言葉

郡山市立緑ヶ丘中学校

三年 藤田 ももこ

「ありがとう。」

この言葉は言った側も言われた側も嬉しくなる、素敵な言葉です。私はこの言葉を伝えたい人がたくさんいます。家族、友達、先生……。たくさんの人と関わりを持っていると、感謝の言葉を伝えたい気持ちが増してくるのです。

両親には私たち娘のために働いてくれてありがとうと、妹にはいつも楽しい笑顔で和ませてくれてありがとうと。友達には、いつも一緒にいてくれて、一緒に笑ってくれてありがとうと、先生方には、相談にのって下さってありがとうございます、と。

しかし、こう思っている、感謝の気持ちを実際に直接、本人に伝える事は、勇気がいるものです。手紙なら、書くだけなので、伝える事は案外簡単です。ですが、感謝の気持ちを伝えるならば、やはり、勇気を持って本人に直接伝える事が一番ふさわしいのではないのでしょうか。

日頃思っている、なかなか伝える事の出来ない、こ

の五文字。

「ありがとう。」

この感謝の言葉は人と人をつなぐ、素敵な魔法のよ  
うなものと言えるでしょう。簡単に伝える事ができない  
からこそ、重みのある大切な言葉なのです。

私は、この素敵な魔法の言葉を積極的に相手に伝えて  
いきたいと思います。そして、良い人間関係を作りたい  
です。そのためには、いつも感謝の気持ちを忘れないよ  
うにしたいと思います。

感謝の気持ちを伝える魔法の言葉。

「ありがとう。」

## 温かい通学路

天栄村立湯本中学校

三年 小山 真梨

私の住む天栄村湯本地区では、毎年冬になると、腰の高さを優に超える雪が降ります。朝になると多くの地域の人が自宅の前の雪かきをします。私もよく、朝早くに起こされて、母が出かける前に雪をきれいに掃いたりします。これは、そんな時に見かけた地域の方の話です。

その日は冬休みに入って間もなくの頃で、近年希に見るほどの豪雪でした。朝早くに起こされた私は、若干不機嫌ながらも、道路側の雪かきをしていました。まだ夜明け前で薄暗い中、私は一人のおじいさんを見かけました。その方は、私の家から少し離れた山の近くに住んでいるおじいちゃん、夏によく、バイクに乗っている方でした。その方が行っていたのは、私の家の近くにある歩道の雪かきでした。祖母に聞くと、そのおじいちゃんは、毎日同じ時間にこの歩道の雪かきを行っているということです。

おじいちゃんの家は、この歩道からけっして近くはありません。家の前の雪かきもしなくてはならないはずで、ましてや八十過ぎのおじいちゃん、雪かき用の道具

を持って歩いてくるのもつらいでしょう。けれどそのおじいちゃんは、毎日、私たちや小学生、地域の人が歩く歩道をきれいに歩きやすくしてくれているのです。

私の住んでいる地域では、このようなことをしてくれている人はおじいちゃんだけではありません。歩道の近くの花壇に春になると花を植えてくれるおばあちゃん、通学路の土を掃いてくれるおじいさん、歩道に出ている木を切ってくれるお兄さん。誰も強制されているわけではありません。自分から進んで行っているボランティアなのです。私もそんな大人になりたいと思いました。

私の使っている通学路は、地域の人たちに守られている温かい通学路です。

## 私と家族を繋ぐ夕食時間

福島県立白河高等学校

一年 藤田 純佳

休日の夕方、我が家には「いただきます。」の音が響く。父、母、妹、そして私の四人、家族全員が食卓を囲む時間がやって来る。一週間の中でも、家族がみんな揃うのはこのときぐらいだ。大皿のおかずをみんなで取り合って食べる。このひとときを私は心待ちにしている。

今日の夕ご飯は何だろう。夕食前から台所に行き、「何か手伝うことある。」と尋ねるのが私の楽しみだ。普段は面倒くさがってろくに手伝いをしない私と妹も、このときは協力して皿を並べ、調味料を用意し、いつでも食べられるように、テーブルの上を準備する。食事が始まると、食べたいおかずの取りあいっこだ。でも、その合間にこの一週間にあったことを話すのは忘れない。「この間学校でね……。」「そういえばニュースで……。」何気ない会話が私たち四人を和ませる。「しゅゆはどこだっけ？」独り言のように呟く私に、妹はさつとしゅゆを手渡ししてくれる。口げんかをしたことなんて忘れ、夕食のあいだはみんなが笑顔だ。

仕事で忙しい父、仕事と家事もこなす母、部活を頑張

る妹。それぞれ悩み、考えることはあるだろうに、少なくともこの夕食のときだけは、みんなが楽しそうだ。私がお楽しみにする夕食、家族の顔を見て私はさらに嬉しく、もつとわくわくしてくる。

「幸せ」って何だろう？ お金があること、物をいっぱい持っていること……。いや、違う。「家族」がいることだ。家族がいれば何でも乗り越えられる。家族がいれば何だって楽しい。それを私に実感させてくれるのが、休日の夕食だった。家族と私をつなぐ食事の大切さ。この機会に家族で食事をする大切さを見直してみよう。そして、今週もまた私の大好きな、休日の夕食の時間がやって来る。

## 母の愛情

福島県立白河高等学校

一年 佐藤 彩

母の愛情を改めて感じる事ができる出来事がありました。

私が中学二年生の時、反抗期だった私は、両親から言われることに対していつも反抗し口答えばかりしていました。その日も、母に成績のことでお説教され私は口答えをし、そのままけんかになってしまいました。その後寝るまで母とは冷戦状態でした。私はいらいらしながらベッドに入り、眠りにつこうとしました。すると大切なことを思い出しました。そう。明日は、お弁当を持参しなくてはならない日だったので。私は母にこのことを言うか迷いましたが、いらいらしていたし、母と口をききたくなかったので、もうどうにでもなればいい、と投げ遣りになりそのまま寝てしまいました。次の日の朝、母もまだ怒っているのか話しかけてきません。私はお弁当のことを思い出し、どうしようかと悩んでいました。学校へ行く準備も済み、出かけようとした時、リビングのテーブルの上に、きちんと包まれたお弁当が一つ置いてあったのです。私はそのお弁当を見た瞬間、胸がいつ

ぱいになりました。お礼を言いたかったのですが母は既に仕事に行っており、言うことができませんでした。学校の昼食の時間、私はいつもよりもっと味わってお弁当を食べました。そして家に帰ったら必ず母にお礼を言う、そしてちゃんと謝ろうと強く思い、その後、母と仲直りすることができました。

私は、母はちゃんと私のことをみているんだなと、とても嬉しく思いました。それなのに母にたてついて反抗していた自分がとてもはかしく思い、自分を見つめ直すことができました。

母の愛情は私にとって力の源であり、心の支えです。そんな愛情をくれる母に私ももっと恩返しをしたいと思っています。

おじいちゃん

福島県立白河高等学校

一年 菊地 郁恵

私は、四人兄弟の末っ子として、八人家族に生まれた。私の両親は共働きなため、幼い頃からずっと祖父母といふ時間の方が多かった。そのため、祖父母には可愛がられてきた。特に、祖父には、「めんこちゃん」という愛称で呼ばれてきた。福島県の方言の一つである「めんこい」からとったものである。祖父は、暇さえあれば近所の人とよく話す。話す事は決まって世間話と私の自慢話であった。

幼い私にとっては嬉しかったことだが、高校生になるにつれて、それが嫌になっていった。

また、家に帰るとすぐその日の出来事を聞かれ、帰りが少しでも遅いと、いつもは優しい祖父が、その時ばかりは怖いのである。しかし、部活を終え、疲れている私にとっていつの日からか、うっとうしいと感じ、無視するようになっていた。それでも朝になると祖父は笑顔で、学校へ行く私に一声かけてくれるのだが、無言で家を出るのがほとんどで、それが日常となっていた。

しかしある日、いつものように帰ると、祖父母の「お

かえり。」の声が聞こえないのだ。茶の間をのぞくと、そこに二人の姿はない。母から、祖父が体調をくずし検査をしていることを聞いた。祖父は過去に脳梗塞を二度患っているため、足に障害をもち、やや体が弱い。私は、恐怖と罪悪感で、その日は眠れなかった。

朝早くには祖母がいて、祖父が入院することを聞き、私はお見舞に行った。すると、そこで見る祖父の姿はすっかり病人で、私は悲しくなった。今日は自分から。と思いは笑顔で「おはよう。」と声をかけてみた。すると

「おじいちゃん、めんこちゃんの笑顔見ると嬉しくて、涙でちゃうなあ。」

祖父の言葉を聞くと、涙が溢れてしまった。

いつも大事に思ってくれてる人がいることがどれだけ幸せなのか、と痛感した。

## 今を生きる

福島市在住

宍戸 悦子

一昨年の今頃、友人のご主人が不慮のバイク事故で亡くなられました。まだ五十歳の若さで、これからという時の突然の出来事でした。突然襲った悲劇にショックを受けているだろうと想像していた友人の口から出たのは落ち着いた予想外の言葉でした。

事故が起きた日は、朝ツーリングの誘いの電話があり、ご主人は喜んで出かけられました。一一五号、土湯峠の道の駅近くを走行中に心筋梗塞の発作を起こし、意識を失いました。運転者を失ったバイクは、幸いにも道路の側溝にはまるように停止しました。結局、懸命の救命措置も叶いませんでした。

友人いわく、大好きなバイクに乗ったまま死ぬなんてこれ以上の死にはありません。時間的には短い人生となってしまうましたが、彼の人生を想う時、充実した家庭、仕事そして最後まで前向きに生きることができ、それはすばらしい人生であり、ご苦労様でしたと言いたいと。

人の人生が幸せなものだったかどうかは、その人の生

きた時間の長さでもなく、いかに充実した時を過ごすことができたかによって計られ、その最期の瞬間まで自分が望むかたちで生きることができたなら、それはきつと素晴らしい人生だったと言えるのではないのでしょうか。人生とは生きる目標（ゴール）に向かって歩んでいくマラソンのようなものです。その一日一日の日々の積み重ねが大事であり、人生そのものです。

先日起きた東日本大震災もそうですが、人生に於いてはいつどんなことが起こるか分かりません。私は与えられた人生を、いつでも今日の日が人生最期の時と考え、一瞬一瞬を大切に精一杯生きることが大事だと想います。

自分が信じた道を、悔いの残らないように。  
一日一日を大切に。

小学校第5学年及び第6学年	中 学 校
(1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。	(3) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4) 誠実に、明るく楽しく生活する。	
(5) 真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4) 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
(1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1) 礼儀の意義を理解し、時と場に合った適切な言動をとる。
(2) だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。	(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。	(3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
(4) 謙虚な心もち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。	(4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心もち謙虚に他に学ぶ。
	(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。	(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心もち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きること喜びを見いだすように努める。
(1) 公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。	(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
(2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(2) 公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	(4) 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
	(8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
	(9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8) 外国の人々や文化を大切にする心もち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

# 「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年
<b>1 主として自分自身に関すること</b>	
(1) 健康や安全に気をつけ、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
(2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4) うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4) 過ちは素直に改め、正直に明るいい心で元気よく生活する。
	(5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
<b>2 主として他の人とのかかわりに関すること</b>	
(1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2) 幼いや高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3) 友達と仲よくし、助け合う。	(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
<b>3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること</b>	
(1) 生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。	(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にす
(2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にす
(3) 美しいものにふれ、すがすがしい心をもつ。	(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
<b>4 主として集団や社会とかかわりに関すること</b>	
(1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にす	(1) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
(2) 働くことよさを感じて、みんなのために働く。	(2) 働くことよさをし、進んでみんなのために働く。
(3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合っ
(4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	(4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合っ
(5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5) 郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。
	(6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

◇特別寄稿

永田 繁雄氏 東京学芸大学 教授

◇監 修

林 泰成氏 上越教育大学副学長・同大学院 教授  
早川 裕隆氏 上越教育大学大学院 教授  
白木みどり氏 上越教育大学大学院 准教授

◇表 紙

朝倉 悠三氏 県美術協会会員 馬の絵コンクール審査員

◇挿 絵

窪木富士美氏 いわき市立郷ヶ丘小学校教頭  
赤沼 良晃氏 郡山市立日和田中学校教諭  
大石 正文 義務教育課指導主事

◇作成協力者

森下 裕子氏 神山復生病院復生記念館  
西本由美子氏 NPO 法人ハッピーロードネット代表  
遠藤由美子氏 奥会津書房編集長  
猪苗代湖ズの皆様

◇作成委員

委員長	吉田 尚	前いわき市立中央台南中学校長（現いわき市教育委員会教育長）
副委員長	渡邊 真魚	郡山市立明健中学校教頭
委員	上石 和子	福島市立鳥川小学校教諭
	大波 陽子	国見町立県北中学校教諭
	伊藤 一英	盲学校教諭
	渡邊 裕樹	田村市立岩井沢小学校教頭
	田中 淳一	平田村立蓬田中学校教頭
	阿部 浩幸	須賀川市立第三小学校教諭
	佐久間孝子	田村市立都路中学校教諭
	橋本 敦子	田村高等学校教諭
	仁科 美穂	白河市立白河第五小学校教諭
	三浦 淳子	西郷村立西郷第二中学校教諭
	石田 紀子	会津若松市立第二中学校教諭
	安西 由佳	会津高等学校教諭
	稲本 澄子	南会津町立田島小学校教諭
	紺野 成	相馬市立向陽中学校教諭
	小松 直人	新地高等学校教諭
	窪木富士美	いわき市立郷ヶ丘小学校教頭
	阿部 智	遠野高等学校教諭
	佐藤 裕子	教育センター指導主事
	熊谷 幸司	県北教育事務所指導主事
	本田 一意	県中教育事務所指導主事
	小野 聡	県南教育事務所指導主事
	渡部 朋史	会津教育事務所指導主事
	栗木 孝直	南会津教育事務所指導主事
	星 健一	相双教育事務所指導主事
	加藤 満福	いわき教育事務所指導主事

#### ◇県教育庁義務教育・高校教育課

飯村 新市	義務教育課長
佐藤 秀美	義務教育課主幹
菊池 篤志	義務教育課主任指導主事
鯨岡 寛泰	義務教育課主任指導主事
伏見 珠美	義務教育課指導主事
助川 徹	義務教育課指導主事
増子 春夫	義務教育課指導主事
阿部 洋己	義務教育課指導主事
大内 克之	義務教育課指導主事
菊池 淳一	義務教育課指導主事
大石 正文	義務教育課指導主事
原 孝行	義務教育課指導主事
大竹 孝喜	義務教育課指導主事
小松 信哉	義務教育課指導主事
菅野 重徳	義務教育課指導主事
佐藤 文男	高校教育課主任指導主事
鈴木 憲治	高校教育課指導主事

#### ◇出典

たった一秒の「ありがとう」

法務局人権擁護局・全国人権擁護委員会連合会主催

第32回全国中学生人権作文コンテスト福島県大会 最優秀賞

大熊町立大熊中学校 2年 岡田愛莉花さんの作文

道標 「富士登山への挑戦」

全国盲学校長会・毎日新聞社点字毎日・毎日新聞社事業団主催

平成25年度東北地区盲学校弁論大会

福島県立盲学校 2年 和神 真一さんの作文

#### ◇参考文献

「人間の碑 ― 井深八重への誘い ―」 井深八重顕彰記念会 2002年

「会津のこころ」 中村彰彦 2009年

「神山復生病院120年の歩み」 財団法人神山復生病院復生記念館 2009年

## 表紙に寄せて

私が子どもの頃、売られゆくわが子を必死で目で追いながら、お母さん馬が馬小屋の中から大粒の涙を流して、前足でドンドン戸をたたいていた光景が忘れられない。その音は三日三晩続いていた。あの頃は馬から牛・山羊・あひる・にわとり・うさぎ・犬・猫・小鳥に至るまでたくさんの動物たちに囲まれて、優しさとか愛とかを教わることが多かった。人間は万物の霊長などという考え方は、高度な感情をもっている動物たちに申し訳ない気がする。生きとし生ける者同士、はかない命ある者同士だもの、人間はもちろんのこと、動物たちとも対等に深くかかわって生きられれば、もっともっと人生が豊かに広がっていくはずである。

県美術協会会員 馬の絵コンクール審査員 朝倉 悠三

---

平成26年3月1日 印刷

平成26年3月11日 発行

編 集 福島県教育委員会  
発行所兼印刷所 株式会社 プロセス印刷

---

道徳教育総合支援事業（文部科学省）により制作しました。

